



稗田文芸賞
メツタ斬り！

稗田阿求 編

浅木原忍 著
すけひろゆう 画

稗田文芸賞
メツタ斬り！

稗田阿求 編



編著者紹介



稗田阿求 (ひえだの あきゆう)

第九代阿礼乙女。稗田出版代表、幻想郷文芸振興会副代表、稗田文芸賞選考委員を務める。阿礼乙女として『幻想郷縁起』の編纂を手がけるほか、玄樂や紅茶への造詣も深く、『玄楽団の歴史』『紅茶過伝』などの著作がある。

パチュリー・ノーレッジ

作家、紅魔館附属大図書館長。幻想郷文芸振興会代表、稗田文芸賞選考委員を務める。著作に『魔法図書館は動かない』『赤く細い川を渡れ』『永遠より長い夢』など。短編アンソロジーの編纂なども手がけている。



博麗霊夢 (はくれい れいむ)

博麗の巫女。博麗神社出版事業部代表。著作に『幻想郷風土記』『博麗神社神霊縁起』などがある。編集者業を務める傍ら、文々。新聞や幻想演義で書評も手がけ、伊吹萃香との名コンビぶりで人気を博す。

伊吹萃香 (いぶき すいか)

エッセイスト、コラムニスト、書評家。幻想演義連載の酒エッセイ『孤独の呑んべえ』で人気を博すほか、無類の小説好きとして書評も手がけ、書評集『二十億光年の誤読』などの著作がある。



稗田文芸賞とは、幻想郷文芸振興会が主催する、優れた小説作品を対象とした文学賞。
 後援は稗田出版社と文々。新聞。

■概要

幻想郷における文芸の振興を目的として、第一一八季より創設。睦月から師走までの間に発行された小説作品から候補作が選定される。受賞者には正賞として盾、副賞として賞金五十貫文が贈られる。なお、一度受賞した作家の重複受賞は不可。

毎年師走中旬に候補作が発表され、下旬に行われる選考会において選考委員の合議により受賞作が決定する。受賞作の発表は文々。新聞紙上にて行われる。

現在の選考委員は稗田阿求、射命丸文、八雲紫、パチュリー・ノーレッジ、西行寺幽々子、上白沢慧音の六名。なお第三回以降、八雲紫は毎回「冬眠中につき書面解答」という形で選考会を欠席している。

(Mukyupedia - 稗田文芸賞の項より抜粋)

序

近年の幻想郷における文芸の隆盛は、めざましいものがある。

かつて幻想郷における書籍といえば、私の纏める『幻想郷縁起』に代表されるように、知識の伝達に主眼を置いた実用書、専門書の類が気まぐれに発行され、霧雨店の片隅にある書籍コーナーを埋めるだけのものではあった。

それが今や、毎月数多くの小説の新刊が発行され、書店の棚をにぎわし、それを人々や妖怪が買い求め、そこに刻まれた物語を楽しんでいる。大人も子供も、人も妖も隔てなく物語の虜である。およそ数年前までは考えられなかった事態だ。

この文芸の振興に大きな役割を果たしてきたのが、先日第七回を数えた幻想郷初の文学賞、稗田文芸賞に他ならない。

本書は、過去七回の稗田文芸賞の受賞作、候補作と選考過程を纏めることを主眼としたものである。またナビゲートとして、『文々。新聞』紙上に掲載される人気コラム『稗田文芸賞メツタ斬り!』を併録し、一般的な通りの良さから本書のタイトルにも採用させていただいた。

さらには賞の設立者にして第一回受賞者であり、現在は選考委員を務めるパチュリー・ノーレッジ氏にもゲストとして登場願ひ、賞の設立に至った内情と、今後の幻想郷の文芸と稗田文芸賞の目指す道のりについて忌憚無い意見を伺うことができた。

過去七回、受賞作、候補作ともに多くの名作を数えてきた稗田文芸賞の決定ガイドと言える本に仕上がったという自負がある。

これから稗田文芸賞について知りたいという諸氏にはもちろんのこと、稗田文芸賞マニアを自負する読書家諸氏にも楽しんでいただける本になったと思う。

ただ面白い小説を知りたいという諸氏へのブックガイドとしても有用であろうと思われるので、是非ご活用いただき、楽しい読書ライフを送られたい。

第一二四季 弥生

稗田出版代表・幻想郷文芸振興会副代表 稗田阿求

追伸……結婚しました。

稗田文芸賞メツタ斬り！ 目次

序—稗田阿求	…006
パチュリー・ノーレッジ&稗田阿求 対談 『稗田文芸賞のはじまりとこれから』 (第一回稗田文芸賞)	…009
第二回稗田文芸賞 前候補作紹介&選評	…023
博麗霊夢と伊吹萃香のメツタ斬り！対談 『で、結局稗田文芸賞ってどうなの？』	…041
第三回稗田文芸賞メツタ斬り！&選評	…051
第四回稗田文芸賞メツタ斬り！&選評	…073
第五回稗田文芸賞メツタ斬り！&選評	…097
第六回稗田文芸賞メツタ斬り！&選評	…123
第七回稗田文芸賞メツタ斬り！&選評	…153
博麗霊夢と伊吹萃香の 稗田文芸賞メツタ斬り！あとがき	…178
作品別・作家別索引	…180
特別付録—霧雨書店業務日誌	…183
あとがき	…192

パチユリー・ノーレッジ
& 稗田阿求 対談

『稗田文芸賞の

はじまりとこれから』

(第一回稗田文芸賞)



とにかく新しい小説が読みたかった

稗田阿求（以下阿求）　そもそも稗田文芸賞は、うち（稗田出版）が後援しているのと、稗田の名を冠した方が幻想郷では目につくだろう、ということでのこの名前になっていますけれど、別に発端は私というわけでも稗田出版でもなく、パチュリーさんなんですね。

パチュリー・ノーレッジ（以下パチュリー）　いきなり暴露から始めるの？　まあいいけど。

阿求　第一回は、紅魔館で行われたごく私的な小説コンテストでした。おかげで正式な候補作リストも選評もなく、ただ受賞作の『魔法図書館は動かない』と、後に《第一回候補作》として刊行された作品数点が存在しているわけですが。今日は幻想郷文芸振興会と稗田文芸賞の発起人であるパチュリーさんに、そのあたりの詳しい経緯と、幻の第一回稗田文芸賞の選考過程についてお話していただこうと思ひまして。

パチュリー　懐かしい話になるわね。私たちが幻想郷にやって来てすぐの頃だったわ。

阿求　パチュリーさんといえば、幻想郷最大の図書館である紅魔館付属大図書館の主というところで有名ですが、あの図書館は別に、パチュリーさんが魔法使いだからといって魔導書の類に蔵書を限っているわけではないのですよね。

パチュリー 魔導書が多いけれど、小説、エッセイ、宗教書、美術書、料理書、学術書まで大抵の本は揃っているわよ。だいたい外の世界の本だけだよ。

阿求 そんな無数の本に囲まれて暮らしていたパチュリーさんは、当時の幻想郷の出版状況を知って愕然とした。それが全ての発端だったそうですね。

パチュリー レミイの起こした異変（※註1）が一段落した後だったわね。小悪魔を人里に買いい物に行かせたとき、ここではどんな書店があって、どんな本が売っているのか見てきなさいと命じたの。面白そうな本があれば、あなたの見立てで買ってきていいわ、と言ってね。ところが、帰ってきた小悪魔の話聞いて驚いたわ。そもそも人里に書店が無いっていうんだもの。阿求 確かに当時、本を扱っている店といえば霧雨店か、魔法の森の方にある香霖堂ぐらいのものでした。幻想郷内の出版物を扱っているのは実質的に霧雨店ぐらいでしたね。

パチュリー それを聞いたときには、まさか文字もない未開の地にやってきてしまったのかと眩暈がしたわ。

阿求 いくらなんでもそれは（苦笑）。

パチュリー でも、新聞はあるようだったし、小悪魔に調べさせたら人里の識字率は随分と高そうだったから、不思議に思ったの。教育は行き届いている。印刷技術もどうやらあるらしい。なのにこの幻想郷には、不自然なほどに本が無い。本が足りない。

阿求 だから本を増やそうと思った、と。

パチュリー おそらく幻想郷の人々は、本を読む楽しみをまだ知らないだけだと思ったの。だとすれば、これは私が広めなければいけないと、そう思ったわ。

阿求 ……普段あまり活動的でない貴方がそう積極的に動いたのが、少し不思議です。

パチュリー だって、仕方ないじゃない。

阿求 仕方ない、とは？

パチュリー 幻想郷で新しい本が作られなければ、私が新しい本を、特に小説を読む楽しみが無くなってしまうもの。私はとにかく新しい小説が読みたかったの。図書館の小説はとっくに一通り読んでしまって、学術書を読むのにも飽きていたところだったから。

『魔法図書館は動かない』を推したレミリアの一声

阿求 でもそこで、どうして自分で書く、という方向に行ったんでしょう。幻想郷に小説の面白さを広めるなら、たとえば図書館の蔵書である外の世界の本を使うという手もあったかと思えますが。まあ、あまり外の世界の情報をばらまくと黙っていない妖怪もいますけれど。

パチュリー 蔵書をばらまくなんて、勿体ないじゃない。

阿求 ……仰る通りですね。

パチュリー いろいろ智慧を絞ったのよ。文芸という文化自体が無さそうなのこの幻想郷に、小

説というものを持ち込むにはどうすればいいか。それで思いついたのが、とりあえず何かしらハクをつけて人里で売らそう、という手段だったの。

阿求 そのハクというのが、稗田文芸賞、というわけでしたね。

パチュリー 幻想郷で一番メジャーな読み物は、幻想郷縁起と天狗の新聞だというのは調べがついていたから、そのふたりからのお墨付きを貰えれば幻想郷でも売れると思ったわ。それです。まず私が書き始めたのだけれど、せっかくだから身内にも何か書かせてみることにしたの。レミイはノリノリで、咲夜と美鈴も巻き込んで、四作品が出来上がったわ。

阿求 その四作品が、幻の第一回稗田文芸賞候補作というわけですね。

パチュリー 幻も何も、結局あとで他の三作も稗田出版から本にしたじゃない。

阿求 まあ、そうですね。

パチュリー 私が書いたのが『魔法図書館は動かない』。それにレミイの『クリムゾン・ナイト』、咲夜の『殺人人形とタイムトラベラー』、あと美鈴の『戦国春秋』。(※註2)

阿求 私のところに持ってきたときにはもう、『魔法図書館は動かない』を第一回受賞作として売り出したい、という話になっていましたよね？ 紅魔館内で決めるのなら、主であるレミア・スカーレットさん——ペンネームのミス・レッドラムと言った方がいいですね。彼女の作品でなかったことが不思議なのですが。いえ、作品としては『魔法図書館』の方が確かに優れていると私も思いますけれど。

パチュリー レミイが乗ってきた時点では、私もそうなると思ったわ。これでレミイの作品が目も当てられないものだったらすすがに悩んだらうけど、子供っぽいレミイの趣味が全面に出てる点を除けば読めないものではなかったし。

阿求 ネーミングセンスとか、無闇に残酷描写を入れたがるところとか。

パチュリー 結局レミイの作品は今もそういう路線でそういう層に受けてるんだから、それはそれでいいと思うけど。ともかく、四作品が揃った時点で全員で回し読みしたの。まあ、咲夜は最初からレミイを推すのは解っていたし、美鈴もなんだかんだで主を立てるのは予想してたから、私もレミイのいいわ、っていうことにしようと思ったの。——なのに、レミイの鶴の一声よ。「どう考えても、私のよりパチエの作品の方が面白いわ」って。

阿求 意外と大人なんですね。

パチュリー さあね。レミイの考えていることはときどきよく解らないわ。ともかく、レミイがそう言ってる、咲夜と美鈴にも尋ねたの。パチエの方が面白いでしょう？ っ。咲夜はあくまでレミイのが一番って言い張って、美鈴はただ答えづらそうに小さくなってたけど。それでレミイは私にこう言ったわ。「パチエ、正直に答えなさい。貴方、自分の作品が私のこれに負けていると思う？」

阿求 また答えにくい質問を。

パチュリー 媚びへつらいはレミイの嫌うところだから、私は正直に答えたわ。「私は、私が

一番読みたいものを書いた。だから私にとっては、自分の作品が当然「一番よ」って。

阿求 おー。

パチユリー そしたらレミイは「なら決まりね。私がパチエを推すんだから、私たちの代表はパチエよ」って。

阿求 なるほど。そうして第一回稗田文芸賞受賞作は決定したわけですね。

パチユリー まあ、実際のところはね。

阿求 ？

パチユリー この幻想郷で、本当に小説が売れるのか。大々的に売り出して大コケしたら恥ずかしいじゃない？ 私の作品でその様子見をして、売れるようなら次で大々的に売り出そうとしたんだと思うわ。

阿求 ああ、それで第二回の候補に『ナイトメア症候群』が入っていたんですね。しかし……。

パチユリー それ以上は言わないであげておいて。レミイの機嫌が悪くなるから。(※註3)

阿求 急なことでしたから、当時は本当に参りましたよ。

パチユリー いいじゃない、おかげでそちらも慧音とか妹紅とかを発掘して来れたんだから。ああ、富士原モコって言わないと駄目ね。

阿求 慧音さんは元々書いてもらう予定だったんですけどね。彼女は「自分に小説など書けない」って随分渋りまして、説得には苦労しましたが(苦笑)。

売れるとは思っていなかったし、実際最初は売れなかった

阿求 そうしてうちに持ち込まれた『魔法図書館は動かない』を、私と（射命丸）文さんが読んで、出版にゴーサインを出したわけですが。

パチュリー 今だから聞くけど、売れると思った？

阿求 あまり期待はしていませんでした。

パチュリー そうよね。今にして思えば私も、あんな小説が売れたのは他に何も無かったからだと思うわ。ふつうみんな、もっと分かりやすい話を喜ぶもの。

阿求 今で言うと、たとえば『白狼の咆吼』シリーズ（※註4）のような？

パチュリー まあ、そういうことね。作品としての良し悪しは別として。

阿求 まあ、確かに売れるかどうかは博打だと思いましたが。でも、一読者としては衝撃的な作品でしたよ、『魔法図書館は動かない』は。舞台になる移動型図書館都市のイメージは鮮烈で、この幻想郷にも存在しない幻想が紙の上で躍っている様はとても靈感的でした。その中で、たった一人しか読んだことがないという幻の本を探して本の海の中を彷徨ううちに、無数の物語の世界に取り込まれていく——めくるめく物語の入れ子人形、何冊でも書けそうなアイディアを贅沢に放り込んでひとつの物語に無数の世界を描き出したあの構成は、この文芸ブームの中で

も比肩しうる作品は未だ数えるほどしか無いと思います。

パチユリー ……目の前で自分の作品を絶賛されるのはこそばゆいわね。

阿求 稗田文芸賞の品質は、あの作品が基準として存在しているからこそ保たれているんですから。最近、パチユリーさんの推す作品を受賞させられていないのは多少心苦しいですが。

パチユリー それはそれよ。ともかく、最初はあんまり反応は芳しくなかったわね。

阿求 そうでしたね。読み物としての『幻想郷縁起』を楽しんでいる人たちも、この幻想郷とは全く違う、想像上の世界での物語を文章だけで見せられることには戸惑っているようでした。文々。新聞で特集を組んでもらったりもしたんですけどね。

パチユリー 売れ始めたきっかけが霊夢だったっていうのは本当なの？

阿求 元を辿っていくと、そういうことになります。霊夢が読んで、紫に勧めて、紫から藍さんに伝わり、藍さんから人里へ——という口コミで評判が伝わって、火が点いた形ですね。

パチユリー ……八雲紫は呼び捨てるのに、式神は敬称をつけるのね、貴方。

阿求 そのふたりの立場の差なんて私の関知するところではありませんから。

パチユリー 八雲紫が貴方も気に入ってる理由はなんとなく解った気がするわ。

阿求 彼女に気に入られても、あまり嬉しくはないんですけどねえ。

パチユリー あんまりそういうこと言っていると攫われるわよ。

阿求 それは怖いので、これ以上は口をつぐむことにしましょう。

これからの幻想郷の文芸と稗田文芸賞の行方は？

阿求 さて、時間も押し迫って来ましたし、これ以上喋っているとパチュリーさんの喘息の具合も心配ですので、最後にパチュリーさんから、これからの幻想郷の文芸がどういう方向へ向かうのか、その中で稗田文芸賞がどういう立ち位置であるべきかについて、展望を述べていただけたらと思うのですが。

パチュリー そうね。稗田文芸賞が出来た頃からすると、今の幻想郷の文芸は信じられないほどの盛況ぶりだわ。私もこれほど小説が幻想郷で流行るとは思わなかった。

阿求 霧雨書店は連日賑わっていますし、おかげさまで波及して幻想郷縁起の売れ行きも近年はかつてなく好調です。

パチュリー ただ、今は少し流行りすぎな気もするの。ある日、あつという間にこのブームがしぼんでしまいそうな気もする。もちろん、それはそれで仕方のないことだけれど。

阿求 本が今は多すぎる、ということですか？

パチュリー 多いのは悪いことじゃないわ。選択肢がたくさんあって、多様なジャンルの本が存在することこそ文芸の振興に他ならないもの。私個人の好みでいえば、もっと幻想小説や奇想小説が増えてほしいけれど。

阿求 では、具体的にはどうすればいいのでしょうか。

パチュリー どうもしない、が正解じゃないかしら？ 逆に言えば、これ以上ブームを煽る必要もないかと思うのね。たくさん作家がデビューして、みんなが本を読むようになった。需要と供給は今のところ悪くないバランスで回っていると思う。どちらかにあと少し傾けば崩れてしまいそうな危ういところではあるけれど。

阿求 本を書く、売る側としては、もっともっと読まれて欲しいとは思いますが。

パチュリー まあ、それで崩れて消えるなら、幻想郷の文芸もそこまでだったということね。だけど、本のいいところは、ブームが去っても書かれた作品は残るということよ。たとえば個人的な趣味でいえば、『川の流れの果てる先』（※註5）や『インビジブル・ハート』（※註6）のような作品がこのブームの中で生み出されただけでも、有意義だったと思うわ。

阿求 ……『インビジブル・ハート』をそこまで推すのは、私にはよく解りませんが、書かれたものは残る、というのには確かにその通りですね。

パチュリー そういえば選考会では貴方にも反対されたわね。（※註7）

阿求 正直私は今でもあれはどうかと思うのですが。

パチュリー あんな作品、滅多に読めるものじゃないのに。

阿求 そりゃそうでしょう。あんなもの普通出版されません。私なら没にします。

パチュリー ああ、そういう凝り固まった既存の価値観が、あんな傑作を人目にさらす前に潰

してしまうようになってしまつては、幻想郷の文芸の未来は……ゴホッ、ゲホッ。

阿求 はい、お菓をどうぞ。

パチュリー ……ごめんなさい、失礼。

阿求 では、その文芸ブームの中で、稗田文芸賞の果たすべき役割は、どうでしょう。

パチュリー この幻想郷の文芸に風穴を開けうる、ベストセラーランキングでは見いだせない異才を発掘することが必要だと、改めて主張させてもらうわ。別に第七回も、あの作品に不満があるわけではないけれど、あれは黙っていても売れるでしょう。『インビジブル・ハート』のような異才こそ、賞でもあげないと埋もれてしまうのに。

阿求 ……埋もれたままでいいと思うんですけどねえ、あれは。

パチュリー いっそ、私個人の賞でも作ろうかしら。

阿求 これ以上慧音さんと喧嘩しないためにもそっちの方がいいかと思いますが。

パチュリー 主催の貴方は、稗田文芸賞の役割をどう考えているのかしら？

阿求 幻想郷の文芸の模範として、客観的に優秀な作品に与えられるべきと考えます。

パチュリー 小説に模範なんてものが、果たして必要なかしら。

阿求 破綻した作品を持ち上げるよりはいいと思います。

パチュリー ……今年の選考会も熱くなりそうね。

阿求 候補作次第ですけれどね。

パチュリーー はあ、八雲紫が選考会に来てくれないかしら。

阿求 ああ、彼女は選考委員を降りるそうですよ。今まで辞めるのを伝え忘れてたとか。
パチュリーー ……あのスキマ妖怪は。

阿求 代わりに第八回から（八雲）藍さん（※註8）が入る予定です。

パチュリーー 式神の方は奇想小説に理解は無さそうね……。ああ、私は孤立無援だわ。

阿求 やっぱり《パチュリーー・ノーレッジ賞》でも作ったらどうです？

パチュリーー 自分の名前の賞なんて作ったら死んだ作家みたいじゃない。

阿求 そういうものですか？

パチュリーー そういうもののなの。まあ、稗田文芸賞の他にも賞はあっていいかもしれないわね。
文芸の多様性維持のためにも、多様な作品を評価する賞が必要なのかもしれないわ。

阿求 次は文学賞ブームでも起こす気ですか。賞が増えると読者が混乱しません？

パチュリーー いいのよ、別に。

阿求 どうしてですか？

パチュリーー 文学賞は読者のためじゃなく、作家のためのものだもの。

【脚註】

- ※1 第一一八季夏に起きた「紅霧異変」のこと。
- ※2 現在は四作品とも紅魔文庫（スカレット・パブリッシング）刊。
- ※3 次ページからの第二回稗田文芸賞を参照。
- ※4 大橋もみじの剣豪小説シリーズ。鴉天狗出版部刊。『幻想演義』で現在も好評連載中。この春からドラマ化が決定している。第六回稗田文芸賞（一二三ページ）も参照。
- ※5 河城にとりのSF小説。第一二二季、鴉天狗出版部刊。第六回稗田文芸賞も参照。
- ※6 米井恋の奇想小説。第一二四季、旧地獄堂出版刊。
- ※7 第七回稗田文芸賞（一五三ページ）を参照。
- ※8 数学者・作家。妖怪の賢者・八雲紫の式神で、人里の数学教師なども務めている。小説の著作に『猫のための方程式』『とある賢者の数学的憂鬱』などがある。

《選考委員》

パチュリー・ノーレッジ (作家)

八雲紫 (妖怪の賢者)

射命丸文 (文々。新聞記者)

稗田阿求 (稗田出版代表)

第二回稗田文芸賞

全候補作紹介 & 選評

《候補作》

ミス・レッドラム 『ナイトメア症候群』

門前美鈴 『龍拳伝』

十六夜咲夜 『クロック』

西行寺幽幽子 『桜の下に沈む夢』

白岩怜 『氷の王国』



第二回稗田文芸賞候補作発表

幻想郷文芸振興会は十五日、第二回稗田文芸賞の候補作を発表した。

稗田文芸賞とは、文芸の振興を目的として昨年創設された幻想郷初の文学賞。第一回ではパチュリー・ノーレッジ『魔法図書館は動かない』（稗田出版）が受賞しベストセラーとなった。

第二回は第一一八季神無月から第一一九季長月までに刊行された小説作品が対象となる。ノミネットされた五作品から選考委員の協議により受賞作が決定する。選考委員は稗田阿求（稗田出版代表）、パチュリー・ノーレッジ（作家・紅魔館付属大図書館館長）、射命丸文（文々、新聞記者）、八雲紫（妖怪の賢者）の四氏。選考会は今日二十五日に稗田邸にて行われる。候補作品は以下の通り。

ミス・レッドラム『ナイトメア症候群』（稗田出版）

門前美鈴『龍拳伝』（稗田出版）

十六夜咲夜『クロック』（稗田出版）

西行寺幽々子『桜の下に沈む夢』（白玉書店）

白岩怜『氷の王国』（博麗神社）

《読者投稿書評》無邪気な残酷さに満ちた玩具箱

——ミス・レッドラム『ナイトメア症候群』

評者 小悪魔（紅魔館付属大図書館司書）

これほど悪趣味で不健全な作品もそうは無いでしょう。ただしこの作品の場合、これは褒め言葉となります。一切の慈悲も憐憫もなく、しかし底抜けに無邪気な筆致で積み重ねられる屍の山には、良識ある読者諸兄は嫌悪感を覚えるかもしれません。筋立ては単純。全世界的に《ナイトメア》と呼ばれる狂気が蔓延し、人々も人ならざる者もどこか陽気に殺戮を繰り返す中、絶対的な力を持つ主人公が片っ端から敵をなぎ倒していくという、それだけの物語です。子供が捕まえた虫の羽根をむしり取るような、残酷な稚気が支配する本作は、しかしその無邪気さ故の奔放な想像力に満ちあふれています。絶対強者である主人公により、手を変え品を変え繰り返される残酷行為の数々は、まるで玩具箱をぶちまけたかのよう。この本を手にする貴方に、常軌を逸した異形の世界を垣間見せてくれるでしょう。さあ、この鮮血と肉片に充ち満ちた玩具箱を開ける勇氣は、貴方にありますか？

（文々。新聞 文月五日号 三面文化欄より）

《読者投稿書評》肉体の軋みが伝える、《強さ》への問い——門前美鈴『龍拳伝』

評者 魂魄妖夢（白玉楼庭師）

スベルカードルールが制定され、幻想郷での争いごとが弾幕ごっこによって行われるようになった昨今、妖怪同士が直接、肉体的な交戦をする光景もめっきり少なくなりました。そんなご時世に、小説という形で真正面から妖怪対妖怪の戦いを描いたのが、この『龍拳伝』です。龍の血を嗣ぎながら些細な出来事で天界を追放された主人公・ホウリンが、地上の妖怪たちと拳を交えながら己の居場所を求めて彷徨う本作は《強さ》とは何か、を、真っ直ぐに描き出した作品です。その肉体の軋み、うねりが聞こえてくるかのようなアクシジョンシーンは庄巻の一言に尽きます。無駄を競い合う弾幕ごっこは対極にある、ただ一点に意識を定め相手を打ち倒すことに専心する本作の愚直な格闘への姿勢は、『余裕』を見せることこそ強者の器という現在の幻想郷の風潮に対し、真摯な《強さ》とは何か、という問いを投げかけるものではないでしょうか。

（文々。新聞 長月十八日号 三面文化欄より）

《四千字書評》数式で解き明かせぬふたつの概念——十六夜咲夜『クロック』

評者 八雲藍（賢者の式神・数学者）

私たちの暮らす世界は、ほとんどあらゆる概念が数式により定義することが可能である。しかし今なお、『時間』そのものを定義する数式は開発されていない。我々の数学が時間に対して出来ることは、それを細分化し分類するという整理作業でしかないのだ。

本書はその『時間』をテーマにした短編集である。が、小難しい理論や数式があるわけではないので、数字に弱い読者諸氏も安心していただきたい。停止した時間という牢獄、溯った時間という異界、逆行する時間にすれ違う者たち。混乱した時というアイデアの中で本書が描くのは、定義できない時間の不可思議に翻弄される人々の想いである。

感情もまた、数式では定義できない。我々が細分化し分類した『時間』が乱れたとき、感情の分類もまた乱れる。あり得ざる状況に放り込まれた人々の想いを繊細な筆致で紡ぐ本作は、秀逸な時間SFであるとともに、上質のロマンス・ノベルでもあるのだ。

（文々。新聞 卯月二十二日号 三面文化欄より）

《四百字書評》夢と現実のマトリョーシカ——西行寺幽々子『桜の下に沈む夢』

評者 パチュリー・ノーレッツジ（作家・紅魔館付属大図書館館長）

こんな書き手が幻想郷に現れてくれたか。読み終えた瞬間の感慨を素直に表現すれば、まさしくその一語に尽きる。本書に与えられた惹句は『夢と現実の境を彷徨う、幻想の恋愛小説』ということになるが、それは適切な紹介であると同時に、全く見当外れな形容でもある。平行して語られる夢と現実、それを繋ぐ枯れない桜。これは、行き交うふたつの世界で重なりあう感情の行方を追いかける恋愛小説であるが、同時に平行するふたつの世界の謎をめぐるミステリーであり、語り手の主観を崩壊させていく幻想ホラーであり、そして可能性世界を題材にとったSFでもある。夢の側から本書を読むか、現実の側から読むか、それともその狭間を探るか——その全ての読みを許容するという意味で、本書は紛れもなく小説だ。なれば、本作に与えられるべき適切な惹句はただひとつ。傑作である。第一作にしてこれほどの物語世界を構築してのけた著者の次作が楽しみでならない。

（文々。新聞 皐月十一日号 三面文化欄より）

《四百字書評》美しくも厳しき冬の残酷さ——白岩怜『氷の王国』

評者 上白沢慧音（歴史教師）

今年の冬もまた、一段と冷え込む日々が続いている。凍てつく風の冷たさ、しんとした雪原の静寂は、どこか死の気配にも似た厳肅さをたたえている。しかしその一方で、人里の人々が冬の抱える死の気配に怯えることは少なくなつた。

本書『氷の王国』は、人々が忘れかけた冬の無慈悲な厳しき、残酷さを克明に記した作品である。冬の雪山を彷徨うひとりの人間に襲いかかる凍てつく死の気配を、濃密な筆致で描いた恐怖小説だ。いや、これは小説なのだろうか。それを疑ってしまうほどの鬼気迫る雪の描写は、読者の背筋を凍らせて余りあるだろう。

惜しむらくは、物語そのものに訴えかけるものが薄いことであろうか。しかし、雪山での遭難に際してのハンドブックとしても有用であろうと思われるほどの迫真の遭難描写は、厳然とした冬の美しき、残酷さを見事に描き出していると言えよう。

（文々。新聞 神無月十二日号 三面文化欄より）

第二回稗田文芸賞の栄冠は誰の手に？

十五日に候補五作が発表された第二回稗田文芸賞。その受賞レースの行方を、博麗神社巫女、博麗霊夢氏に占ってもらった。五作全てを読んだという霊夢氏は次のように語る。

——この中なら、『桜の下に沈む夢』か『クロック』の二択じゃない？ このふたつなら別にどっちが獲ってもいいと思うけど、せっかく小説読む人が増えてきたんだから、誰にでも読みやすい作品を選んだ方がいいんじゃないかしらね。そういう意味でなら、私は『クロック』を推すわ。『桜の下に沈む夢』は上手いけど、誰にでも読みやすい作品じゃないもの。

『魔法図書館は動かない』と同じ路線で選ぶなら迷わず『桜の下』なんだけど、正直わかりにくい話だからねえ。『魔法図書館』も「なんかすごいけど話はよくわかんない」って言われてるのよく聞いたし。

ただ、純粹に出来だけで選べるのかしらねえ。『ナイトメア症候群』がそういう意味だと大穴かしら。でも、これに受賞させるの？ 他の作品を差し置いて？ うーん、紫とか阿求の動向次第かしら。あんまりこういうの好きそうには見えないけど。

『龍拳伝』と『氷の王国』はどっちも悪くはないんだけど、この中で受賞できるかっていうと難しいと思うわ。決定打に欠けるっていうか……そもそも、『ナイトメア症候群』と『クロック』を差し置いて『龍拳伝』にやったら紅魔館が崩壊するわよ。ヒエラルキー的に。いや、作

品と作者の立場は切り離して考えた方がいいんだらうけどね。

『氷の王国』はうちで出してる本だし、ま、獲れなくても売れてくれればいいんだけど。あんまり過度な期待はしないでおくわ。

ん？ 予想じゃなくて勘で占ってほしかっただけ？ それならそうと先に言いなさいよ。わざわざ全部読んでおいたのに……。

勘で占った結果？ 教えない。教えて欲しかったら今日の晩ご飯奢りなさいよ。取材経費で落とせばいいでしょ。ほらほら。じゃなかったら、せめてお賽銭入れていきなさいってば——
あつ、こら、逃げるな！

果たして栄冠はどの作品に輝くのか。選考会は二十五日、稗田邸にて開かれる。

(文々。新聞 神無月二十一日号 三面文化欄より)

第二回稗田文芸賞は西行寺幽々子さんの『桜の下に沈む夢』に

第二回稗田文芸賞は二十五日、人間の里の稗田邸にて選考会が行われ、候補五作品から、西行寺幽々子さんの『桜の下に沈む夢』（白玉書店）が選ばれた。授賞式は霜月十日、白玉楼に行われる。

選考委員の稗田阿求氏（稗田出版代表）は、「『桜の下に沈む夢』は」作品として頭ひとつ抜けており、最初から最も多くの票を集めました。他の作品を推す声もありましたが、最終的に選考委員間の投票で一作受賞と決定いたしました」と選考の経緯を説明した。

西行寺幽々子さんは、冥界にあるお屋敷・白玉楼の主で、普段は冥界の管理者を務める亡霊。『桜の下に沈む夢』は、語り手である《私》の見る夢の中での出会いが現実となり、平行して語られる夢の世界と現実の世界が徐々に混ざり合っていく幻想的な恋愛小説。受賞作、候補作は霧雨店一階書籍コーナー等にて取り扱われている。選評は来月十日に発売される『幻想演義』師走号に掲載予定。

西行寺幽々子さんの受賞のことば

「初めての作品で栄誉ある賞をただけて、とても嬉しく思うわ。賞金と受賞パーティで、どんな美味しいものが食べられるか楽しみね」

（文々。新聞 神無月二十六日号 一面より）

《選評》

文芸時代の幕開け パチュリー・ノーレッジ

拙著『魔法図書館は動かない』の刊行から一年。幻想郷においても、小説の刊行点数は次第に増加傾向にある。まだまだ道具屋の片隅を占める程度であるとはいえ、ほぼ文芸作品など皆無に等しかった一年前に比すれば、劇的な変化といえるだろう。

さて、栄えある第二回の受賞作に選ばれたのは、西行寺幽々子氏の『桜の下に沈む夢』であった。粒ぞろいであった候補作の中から、本作を受賞作として迎え入れられることは、私にとつてこの上もない慶事である。刊行当時、依頼された書評に私はただ一語、「傑作である」と記した。此度、改めて選考委員として本作に向き合い、その思いをいっそう深めるに至った。

本作を《幻想恋愛小説》とカテゴライズすることは決して誤りではないが、その額面通りの読みではこの作品の内包する豊かな物語の、ほんの何割かを味わったに過ぎない。優美な文体は細部まで丹念に気が配られ、物語を視野狭窄に陥らせることを巧みに回避している。反転し続ける《夢》と《現実》の入れ子構造による重層的な物語は、ただの一読によって全てを白日に晒すことを拒む。読み返すたびに、同じはずの物語は全く違った姿を見せるのだ。ただ一冊の本の上に、百者千様の物語を顕現される本作は、紛れもなく私が待ち望んでいた小説である。文句なく受賞作として推し、目出度くも受賞の運びとなった。

個人的に次点として推したのは『ナイトメア症候群』である。確かに小説としてはいささか杜撰な面が散見されるが、混沌とした暴力的な世界の中にひっそりと息を潜めたセンチメンタリズムが奥ゆかしく、反対を覚悟で票を投じたが、力及ばず最初の投票で落選となった。

その他の作品は簡単に触れる。『クロック』は、外の世界に先行作品が多く思い浮かぶ節はあるものの、丁寧に作られた時間SFの佳品である。無論、この幻想郷においては新鮮な作品であろうが、私個人としてはいささか先行作品の影響が強すぎる印象を受け、積極的には推し兼ねた。『龍拳伝』は、汗や息づかいを感じさせる格闘描写には光るものがあつたが、作品としては構成がまとまりきっていない面があり、物語にいささか散漫な感があつたのが惜しまれる。『氷の王国』は鬼気迫る《寒さ》の描写に引き込まれたが、小説としてはもっと物語や人物造形に奥行きが欲しい。いずれも及第点以上の作品であり、この一年に生み出された文芸の質の高さを証明するには充分であつたが、受賞作として推すにはあと一歩足りなかつた。

受賞と落選という結果は生じたが、五作品いずれもこの幻想郷に文芸時代の到来を告げるに相応しい顔ぶれであつたことは間違いないことである。僅か一年にして、かくも多様な作品が生み出されたことに新鮮な驚きを覚えるとともに、この幻想郷に既に確固とした文芸の土壌が育まれていた事実を言祝ぎたいと思う。この第二回受賞作の誕生を機に、幻想郷の文芸がさらなる興隆を迎えることを願つてやまない。

娯楽か、それとも芸術か 射命丸文

実は、正式に選考会という形になるのは今回が初ということもあり、当日はさすがの私もいささか緊張して臨むこととなりました。こういうのは私も初めての経験でしたもので。

せっかくなので選考の経過を説明しておきますと、まず選考委員には事前に候補作とともにリストが手渡され、候補作を読み、それぞれの作品に「○（受賞作として推す）」「△（誰かが推すならば反対はしない）」「×（受賞に反対する）」のいずれかの印をつけて選考会に臨みます。選考会はずその印のついたリストを回収し、得票の少ないものから協議の上で順にふるい落としていくこととなります。

私が今回○をつけたのは、白岩怜氏の『氷の王国』です。読む手がかじかみそうな極寒の雪山で繰り広げられる、ひたすらに孤独な《寒さ》との戦い。脆弱な人間が知恵と技術を駆使して生き残ろうと足掻く様をリアルに描き出し、大変興味深く読むことができました。人間が忘れつつある冬の寒さへの恐怖心を喚起するというテーマも一貫しており、人里へ向けた読み物として選ぶならばこれであろうと考えたのですが、他の選考委員からの反応は芳しくありませんでした。人物造形や物語に深みが足りない、とパチユリー委員などが言われましたが、むしろ本作にはそういったものは夾雑物ではなからうかと思うのですがねえ。どこまでも残酷な自然の力強さを描いた本作は、落選とはなりましたが一級のサバイバル・エンターテイメントであると断言できます。

そういう意味で、選考会では他の選考委員との間に多少の温度差を感じる部分がありました。私は、小説とは娯楽であるべきだと考えます。面白いものこそ正義である、と。しかしパチュリー委員や阿求委員は、どちらかといえば芸術性に重きをおいて作品を選んでいるようでありました。小説が娯楽であるべきか、芸術であるべきか、それは難しい問題ではあるでしょう。しかし稗田文芸賞が文芸の振興を目的とするならば、明快なエンターテイメント性によって、読者に読書の楽しみを伝えられる作品を選ぶべきではないのでしょうか？

選考会でもそう主張し、『水の王国』が退けられたあとは、やはりエンターテイメント性に優れ興味深い世界を描き出した、十六夜咲夜氏の『クロック』を推したのですが、こちらも力及ばず。受賞作となった西行寺幽々子氏の『桜の下に沈む夢』は、確かにその美文調といい重層的なテーマ性といい大変芸術的な作品ですが、実はこの作品m今回の候補五作品の中では一番売れてないんですよ。受賞後に売れるかもしれませんが、どうなることやら。

門前美鈴氏の『龍拳伝』は、この作品の主人公のような姿勢に強く共感できる性格の選考委員が居なかったことが不幸でありましょう。ミス・レッドラム氏の『ナイトメア症候群』は残酷趣味の羅列にいささか胸焼けがしました。良識ある大人が薦めるべき作品ではありませんね。ともあれ、受賞作は決まりました。これによってまた幻想郷の出版状況と売上がどう推移するのか、今度はそれを興味深く見守りたいと思います。

(無題) 八雲紫

西行寺幽々子『桜の下に沈む夢』を推しました。理由？ 五作品の中で一番優れていたからですわ。他に理由が必要ですか？ 詳しく説明？ めんどくさいわねえ。読んでいただければ解りますわ。そのぐらいいは解っていただかなくて、ねえ？

他の作品？ 『クロック』は外の世界の作品の模倣に見えますし、他はあんまり印象に残りませんでしたわ。『ナイトメア症候群』？ 残酷趣味は結構ですけど、作者の自己顕示欲が作品の表面に出てしまっただけは台無しですわね。

ふあ、そろそろ冬だし眠くなってきたわ。おやすみなさい。ぐー。

(マヨヒガ近くにて、選評の提出が無かったためインタビューにて代用)

価値の創造 稗田阿求

思えば元々、幻想郷の識字率は高かった。寺子屋での教育が行き届いているおかげであろうが、しかしそれを思えば、今まではむしろ不自然に書籍が少なかったと言えるだろう。そんな中、幻想郷はいまにわかに文芸ブームが訪れようとしている。そのブームの仕掛け人であるこの稗田文芸賞は、この萌芽しつつある文芸の芽に、指標と価値を創造すべきなのではなからうか。すなわち、『優れた作品には栄誉を』という価値である。

となれば、実質的に最初の選考となる今回選ばれるべきは、やはりその価値に相応しい作品でなければならぬ。『桜の下に沈む夢』は、まさしくあの『魔法図書館は動かない』に比肩しうる優れた作品である。美しい文章によって紡ぎ出される、どこか退廃的な空気に満ちたふたつの世界の姿は、その独特の死生観と相まって幽幻である。直接的な描写を避け、技巧に満ちた比喻、隠喩でふたつの世界を往復するふたりの想いを綴る筆致はいささか難解な部分はあるにせよ、痛切な結末は強く胸を打つ。技術の面でも文章の面でも、他の作品の一步も二歩も先を行っている。受賞は当然の結果であろう。

次点で惜しくも受賞を逃した十六夜咲夜氏の『クロック』も良い作品であった。同じ回に『桜の下に沈む夢』が挙がったのが不幸であった、としか言いようがない。狂った時の流れの中において、狂うことさえままならず引き裂かれていく想いの綴り方は感動的だ。いささか哀切さの方向に偏りすぎであるとの意見もあったが、それは人間と妖怪ゆえの死生観の差であろうか。『龍拳伝』と『氷の王国』は娯楽作としては優秀であるが、やはりいかにも相手が悪い。いずれも一貫したテーマを保持しているが故に、作品がいささか近視眼的になっている感は否めない部分がある。『ナイトメア症候群』は正直なところ、この作風に嫌悪感しか覚えなかった。小説という虚構の中でなら何をしてもいい、というものではない。モラルに相反する作品であるからこそ、モラルを踏まえなければそれは平板な空想にしかなり得ない。無邪気といえば聞こえはいいが、これは単に幼稚なだけの発想である。

選考会は多少の論戦はあったものの、概ね和やかに進み、受賞作という結果にも満足のいくものであった。あとはこれから手に取られる読者諸兄に、受賞作がどのように受け止められるかであるが、それは後世の評価が答えとなるであろう。今は西行寺幽々子氏の受賞を祝い、来年の選考会にもまた優れた作品が挙がってくることを祈るばかりである。

〔『幻想演義』師走号 特集「第二回稗田文芸賞受賞作決定」より抜粋〕

紅魔館が文芸出版社「スカーレット・パブリッシング」を設立

紅魔館は十三日、文芸出版社「スカーレット・パブリッシング」を設立し、睦月から出版活動を開始することを発表した。それに伴い、現在稗田出版から刊行されている、パチュリー・ノーレッジ『魔法図書館は動かない』、十六夜咲夜『クロック』ら八作品は年内をもって絶版となり、スカーレット・パブリッシングから順次再刊される。

レミリア・スカーレット代表は本紙の取材に対し、「ふん、稗田文芸賞が何よ。幻想郷の文芸は私たち紅魔館が売上で牛耳るわよ!」と高らかに語った。

なお、先の第二回稗田文芸賞にて、ミス・レッドラム『ナイトメア症候群』が酷評され落選したこととの因果関係は不明である。

博麗靈夢&伊吹萃香の
メッタ斬り！放談
『で、結局稗田文芸賞
ってどうなのよ？』



ぶっちゃけ、稗田文芸賞受賞作って面白いの？

伊吹萃香（以下萃香） 最近、天狗どもが新しい文学賞を作ろうとか画策してるらしいよ。
博麗霊夢（以下霊夢） 天狗どもって、文が？ 稗田文芸賞の選考委員じゃない。

萃香 いや、別の天狗。文から聞いた話だけど、「稗田文芸賞受賞作は、果たしてその年に刊行された中で最も面白い作品であろうか」って割と前から議論されてる話が、また再燃してるみたい。第六回で『あの月の向こうがわ』が候補漏れしたのが直接のきっかけらしいけど。

霊夢 だったら自分たちで一番面白かった作品を決めよう、ってわけ？ なんかもうそんなのやってなかったっけ。ほら、『この小説がすごい！』ってやつ。

萃香 あれは文々。新聞の一コーナーだしさ（笑）。それとは別に、ね。

霊夢 そんなのここでバラしていいわけ？ 文が怒鳴り込んでくるのは勘弁なんだけど。

萃香 気にしない気にしない（笑）。てわけで、「ぶっちゃけ稗田文芸賞ってどうなの？」ってことで話をしろってお達しだよ、今回は。

霊夢 また大雑把なお題ねえ。

萃香 タイムリーだし、この話からいこうか。ぶっちゃけ、稗田文芸賞の受賞作はその年の小

説で一番面白い作品なのか？ 答えは――

霊夢 ノー。

萃香 ま、だよねえ。

霊夢 そもそも、「一番面白い小説を大勢で決める」ってのがまず矛盾してるってことに気付きなさいよ、って感じだけど。周りの全員が一番だって言っても、本人にとって一番かどうかは読んだ本人が決めることなんだから。「一番人気のある小説」なら解るけどね。

萃香 それを言っちゃあどうしようもないじゃん（苦笑）。

霊夢 だから「稗田文芸賞受賞作」ってのは、まず候補作を選んだ面々の気に入った作品の中から、選考委員の好みの最大公約数に近いもの。それが面白いかどうかは別問題よ。

萃香 ま、だからこそ私らみたいな部外者がわいわい予想したりする楽しみもあるわけだけだね。出た瞬間に評価が決まっちゃうなんて面白くないじゃん？ 計算じゃないんだから。

霊夢 まあね。おかげで本読むのまで半分仕事になっちゃったけど。

萃香 あてにならない賽銭収入よりはよっぽど実入りいいじゃん？（笑）

霊夢 お札ぶつけるわよ。

萃香 おっと（チチチ）。まあ弾幕ごっこしてたら話が進まないから、先行こうよ先。

霊夢 はいはい。何の話だっけ？ ああ、稗田文芸賞受賞作が一番面白い作品かどうか、ね。

まあ、ちゃんと最優秀作品を選んでますか？ って話でいいのかしら。

稗田文芸賞は文学性とエンタメ性の妥協点？

萃香 やっぱり、その年の最優秀作品を表彰するものだと思ってる人が多いんだねえ。

霊夢 知名度と売りだし方からして、誤解されるのも仕方ないと思うけど。

萃香 こんな話があるよ。慧音が第二作の『神劍動乱』を出したあと、人里で買い物してたら「今年は先生、残念でしたねえ」って言われたんだって。何が残念なのか確かめてみたら、「この前の稗田文芸賞は慧音先生が獲ったのに、今年は別の人に獲られてしまっって残念でした」って話だったらしい（笑）。

霊夢 ま、本好きでなければ認識なんてそんなもんじゃないの？

萃香 一応確認しておくよ、稗田文芸賞は「文芸の振興を目的として」「優れた小説作品に贈られる賞。候補になる上でのルールはふたつあって、まず定められた期間内の新刊であること、それから今までの受賞作家でないこと。つまり、一度受賞しちゃうば二度三度と受賞するのはダメ、ってことだね。

霊夢 なんでそんなルールにしたのかしらね。別に二回三回獲ってもいいじゃない。

萃香 振興のため、だからでしょ。文芸の振興のためにはどんどん新しい作家が出てきた方がいい。同じ作家が何度も繰り返し獲ってたら盛り上がりがないとか、そんなところじゃない？

霊夢 確かにね。例えば七回中三回パチュリー二回幽々子とかだったら私もどうかと思うわ。

萃香 ま、おかげで受賞作無し这回なんかも出ちゃうわけだけど（苦笑）。

霊夢 選考委員は、阿求、文、紫、パチュリーの四人は現状のシステムになった第二回からずっと継続。紫はいてもいないようなもんだけど。第三回から幽々子、第五回から慧音が入って現状は六人制なんだけど……。

萃香 面子が基本的に一緒だから、やっぱりどうしても受賞作の傾向が偏るよねえ。ただ、入れ替えようにも選考委員やれそうなのが少ないから仕方ないのかな。

霊夢 あと、誰かが強硬に反対すると獲れない。

萃香 第六回みたいだね。

霊夢 基本的に、パチュリーは目新しさとか奇想を買うタイプ。慧音と阿求は文学性重視。文は一貫して娯楽性重視、幽々子はその時々気分、って感じかしら。ストレートなエンタメにはだいたい慧音が反対して、逆にストーリー性が薄いと文が反対する。

萃香 で、パチュリーの推す作品は理解を得られず孤立無援、と（笑）。

霊夢 ここ二回は特にそんな感じねえ。

萃香 それで落ち着くのが、ある程度エンタメ性があって文章がしっかりしてる作品、ってことになる。最初の頃はもう少し文学性寄りだったけど、白岩怜が獲ったあたりから中道的な作品を選ぶようになった感じ。

霊夢 まあ、第五回も第七回も作品の出来は候補作の中で受賞作が一番いいんじゃない？

萃香 えー、さっき「小説の面白さは読む人次第」って言った口でそれを言うの？（苦笑）

霊夢 私の個人の感想よ。別にそれが絶対的な評価なんて言っていないじゃない。はつきり目につく粗が少ないだけかもしれないけど。それに個人的な趣味とは別だしね。

萃香 いやま、私もそんなに異論は無いんだけどさ（笑）。

候補作選定の時点である程度方向性は決まっている

霊夢 そもそも、候補作の選び方がそういう方向になるように選んでる気がするんだけど。

萃香 まあねえ。そもそも何書いても候補にならないものもあるし。永月夜姫と富士原モコみたいにさ。いや、慧音がいるからかもしれないけど（苦笑）。

霊夢 子供向けのも入らないし。なんだっけ、最近出たわりと売れてる探し物のやつ。

萃香 星丸小虎の『ミツシングハンター・ナッツ』ね。いや、あれはもし候補になってもどうかなあ（苦笑）。去年出た宇津保鈴の『地の底のイカロス』は良い作品だと思うけど。あとは

門前美鈴の『風雲少女・リンメイが行く！』シリーズとか？
 霊夢 紅魔館の連中は候補入り自体断ってるんだっけ。

萃香 ミス・レッドラムと咲夜はそうだね。なぜか門前美鈴だけ候補に入り続けてるけど。

霊夢 第二回でボロクソに言われて落とされたの、まだ根に持ってるのかしら。

萃香 まあ咲夜はともかく、レミリア……ミス・レッドラムは今の作風のままじゃ獲れないでしょ。パチュリーにこれ以上自爆のネタを与えなくてもいいじゃん（苦笑）。

霊夢 でもあれはあれで受ける層には受けてるのよねえ。

萃香 血の気の多い若い妖怪には割と人気だね。しかしまあ、候補作選定の時点で何に受賞させたいか、予備選考委員の企みがあっても、選考委員がそれに乗ってくれるとは限らないし。

霊夢 第六回みたいにな？

萃香 あれはさすがにパチュリーも慧音も反省したみたいだけど（笑）。

霊夢 ま、でも稗田出版内のコンテストになってないだけ健全なのかしらね。

萃香 商売と評価ってのは基本的に相反するもんだからね。いつの時代も玄人受けするものは一般受けしないもんだし。そのへんはバランス取って上手くやっているとと思うよ。

なんだかんだ言って売上への貢献度は高い

萃香 実際、やっぱり稗田文芸賞獲ると売れるんだよねえ。こないだの第七回受賞作も今バンバン売れてるよ。こないだベストセラーランキング見たら二位だったし。

霊夢 候補作も一緒になって売れてるみたいじゃない。貢献度は高いわよね。

萃香 実質的に、今の文芸ブームを牽引してきた面はあるからね。やっぱり第一回で『魔法図書館は動かない』をベストセラーにして知名度上げたのが大きかったかな。その次の『桜の下に沈む夢』も獲ってから売れたわけだし。やっぱり読者は何かしら、手に取るきっかけを欲しがってるんだろうね。踏ん切りっていうか。

霊夢 まあ、何を読めばいいかっていう指標は多くないものね。そういう意味で、受賞作、候補作ってくりは分かりやすいわよね。

萃香 それがろくでもない作品だったら、馬鹿にされるだけだけど。そういう意味でやっぱり『魔法図書館は動かない』と『桜の下に沈む夢』の功績は大きいね。どっちも幻想郷の文芸史に残る作品だもん。今出したらあんまり売れない気はするけど（苦笑）。

霊夢 最近はむしろそれが足枷になってる気もするけど。

萃香 まあねえ。そういう意味でもやっぱり白岩怜の受賞が転機かな。それまでの受賞作は文章を読み慣れる人でないと楽しみきれない面があったけど、あれは割と誰でも読みやすい恋愛小説だったからよく売れて、『魔法図書館』を投げ出したような人にも受け入れられた。

霊夢 おかげでうちも潤ったわ。ありがたい話よね。今もアリス……じゃないマーガレット・アイリスの新作が候補になった効果で相変わらずコンスタントに売れてるし。

萃香 霊夢の本業の神道関連の本は売れてないけど。

霊夢 あんたやっぱり喧嘩売ってるでしょ。

萃香 いっそ神社廃業して出版一本でいけば？ 私も『孤独の呑んべえ』の続刊書くよ。

霊夢 最近、それもありがたと思い始めてきたわ。……なんで本の売り上げが賽銭収入の増加に繋がらないのかしらねえ。

萃香 信仰すれば面白い本が書ける、とか御利益アピールすれば？

霊夢 考えてみようかしら。

萃香 うわ、本気だよこの巫女。

メッタ斬り！大賞創設!?

霊夢 で、天狗の新しい文学賞ってのはどんなのになるわけ？

萃香 なんか『この小説がすごい！』のノウハウを使って、一般投票に近い形でやれないか、

とか企画してるらしいよ。一般読者層が本当に支持している作品を表彰しようってことみたい。

霊夢 それならベストセラーランキングで充分じゃない？

萃香 売れ行きと支持は別だからさ、ほら（苦笑）。ただそれだと権威みたいなものが足りないから、神奈子あたり引つ張り込んで何かやらせようとしてるとか。

霊夢 上手くいくのかしらねえ。

萃香 さあね。でも、稗田文芸賞とは別のベクトルの作品を評価する賞が出てくるのはいいこ

となんじゃない？ 作家の励みにもなるだろうしさ。稗田文芸賞だとこのままじゃ一生獲れなさそうな門前美鈴とかマーガレット・アイリスあたり救済する意味でも（笑）。

霊夢 アリス……アイリスは無理でしょ。本気出さないのは見抜かれてるでしょうし。

萃香 自分トコの本なのにホント手厳しいねえ（苦笑）。逆に言えば、たとえば因幡てみるとか、今年の新人だと船水三波あたりに受賞させれば、稗田文芸賞も懐が深いって話になるんだけど。霊夢 それってあなたの好みじゃない。

萃香 文じゃないけど、多少粗があっても問答無用で面白いド直球のエンタメを評価する賞があつていいと思うんだけどねえ。文学性とか無くたっていいじゃん（笑）。

霊夢 あんたが個人的に表彰してやれば？ 賞品は酒で。

萃香 それならいっそ私らで新しい賞作ろうよ。メッタ斬り！大賞。

霊夢 賞金は出さないわよ。

萃香 みみっちいなあ……。例えば今年だったら霊夢、何を推す？

霊夢 去年？ そうねえ、『博麗神社神霊縁起』とか。

萃香 ……いやそれ自分の本じゃんさー（苦笑）。ていうか小説ですらないし。

霊夢 いいじゃない、自分の本の宣伝ぐらいさせなさいよ。

《選考委員》

パチュリー・ノーレッジ (作家)

西行寺幽々子 (作家)

八雲紫 (妖怪の賢者)

射命丸文 (文々。新聞記者)

稗田阿求 (稗田出版代表)

第三回稗田文芸賞

メツタ斬り! & 選評

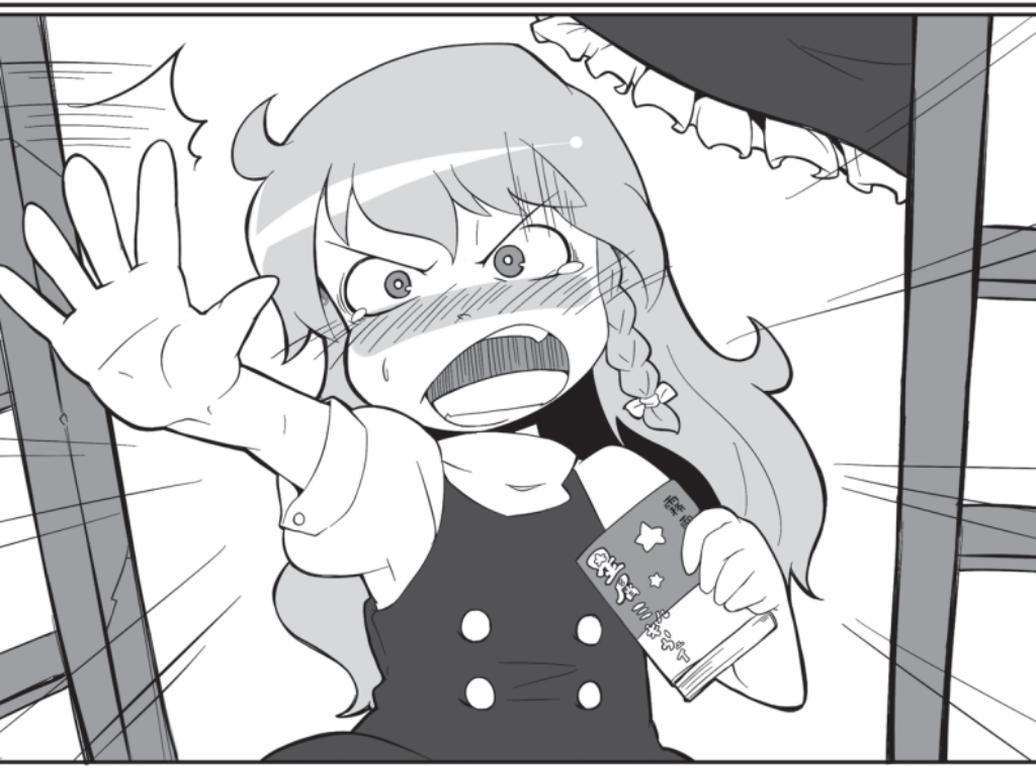
《候補作》

上白沢慧音 『満月を喰らう獣』

虹川月音 『憂鬱ラプソディ』

霧雨魔理沙 『星屑ミルキーウェイ』

八雲藍 『猫のための方程式』



第三回稗田文芸賞候補作発表

幻想郷文芸振興会は二十日、第三回稗田文芸賞の候補作を発表した。

第三回となる今回は、第一一九季神無月から第一二〇季師走までに刊行された小説作品が対象となる。今回は四作品が候補作としてノミネート。全員が初ノミネートとなった。

また、今回から新たな選考委員として、前回の受賞作家である西行寺幽々子氏が加わることで、次回以降、睦月から師走の刊行作品を対象とし、選考会を毎年師走下旬に行うことが発表された。選考会は今月二十六日に稗田邸にて行われる。

候補作品は以下の通り。

上白沢慧音『満月を喰らう獣』（稗田出版） 初

虹川月音『憂鬱ラプソディ』（白玉書店） 初

霧雨魔理沙『星屑ミルキーウェイ』（博麗神社）初

八雲藍『猫のための方程式』（マヨヒガ書房） 初

（文々。新聞 師走二十一日号 一面より）

博麗靈夢&伊吹萃香の稗田文芸賞徹底放談!

昨年の受賞作予想の好評を受けて、今回は新たに本紙連載の酒呑みコラム『孤独の呑んべえ』で人気の伊吹萃香氏を加え、対談形式で受賞レースを徹底予想! 候補作品に対する両氏の歯に衣着せぬ論評もノーカット掲載! 巫女と鬼が、稗田文芸賞をメツタ斬る!

◆受賞レース予想&作品評価(◎:本命 ○:対抗 ▲:大穴 評価はA~Eの五段階)

霊夢 萃香

- | | | | |
|-----|-----|------------------------|---|
| — D | ◎ B | 上白沢慧音『満月を喰らう獣』(稗田出版) | 初 |
| ▲ C | — C | 虹川月音『憂鬱ラプソディ』(白玉書店) | 初 |
| ◎ A | ▲ A | 霧雨魔理沙『星屑ミルキーウェイ』(博麗神社) | 初 |
| ○ B | ○ C | 八雲藍『猫のための方程式』(マヨヒガ書房) | 初 |

◆上白沢慧音『満月を喰らう獣』（稗田出版）初

予想：霊夢一 萃香◎ 評価：霊夢D 萃香B

萃香 とりあえず、評価と予想は別、ってことだけ最初に断っておこうか。私らの評価が高いものが必ずしも本命ってわけじゃない、と。

霊夢 選ぶのは私たちじゃないからね。

萃香 そんなわけで、そこはご了承のほどを。で、今回の予想と評価だけど（予想シートを見ながら）……あれ？ 霊夢、なんでこんなに慧音の評価低いの？

霊夢 そっちこそ、なんでそんなに評価高いの？

萃香 いやいや、面白いじゃん。

霊夢 どのへんが？

萃香 どのへんがって真顔で言われてもなあ……。じゃあ、とりあえず慧音のやつからいこうか。『満月を喰らう獣』は、幻想演義に連載された上白沢慧音の処女長編。満月の夜にだけ開く《時の扉》を見つけた主人公が、それを通して様々な歴史上の事実に隠されていた真実、逸史を辿っていく歴史小説。まあ要するに、普段自分がやってることを小説化したもの（笑）。でも霊夢、ホントにそんなに評価低いのか。

霊夢 だって、単純に面白くないじゃない。なんで候補になったのってレベルで。

萃香 えー。

靈夢 だいたいこの主人公が気に入らないのよ。偉そうなこと言って、結局自分では何もしてないじゃない。やったことといえば証拠隠滅ぐらいでしょ？

萃香 いやこれ。《起きてしまった歴史は変えられない》って話じゃん。何もしてないってことは無いと思うけどなあ。歴史の荒波の中で、変えることのできない過去に翻弄される主人公の無力感なんか良く書けてると思うけど。

靈夢 過去は変えられないなんて、そんな当たり前のこと小説で大仰に言われてもねえ。歴史の説明も、長いくせに本人の授業と一緒に眠くなるし。

萃香 まあ、歴史の解説がくだいのは私も気になったかなあ。あと、キャラの行動原理が全体的に堅苦しくて、奔放な人物を書くのが苦手そうなところ。でもそれを差し引いても、私はいい作品だと思うよ。将門の章の結末が、壇ノ浦の章のラストにダイレクトに繋がるところなんかゾクゾクするじゃん？

靈夢 そういうもんかしらねえ。私はどうにもこの上から目線の語り口が鼻について。ときどき出てくるこの作者の意見の代弁者みたいな地の文。いいから話進めなさいよっていう。

萃香 ……靈夢、単純に歴史に興味無いでしょ。それじゃ確かに辛いかもしれないけどさ。説明がくだいけど、逸史から見ると歴史観なんか、わりと面白いと思うんだけどな。最終的に、歴史は隠せても消し去ることはできない、っていう結論に持っていくのも上手いし。

霊夢 興味が無くても読ませてくれる作品ならいいんだけど、私はパス。

萃香 うーん（苦笑）。稗田出版的にもこれに受賞させたいだろうし、私は大本命だと思うなあ。さすがに文章は上手いし、去年の『桜の下に沈む夢』ほど解りにくい話でもないから文もそう反対しないだろうし。

霊夢 ふうん。ま、あんたがそう言うならそうなんじゃない？

萃香 うわもうテンション下がりすぎでしょ霊夢（苦笑）。しゃーない、次行こう、次。

◆虹川月音『憂鬱ラプソディ』（白玉書房）初

予想：霊夢▲ 萃香－ 評価：霊夢C 萃香C

霊夢 『憂鬱ラプソディ』ね。まあ、こういうのは別に嫌いじゃないわよ。それぞれ憂鬱のタネを抱えた語り手たちが、いろいろあって前向きになりましたっていう、まあ言っちゃえばそれだけのマイルドな短編連作。

萃香 語り手の憂鬱を悪化させる思考回路がやけにリアルでいいね。ああ、自己嫌悪してるときってこうなるこうなる、って感じでちよっと身につまされる。

霊夢 あんた、憂鬱になるときなんてあるの？

萃香 ひどいなあ、私だってメランコリーな気分になるときぐらいあるよ。

霊夢 まあいいけど。面白いのは、前向きになる話なんだけど憂鬱になること自体は否定してないのよね、この話。鬱になってちゃだめだ、っていうんじゃない、鬱になるのは仕方ないから、そこからできることを探して頑張ってみよう、っていう話なのは押しつけがましくなくていいんじゃない？

萃香 憂鬱は自分の悪いところを見つめ直すいい機会だから、ちゃんと自分の身を振り返りましょう、って言うところとちょっと自己啓発本っぽいけどね（笑）。なんてことのない話だけど、日常性で共感させるタイプの小説だからそれでいいのかな。ただ、賞を獲れる小説かっていうとかなり疑問。というかまず無理だと思う。

霊夢 それは同感。わざわざこれにあげる必要は無いわよねえ。

萃香 幽々子が案外こういうの好きかもしれないけど、パチュリーも文も推さないんじゃないかなあ。ハラハラドキドキの活劇でもないし、こういうほのぼのの小説は他にもあるし。候補にならなかつた白岩怜の『冬色家族』とかさ。あっちの方がまだ可能性あると思うんだけど。

霊夢 慧音のよりは面白かつたから大穴つけたけど、まあ受賞は無いでしょうね。

萃香 逆に獲ったらたぶん大騒ぎになるけどさ。まあ無いか（笑）。

◆霧雨魔理沙『星屑ミルキーウェイ』（博麗神社）初

予想：霊夢◎ 萃香▲ 評価：霊夢A 萃香A

霊夢 単純に小説としての面白さでいったら、今回はこれが一番でしょ。星空を駆ける運び屋の主人公が、年に一度開かれる星空レースでの勝利を目指す青春レース小説。

萃香 自分のところで出してる、魔理沙の本って最良目抜きで？（笑）

霊夢 こんなところで最良なんかしたって仕方ないでしょ。面白かったわよ。魔理沙が小説書いてたなんて知らなかったから、うちに持ち込んできたときにはびっくりしたけど。

萃香 霊夢は書かないの？

霊夢 そんなに暇じゃないわよ。

萃香 えー（苦笑）。ま、それはさておき、私も話の面白さだったらこれが候補作の中では頭ひとつ抜けてると思う。ただ、それが受賞に直結するかは疑問。

霊夢 他のと比べてもこれじゃない？ クライマックスの星空レースの描写なんてすごくいいわよ。《風が頬を切り裂いていく。星屑が視界を流れていく。目を開けていられないほどの光の奔流。それでも私は身体を前に倒して進む。行け。届け。もう少しだ。手を伸ばす。決して届かない光に、あと少しで手が届くんだ――》

萃香 いいよねえそこ。レースでの勝利を目指す動機も明快だし、ライバルのキャラの立て方

もいいからクライマックスのレースがすごく熱い。前半の青春小説部分もちよつとこつ恥ずかしいけどニヤニヤできるし。つーか、魔理沙ってあれでロマンチストだよ。そういうところが割と前面に出てるのに、よく本名で出したよねこの本（笑）。

霊夢 ああ、それ誤植なのよ。

萃香 誤植？

霊夢 ペンネームで頼まれてたんだけど、うっかり表紙に本名で写植しちゃってねえ。

萃香 ……ふーん、うっかり、ねえ（笑）。ああ、こないだ魔理沙が真っ赤な顔して何か抗議してたの、それだったのか。回収しなくていいの？

霊夢 もう売っちゃってるんだし、回収するようなミスでもないでしょ。

萃香 魔理沙にしてみりゃたまったもんじゃないと思うけどなあ（苦笑）。

霊夢 （予想シートを見て）あんたは大穴なのね。

萃香 いやまあ、個人的な願望でいえばこれに獲ってほしいよ。前の二作品とは違って王道のエンターテイメントだから一般受けもいいだろうし。ただ、パチュリーがどう出るかなあ。推すのか反対するのかちよつと読めない。文は間違いない推すと思うんだけど。

霊夢 蔵書泥棒の恨みをこんなところで晴らさなくてもいいと思うけど。

萃香 本人がどう思ってるかは解らんよ（苦笑）。

◆八雲藍『猫のための方程式』（マヨヒガ書房）初

予想：靈夢○ 萃香○ 評価：靈夢B 萃香C

萃香　なんで候補になった梓はこっちでしょ。いや面白いけど、これ小説？

靈夢　小説でしょ？ まあ半分は数学入門書みたいなもんだけど。

萃香　猫にでも解る数学。普段はもっと専門的な数学書を出してるけど、今回は自分の式神向けに書いたのかな。慧音の歴史解説に比べればよっぽど分かりやすく面白いわね（笑）。

靈夢　そんなこと言ってる割には対抗つけてるのね。

萃香　紫と幽々子がたぶん推すでしょ。パチュリーが反対するかもしれないけど、数学を文学的な表現で噛み砕いてるあたりは阿求も好きそうじゃない？

靈夢　紫が、自分の式を素直に推すかしらねえ。そもそも今の時期だと紫の奴、冬眠してるんじゃないの？　ちゃんと選考会出るのがしら。

萃香　まあ、小説ってよりは数学入門書に見えるけど、読み物としてはいいと思うよ。専門的になりすぎてないし、ちよつと数学勉強してみようかって気になる。

靈夢　数学を語る老賢者のキャラがいいわよね。どんなことでも数学に例えて話すんだけど、それがただの銜学趣味じゃなく、ひとつひとつがハートフルな挿話に繋がっていくあたりは上手いと思うわ。賢者の相手をする猫たちも可愛いし。

萃香 前回の選評からして、最終的には多数決になりそうだし。そうなると一番票が読みやすいのはこれ。小説としてはもうちょっと企みとか仕掛けが欲しいけど。

霊夢 数学をこういう形で語るっていうのが、充分な工夫じゃない？ 個人的には好きよこれ。魔理沙が本命だと思うけど、私はまあこっちが受賞作でもいいわ。

◆ まとめ ◆

霊夢 作品で選ぶなら今回は魔理沙じゃない？

萃香 私もそうなって欲しいけど、現実的には慧音じゃないかなあ。いや、慧音のだっていい作品だとは思いますが、私は慧音でも別に不満は無いよ（笑）。

霊夢 あれが、ねえ……？ 私にはよくわかんないわ。

萃香 確か規定上二作受賞もありのはずだから、藍と慧音の二作受賞って線もあるかな。魔理沙が来るとすれば文あたりがよほど強く推すか、パチュリーか阿求が賛成するか……。

霊夢 ま、うちの本が売れてくれれば何でもいいわよ、私は。

萃香 魔理沙のはもう売れてるじゃん。里の道具屋が目立つところに置いてくれてるおかげで。
霊夢 それ、魔理沙に言ったら「何かの見間違いだろ」って笑ってたわよ。

萃香 事実なんだけどなあ（苦笑）。

第三回稗田文芸賞に上白沢慧音さんの『満月を喰らう獣』

第三回稗田文芸賞は二十六日、人間の里の稗田邸にて選考会が開かれ、候補となった四作品から、上白沢慧音さんの『満月を喰らう獣』（稗田出版）が受賞作に決定した。賞金は五十貫文。授賞式は来月五日、寺子屋にて行われる。

選考委員のパチュリー・ノーレッジ氏は、「選考は魔理沙……ごほん、霧雨魔理沙氏の『星屑ミルキーウェイ』との一騎打ちとなり、最終投票で『満月を喰らう獣』に決定しました。着想の壮大さ、マクロな視点から歴史を俯瞰しながらも一貫してぶれることのない筆致を高く評価しての受賞となりました……ゲホツ、ゲホツ」と選考の経緯を喘息混じりに語った。

上白沢慧音さんは、人間の里の寺子屋で歴史を教える教師『満月を喰らう獣』は、過去と。現在を行き来しながら、歴史の境目に隠された逸史を辿っていく壮大な歴史小説。

選評は来月十日に発売される『幻想演義』如月号に全文掲載される。

上白沢慧音さんの受賞のことば

「処女作でこのような光栄な賞をいただけただけなことにとっても驚きました。拙作の出版に尽力してくださいだった全ての方と、拙い作品に過分な栄誉を与えてくださった選考委員の方々に感謝したいと思います。賞金は、寺子屋の修繕と教材の充実に使用させていただきます」と

（文々。新聞 師走二十七日号 一面より）

《選評》

小説としての器 パチュリー・ノーレッジ

今回の選考会は幕開けとほぼ同時に、『満月を喰らう獣』と『星屑ミルキーウェイ』の一騎打ちという形になった。一刻半に渡る議論の末、受賞作は『満月を喰らう獣』に決まった。決選投票は、欠席であった八雲紫委員の票を含めての一票差であり、一時は二作受賞も検討されたが、最終的に一作受賞となったのは『満月を喰らう獣』の、小説としての器の大きさが高く、評価された形である。

『満月を喰らう獣』は、歴史を教える立場であった主人公の歴史教師が、過去の世界に飛ばされることにより、記録として残された史実の裏側にあった逸史を目の当たりにするタイムスリップ小説である。このような形式自体は決して目新しいものではないが、しかしこの小説の希有なる点は、語り手たる主人公に歴史の中で一切の役割が与えられていない点にある。歴史の語り部は傍観者でしかあり得ず、抹消された歴史を前に呆然と立ちすくむしかない。ただそれだけの事実を気迫のこもった筆致で綴る作者の筆、その視点には一貫してぶれがない。どこまでも冷静に歴史を俯瞰しながら、ミクロな視点で失われた歴史の中に隠された生と死の機微を書き分け、全てを一貫するテーマへと収束させた技量に敬意を表し、受賞作として推した。語られざるものを語りながら、その背景に存在するさらなる語られざる物語を、枝葉をそぎ落

とし太い幹が落とす影として現す、この技量こそが小説としての器である。

惜しくも受賞を逃した『星屑ミルキウエイ』は、爽やかな青春小説で読後感もよく、エンターテイメントの王道を行く快作である。が、いかんせんそこに紡がれる世界がまだ幼い。狭い世界、狭い関係、狭い視界。それゆえの一途さは若さの特権であろうが、その世界を開かせる大人の視点がこの小説には欠けていると感じ、『満月を喰らう獣』にはいま一歩及ばぬと思われた。『猫のための方程式』は、数学的な美意識を平易な言葉で紡いだ作品であるが、それを小説として昇華しきるにはもうひと工夫欲しい。『憂鬱ラブソディ』はいかにも人畜無害な小説であり、一読者として楽しめはするがそれ以上のもではない。

今回、対象期間を伸ばしたにも関わらず候補作の少ないのは、単純に今年の小説刊行点数が頭打ちであることによる。はたしてこのまま文芸ブームを終息させてしまつて良いものだろうか。来年の選考会には今年以上の力作が並ぶことを望みたい。

フルコースとデザート、創作料理にオードブル 西行寺幽々子

前回賞をいただいたと思つたら、今回から選ぶ側に回ることになるとは思わなかつたわ。候補作を読むのは楽しかつたけれど、その中から一作品を選ぶのは大変ね。何しろ、味わいの全

然違う作品に敢えて優劣をつけなければいけないんだもの。

例えて言うなら、『満月を喰らう獣』は立派なコース料理。『星屑ミルキーウェイ』はとっても可愛くて美味しいデザート。『猫のための方程式』はちょっと変わった創作料理。『憂鬱ラプソディ』は安心して食べられるオードブル。それぞれとっても美味しかったけれど、それを同じ料理だからってどれが一番か決めろっていうのはなかなか、酷な話だと思うわ。食後にフルコースは食べられないし、お腹へここのときにデザートを出されても物足りないじゃない？でも、それが選考委員の仕事なら仕方ないわよね。

選考会では、私は『猫のための方程式』を推したのだけれど、ほとんど他の選考委員の方たちには無視されてしまっただけで残念。数学と小説っていう、対極に見える題材に共通する普遍性を易しい言葉でまとめて、誰にでも数学の面白さを伝えられるようにした、とっても工夫を凝らした創作料理で、とても美味しかったのだけれど。書面回答の紫も推してたのだから、彼女が選考会に来てくれていればもう少し取り上げてもらえたのかしら？

『満月を喰らう獣』と『星屑ミルキーウェイ』の決選投票では、私は『満月を喰らう獣』に票を入れたわ。コース料理とデザート、本来なら比べようもないけれど、強いて言うならやっぱり、味わいのバリエーションかしら。『星屑ミルキーウェイ』は甘くてキュートな作品だけれど、少しの苦みが足りなくて、味がちょっと平坦だった気がしたわ。『満月を喰らう獣』を選んだのは、様々な隠し味が効いていて、深みを感じたから、かしらね。

受賞と落選という結果は出たけれど、私個人はどの作品も美味しく楽しむことができたわ。次の選考会にも呼んでもらえるなら、また美味しい作品が読めそうで、とても楽しみね。

一勝一敗の選考会 射命丸文

今回の選考は『満月を喰らう獣』と『星屑ミルキーウェイ』による激戦となりましたが、私は敢えて今回は二作受賞を主張する立場に回りました。結果は『満月を喰らう獣』の単独受賞となったので、一勝一敗、というところでしょうか。本命は『星屑ミルキーウェイ』だったのですが、『満月を喰らう獣』も楽しめましたので、喜ばしさと残念な気持ちとが半々です。

受賞作に関しては、強く推したパチュリー委員が選評で語ってくださいるでしょうから、ここでは『星屑ミルキーウェイ』について語ることにしましょう。この作品を評するに必要な言葉はただひとつ、「面白かった！」の一語に尽きるかとは思いますが、それでは選評にならないのでもう少し具体的に。

王道を王道として読ませる作品にこそ、作者の技量が如実に表れます。真っ向勝負の王道エントナーテイメントを貫徹した本作は、その確かな技量を証明するものでありましょう。速さを追い求めるレースを題材に描かれるのは、星空への憧れ、ライバルとの切磋琢磨、挫折と再起、そして淡い恋。これこそ青春小説の正道であり、この幻想郷でこれほど眩い作品を真っ向から

書ききった姿勢は、決して『満月を喰らう獣』にも劣らぬ作品としての器の大きさを示していると言えましょう。

何はさておき、クライマックスの星空レースが素晴らしいのです。積み重ねてきたドラマが一気に爆発する、スピード感溢れるレースの描写は手に汗握り、読んでいて自然と身体が前のめりになるほどです。速さ、に対する一途で真摯な憧れが、風を切り裂いて飛んでいく、その息づかいすら感じられるこのレース。これほど鮮烈な場面を描ききっただけでも、この作品は受賞に値するだけの価値があるでしょう。最速とは理屈ではないのです。それは信念なのです。速さへの揺るがぬ意志だけが最速の座を為し得るのです。この熱意、ほとばしる情熱が選考会で他の委員に思ったほど理解されなかったのは残念でなりません。作品全体に満ちる若さは、この作品に限っては美点でありましょう。老成しきった私たちが忘れかけたパッションがこの作品には充ち満ちています。……書いていたら、やはり断腸の思いで本作一本に推薦を絞り受賞にこぎ着けるべきだったかと慚愧の念に囚われてきました。

ああ、紙幅が足りなくなってしまうました。残りの作品への論評は、他の委員の皆さんに任せましょう。とりあえずこれを読まれている貴方が、まだ自分は若々しい、そうありたいと思っ
ているのでしたら、絶対に『星屑ミルキーウェイ』を読むべきです。この眩さから目を逸らしてしまうのは、汚れてしまった自分自身への後ろめたさに他ならないのですから。

若さという力、憧憬という情熱 稗田阿求

選考会は純粹に作品の優劣で選ぶべきものである——というのは選ぶ側として当然のことながら、いかにせん私たちも社会の中に存在する者である以上、作者の名前で多少なりともあらかじめバイアスがかかってしまうことは、否定しきれない面がある。

今回の選考会はそういう意味で、候補作が決まった時点で私にとってには難しいものになることが予想されていた。上白沢慧音氏の『満月を喰らう獣』は、私自身が彼女をスカウトし、渋る彼女を説得して書き下ろしてもらった作品なのである。勿論、だからこそ優れた作品であることは先刻承知であった。ただそれを抜きにしても、立場上これを推さないわけにはいくまい——そう、候補作が決まった時点では思っていたのである。

しかし、そんな私の姑息な処世術は、たった一作によって粉微塵にされた。『星屑ミルキーウェイ』である。候補作決定時点では未読であったこの作品を渡され、一読し、私の社会的立場は完全に粉碎された。これを推さねばならぬ。たとえ知己の友人に礼を失しようとも、稗田文芸賞の選考委員としてこの作品を推さなければ、私には次回以降も選考委員を続ける資格はない。その決意で私は『星屑ミルキーウェイ』に○をつけて選考会に臨んだ。

選考会では不利であろう、と予測はしていた。本作で描かれる無垢なる星空への憧れは、本来空を飛べない人間だからこそ描きうる憧憬である。しかし、選考委員に人間は私ひとりだった。理解されないことは覚悟していたが、私は射命丸文委員という心強い援軍を得た。かくし

て私たちは、『満月を喰らう獣』を推すパチュリー委員、幽々子委員との論戦を繰り広げ、そして最後は敗れた。敗れはしたが、悔いのない戦いであった。

本作は確かに、歳経た妖怪から見れば若く幼い作品であろう。無邪気な憧憬と、予定調和とも取れる王道の展開。だが、それをただ幼い、甘いの一語で切り捨てるのは、歳経たことでの世界に対して諦めきってしまった証左ではないのだろうか。見果てぬ世界の先はきつと輝いているはずだ、と無邪気に信じる力こそが、人間を動かしてきた情熱であったはずだ。それは妖怪には理解しがたいかもしれない。しかし、この人里に暮らす者たちにはきつと通じるものだ。私は信じる。この狭い幻想郷に暮らすからこそ、未知なる世界に目を輝かせる若さ、幼さは私たち人間の希望なのだ。

私は確かに幼いのだろう。だが、その幼さゆえに『星屑ミルキーウェイ』という作品と幸福な出会いを果たせたのであれば、今は自分の幼さを愛おしみたいと思う。

——なお余談だが、授賞式に際して慧音氏に選考会で推さなかった旨を告げ謝罪したところ、彼女は笑って「貴方が信念を持ってそれを推したのなら、貴方はそれを誇るべきだ」と告げられた。慧音女史はやはり大人である。彼女の受賞は、ひとりの友人として素直に祝福したい。

(※八雲紫氏は書面回答。『満月を喰らう獣』と『猫のための方程式』を推した)

『幻想演義』如月号 特集「第三回稗田文芸賞受賞作決定」より抜粋

◆続・博麗靈夢&伊吹萃香の稗田文芸賞放談——受賞作発表と選評を読んで

萃香 結局、順当に慧音だったねえ。

靈夢 むう、何か私だけ解ってないみたいなたち位置じゃないこれ。選評を読んでも割とみんな慧音にも好意的だし。……もっかい読んだけどやっぱり面白くなかったわ。

萃香 まあそれは仕方ないよ、合う合わないはあるんだし（苦笑）。しかし、阿求はまず間違いないく慧音推しだと思ってたから、魔理沙を推したってのは意外だったなあ。でも確かに、あの話は妖怪より人間の方が楽しめるか。人里でも売れてるしね。

靈夢 ありがたい話ね。魔理沙に売れてるって教えたらなんだか目を白黒させてたけど。

萃香 本名であれをベストセラーにされちゃあそうなるんじゃない？（苦笑） 人里に行ってみて自分で全部回収したいか思ってるんじゃないの、今頃。

靈夢 幽々子の選評が面白いわね。何とも幽々子らしいっていうか、いちいち料理に例えるから読んでお腹空いてくるのが辛いけど。

萃香 『憂鬱ラブソデイ』がオードブルってのは言い得て妙だね（笑）。私も次からは酒に例えて話してみようかな？

靈夢 それに付き合って呑んでたら身体がいくつあっても保たないわよ、私が。

萃香 あと文の選評！『星屑ミルキーウェイ』推すのは解ってたけど、「まだ自分は若々しい、そうありたいと思ってるのでしたら、絶対に『星屑ミルキーウェイ』を読むべきです。この眩さから目を逸らしてしまうのは、汚れてしまった自分自身への後ろめたさに他ならないのですから」。いや、このべには盛大に笑ったよ。とつくに（検閲削除）歳超えてるあんたが言うなつてーの（笑）。紫が欠席だったからって、自分は若いってこの露骨なアピール（苦笑）。

霊夢 ていうか、紫の奴は選考会ぐらいちゃんとなささいよ。

萃香 あの紫に誰が命令できるのさ？

霊夢 ……ちゃんと藍のを推してたのは意外だったけど。

萃香 推してたつても書面回答の内容が不明だからねえ。なんて言ってたのやら。でも前回も紫は選評出さなかったし、そういうスタンスなのかな。何しろあの性格だから、何を気に入ったとか気に入らなかつたとか明らかにしながらなさそう。

霊夢 だったら選考委員なんてやらなきゃいいじゃない。

萃香 ごもつとも（苦笑）。——あ、紫が藍を推した理由、解った。

霊夢 何よ？

萃香 受賞させて自分の代わりに選考委員にしようとしたんだって、絶対（笑）。

人間の里に書籍専門店『霧雨書店』が開店

十五日、人間の里に初の書籍専門店となる霧雨書店がオープンした。幻想郷の書籍はかねてより霧雨店の書籍コーナーで扱われていたが、出版点数の増加に対応し多くの在庫を確保する目的での分離独立となった。

初代店長に就任した森近霖之助氏は、「この店からより多くの人や妖怪が本に触れるようになってくれればいいね」と、店内業務に忙殺される店員の朱鷺子氏（仮名）の姿を見ながら語った。なお森近氏は香霖堂の店主を継続し、霧雨書店の業務は朱鷺子氏に一任すること。

営業初日となった十五日には多くの客が書店を訪れ、平台に大量に積み上げられた霧雨魔理沙さんの小説『星屑ミルキーウェイ』を手に取っていく客の姿も多く見られた。

霧雨店時代から霧雨魔理沙さんの作品を大きく取り扱っていることに関して、オーナーの霧雨氏のお話を伺おうとしたが、返事は「多忙のためノーコメント」であった。

《選考委員》

パチユリー・ノーレッジ (作家)

西行寺幽々子 (作家)

八雲紫 (妖怪の賢者)

射命丸文 (文々。新聞記者)

稗田阿求 (稗田出版代表)

第四回稗田文芸賞

メツタ斬り! & 選評

《候補作》

ミステリア・ローレライ 『夜に烏籠の鍵を』

門前美鈴 『紅の血脈』

虹川月音 『レインボウ・シンフォニー』

マーガレット・アイリス 『マスカレード・スコープ』

白岩怜 『雪桜の街』



第四回稗田文芸賞候補作発表

幻想郷文芸振興会は十七日、第四回稗田文芸賞の候補作を発表した。

今回は五作品が候補作としてノミネート。門前美鈴さんは第一回から通算で三回目の候補入り。マーガレット・アイリスさん、ミステリア・ローレライさんは初ノミネートとなった。

選考会は今月二十三日に稗田邸にて行われる。

候補作品は以下の通り。

- | | |
|--------------------------------|-----|
| ミステリア・ローレライ『夜に鳥籠の鍵を』(稗田出版) | 初 |
| 門前美鈴『紅の血脈』(スカーレット・パブリッシング) | 三回目 |
| 虹川月音『レインボウ・シンフォニー』(白玉書店) | 二回目 |
| マーガレット・アイリス『マスカレード・スコープ』(博麗神社) | 初 |
| 白岩怜『雪桜の街』(博麗神社) | 二回目 |

(文々。新聞 師走十八日号 一面より)

博麗靈夢&伊吹萃香の稗田文芸賞メツタ斬り！ 第四回編

前回の受賞レース予想への思いがけぬ反響に、性懲りもなくこのコンビが帰ってきた！ 相変わらずの歯に衣着せぬ予想&評価で、第四回稗田文芸賞候補五作品をメツタ斬り！ 前回は見事に受賞を的中させた萃香の予想は今回も当たるのか？ ふたりの評価する作品は果たして今回も受賞を逃すのか!? 神も閻魔も恐れぬふたりが今回も言いたい放題だ！

◆受賞レース予想&作品評価(◎:本命 ○:対抗 ▲:大穴 評価はA~Eの五段階)

霊夢 萃香

- | | | | |
|----|----|--------------------------------|-----|
| ▲C | —B | ミステリア・ローレライ『夜に鳥籠の鍵を』(稗田出版) | 初 |
| ○B | —C | 門前美鈴『紅の血脈』(スカーレット・パブリッシング) | 三回目 |
| ◎B | ○A | 虹川月音『レインボウ・シンフォニー』(白玉書店) | 二回目 |
| —D | ◎B | マーガレット・アイリス『マスカレード・スコープ』(博麗神社) | 初 |
| —B | ▲D | 白岩怜『雪桜の街』(博麗神社) | 二回目 |

◆ミステリア・ローレイ『夜に鳥籠の鍵を』（稗田出版）初

予想：霊夢▲ 萃香－ 評価：霊夢C 萃香B

萃香 いや、今回は悩んだ悩んだ。大本命が居ないから予想が難しいのなんの。

霊夢 そう？ 私はそんなに悩まなかったけど。（予想シートを見て）あら、意外とばらけたわね。ていうかあんた、本命そこなの？ 何、私に喧嘩売ってる？

萃香 いやいやいや、自分トコで出してる本にその言い方はどうなのさ（苦笑）。

霊夢 まあ、アレについてはまた後でじっくり話し合いますよ。で、どれからいく？

萃香 じゃあ、順番通りにいこうか。まずはミステリア・ローレイの『夜に鳥籠の鍵を』。闇の中に潜む《喰らうモノ》に追われる主人公が、だんだん袋小路に追いつめられていくサスペンス寄りのホラー。霊夢は……あれ、大穴つけてるんだ。割と面白いけど、受賞作って感じじゃなくない？

霊夢 だって稗田出版だし。

萃香 それだけかい！（笑） いやまあ稗田出版からの候補作は確かにこれだけだけどさあ。

霊夢 他ので票が割れたら、これが上がってくるんじゃないの？

萃香 どうかなあ。いや、私は嫌いじゃないけどさ。割と普通のサスペンスかと思ったら、前半の描写を作者が忘れたとしか思えない後半の展開は笑えた笑えた（笑）。

靈夢 そこ、笑うところなの？ まあ予想外の方向に話が転がっていくのは面白かったけど。

萃香 選考会では絶対整合性に欠ける、矛盾してるって言われてるだろうから、受賞は無いでしょー。こういう変な方向の面白さを評価するとすればパチュリーだけど、あつちはたぶん今回は別の作品にいくだろうし。

靈夢 前半、今にも食われそうになるあたりの迫真の描写あたりは文が好きそうじゃない？

萃香 文は今回どれ推すのかなあ。どっちにしてもこれは最初の投票で落ちるでしょー。特に文章が上手いわけでもないしさ。

靈夢 幽々子の選評がちょっと楽しみね。

萃香 あ、それは確かに（笑）。

◆門前美鈴『紅の血脈』（スカーレット・パブリッシング）三回目

予想：靈夢○ 萃香－ 評価：靈夢B 萃香C

靈夢 紅魔館の連中は稗田文芸賞と決別したんじゃないかったの？

萃香 レミリアは要らないって言ってるけど、部下が候補になることまでは制限してないってことじゃない？ もしくは単に美鈴が部下と見なされてないか（苦笑）。

霊夢　なんかそれが一番ありそうねえ。咲夜の『明日を思いだして』は候補になってないし。

萃香　咲夜は候補になったらうっかり獲っちゃいそうだから、ほら（笑）。

霊夢　でも、今回は美鈴、あるんじゃない？　混戦気味だし。あとたぶん文が推すでしょ。二回続けて推したのが落ちてるんだし、そろそろ獲らせてやろうって感じで。

萃香　文は推すのかなあ。前回の『星屑ミルキーウェイ』ほどのパワーは無いでしょ、これ。

霊夢　それは否定しないけど、この中で文が強く推すならこれじゃない？

萃香　紅の一族の長の死、その謎をめぐる親子三代の大河小説。力作だけど、ちょっと長すぎるんじゃないかなあ。最後の方はちょっと力尽きたみたいに駆け足だし。

霊夢　むしろこういう力作だからこそ、であげる賞な気もするけど。阿求もこれなら反対しないんじゃないの？　幽々子は解らないけど。

萃香　うーん、私は無いと思うなあ。いいところまではいくかもしれないけど、散々引っぱってきた祖父の死の真相が意外とあっけなかったり、これだけの長さをかけるだけの作品なのか、って言われそう。というか私もこんなに長くなっていいと思う。

霊夢　読みやすいからいいじゃない、長くても。

萃香　読みやすいのが逆に軽いつてマイナスになる可能性もあるよ。

霊夢　随分否定的ねえ。私は悪くないと思うけど。

萃香　前回の慧音に対しての自分がそうだったこと思いだしなよ（苦笑）。

◆虹川月音『レインボウ・シンフォニー』（白玉書店）二回目

予想：靈夢◎ 萃香○ 評価：靈夢B 萃香A

萃香 これは本命打つかすごく迷った。混戦だけど、軸はたぶんこれになるんじゃないかな。
靈夢 私はこれが本命。作品的にもこれじゃない？ 前回落ちたの、なんだっけ。

萃香 えーと、『憂鬱ラプソディ』。しまった、私も咄嗟に思い出せなかった（苦笑）。

靈夢 あれよりはずっといいでしょ。アル中のトランペッター、自殺未遂をしたバイオリニスト、権力闘争に負けたピアニスト。そんな感じで落ちぶれた七人の音楽家が、ひとり、またひとりと集まってきて、七人の音楽隊として大成功する話。前回はほんとにただの人畜無害ない話だったけど、今回は話作りのバリエーションも豊富だし、ひとつながりの長編としてもよく出来てるし。

萃香 うん、私も候補作の中なら出来はこれが一番だと思う。ただねえ、この作品の面白さって前回で言えば『星屑ミルキーウェイ』的な面白さでしょ。挫折と再起、っていう王道展開だし。『星屑ミルキーウェイ』を推さなかったパチュリーと幽々子、紫がどう出るか。

靈夢 他に有力なのが居ないから、すんなりこれで決まる気もするけど。

萃香 うーん、前回『星屑ミルキーウェイ』が落ちたから自信を持って本命打てないんだよね。前回は慧音と魔理沙の二作受賞だったらガチガチの大本命だったんだけど。

霊夢 仮にパチュリーあたりが推さないとしても、強く反対する理由も無いんじゃない？

萃香 そうかなあ。いや、私としてもこれに獲ってほしいんだけどさ。音楽を小説として表現するっていう難題に果敢に挑んで、ちゃんと成功してるし。でも、これご都合主義って言われ
ない？ 音楽家たちが出会う経緯とかさ。

霊夢 そう目くじらをたてるほどでもないと思うけど。素直に本命打っておけば？

萃香 うーん、打ちたいんだってば私も（苦笑）。

◆ マーガレット・アイリス『マスカレード・スコープ』（博麗神社）初

予想：霊夢 - 萃香 ◎ 評価：霊夢 D 萃香 B

霊夢 で、代わりに本命打ったのがよりもよってこれなの？

萃香 いやいや、そう馬鹿にしたもんじゃないでしょ、これ。充分あるよ。

霊夢 前回の慧音は単に私の好みに全然合わなかったただけなんでしょうけど、それでもこれは無いでしょ。このオチはどうなのよ？

萃香 そりゃ唐突に見えるオチだけどさ、作品のテーマを考えればこのオチはありでしょ。私は評価するよ。思いきったことやったなあと思う。

霊夢 思いきりすぎでしょ。私は最初何を言われたのか解らなかつたわよ。こんなちゃぶ台返し仕掛けて、結局何がしたかったのかしら。

萃香 いやだから、ちゃぶ台返しじゃなくそういう話なんだって。演じている役者の正体を、団員すら知らない仮面劇団。そのひとりが劇中で死亡し、残るメンバーが劇を続けながら殺人なのか事故なのかを考える心理ミステリー。まあ、ミステリとしての舞台設定、謎の配置が魅力的な分、確かにオチが浮いて見えるけど。要するに自意識の在処についての話でしょ？

霊夢 自意識の在処、ねえ。自分は自分でしょ。我思う、故に我あり。

萃香 だからそれに疑問を投げかける話なのに（苦笑）。まあ、普通に考えれば本命打つのは博打なんだけど、今までパチュリーの推す作品が獲ってることを考えると私はこれだと思う。テーマ的にも幽々子の『桜の下に沈む夢』系でしょ。

霊夢 あれと比べるほどのもの？ それに自意識って言っても、出てくる連中の思考回路が薄っぺらくない？ むしろだからこのオチなんだっていうの？

萃香 それも伏線じゃないの？

霊夢 単にアリス……作者本人の問題じゃないの。本気出してないだけでしょ。

萃香 そんな身も蓋もない（苦笑）。

霊夢 まさか候補になるなんて思わなかつたし、これが獲ったら私も予想止めるわ。

萃香 自分とこの本なんだからもう少し擁護してやっただけいいじゃん（苦笑）。

◆白岩怜『雪桜の街』（博麗神社）二回目

予想：霊夢一 萃香▲ 評価：霊夢B 萃香D

霊夢 あんたはこっちの評価低いわねえ。

萃香 これは完全な私の好みの問題。ベタベタでこっ恥ずかしくて読めない（笑）。

霊夢 まあ確かにベタな話だけど。でも大穴つけてるのね。

萃香 阿求あたりが気に入るかもしれないじゃん？

霊夢 ここまでベタだと無理でしょ。作品としてはそんなに悪くないと思うけど。

萃香 まあ……ねえ。冬の間しか姿を現すことができないう雪女が、人間と恋に落ちるんだけど、巡る季節がふたりを引き裂いて——っていう、筋立てはホントにベツタベタなロマンス小説。

霊夢 冬の季節感の描写がいいし、ベタなりに心理描写もしっかりしてるし。筋立てのありきたりさに目をつむればよく出来てると思うわよ。ラストは泣けるって評判になってるし。私は泣きはしなかったけど、自然な結末だからいいんじゃない？

萃香 でも、現実的に考えたら受賞は無いでしょ。

霊夢 そうねえ。第二回で候補になったやつ、なんだっけ。

萃香 『氷の王国』ね。雪山遭難サバイバル小説。自分とこで出した本忘れなさんなよ（苦笑）。

霊夢 あれよりは評価してもらえるんじゃない？

萃香 まあね。美点だった冬の描写の上手さはそのままに作風の幅広さは示したし。ただ、小説としては去年候補漏れした『冬色家族』の方が良くない？

霊夢 そりゃそうだけど。

萃香 まあ、万一獲ったら大騒ぎだね。既に結構売れてるでしょ？ 一般受けはいいだろうか、獲ったらたぶん『星屑ミルキーウェイ』より売れるよ。

霊夢 期待はしないでおくわ。

◆ まとめ ◆

萃香 軸は虹川月音だろうけど、今回はどう転ぶか読めないねえ。

霊夢 まあ、あんたの言う通りパチュリーが『マスカレード』推すとしても、あれは無いわよ。

萃香 紫が『マスカレード』推せばいけるんじゃないかなあ。文は『レインボウ』か『紅』か。

阿求は『レインボウ』か『雪桜』か……。なんか幽々子次第になりそう。

霊夢 幽々子が推せば『レインボウ』で決まりじゃない？

萃香 やっぱ『レインボウ』かあ。いや、そうなってくれると私も嬉しいんだけどさ（笑）。

第四回稗田文芸賞は初の二作受賞に

第四回稗田文芸賞は二十三日、人間の里の稗田邸にて選考会が開かれ、候補となった五作品から、虹川月音さんの『レインボウ・シンフォニー』（白玉書店）と、白岩怜さんの『雪桜の街』（博麗神社）の二作品が受賞作に決定した。二作受賞は史上初となる。授賞式は来月五日、稗田邸にて行われる。

選考委員の西行寺幽々子氏は、『レインボウ・シンフォニー』の受賞は早々に決まったのだけれど、『マスカレード・スコープ』と『雪桜の街』を強く推す委員があって、最終投票で『雪桜の街』との二作受賞に決定したわり。どっちも美味しい作品だったから、たまにはこういうのもいいんじゃないかしら」と選考の経緯を楽しげに語った。

虹川月音さんは、本名のルナサ・プリズムリバー名義でプリズムリバー騒霊楽団のバイオリニストとしても活躍する音楽家。『レインボウ・シンフォニー』は、一度は挫折した七人の音楽家たちが集まって音楽隊を結成し、コンサートを成功させるまでを描いた音楽小説。

白岩怜（本名：レティ・ホワイトロック）さんは、霧の湖近くに暮らす冬妖怪。『雪桜の街』は、冬の間しか会うことのできない人間と雪女の悲恋を描いた恋愛小説。

選評は来月十日に発売される『幻想演義』如月号に全文掲載される。

虹川月音さんの受賞のことば

「まさかこのような光栄な賞をいただけるとは予想だにせず、驚きとともに大変光栄に思います。構想段階から執筆に協力してくれた妹たちに感謝を。過去の受賞作品の輝かしい評価と、受賞作家の方々の華々しい活躍に恥じることはないよう、今度とも努力していきたいと思えます。……本当にそんなに評価してもらえたのかしら。相応しくないって後から叩かれたらどうしよう……不安……」

白岩怜さんの受賞のことば

「うたたねしてる間の暇潰しに書いた作品が、こんなところで賞を貰っちゃうなんてびっくりしたわ。そんなに権威のある賞なの？ 私なんかで良かったのかしら。え、賞金？ どうしようかしらね。使い道もそんなに無いし……困ったわね」

(文々。新聞 師走二十四日号 一面より)

《選評》

梓組^{ジャン}への挑戦状　パチュリー・ノーレッジ

たとえば、ミステリー。SF。ファンタジー。恋愛小説。青春小説。ホラー。ファミリールマンズ。歴史小説。格闘小説。——そういった梓組を、この幻想郷の文芸に持ち込んだ元凶は他でもない私自身である。この幻想郷に文芸を広めるために、なるべく分かりやすい紹介の手段は必要不可欠であった。何の説明もなくただ作品を置いておくだけでは、人は見向きもしてくれない。手に取らせるきっかけとして、紹介として、ジャンルという梓組は必須であった。

しかし、その梓組は本来、あくまで読者のためのものでしかない。カテゴリーとは読者へ向けられた標識でしかなく、作品があつてそれから標識が立てられるはずだ。まず標識があつて、その先に作品を置きにいく——ジャンルのために、作品を書くという行為は、本末転倒であるはずなのだ。無論、その主客転倒によって生み出される傑作が数多存在するということを踏まえても。

その意味で、候補作の一編、『マスカレード・スコープ』を読了した瞬間の興奮は、今もつてなお忘れがたい。この作品ははじめ、いかにもというミステリーの体裁で幕を開ける。それぞれが役名で呼びあい、仮面の下の素顔は誰も明かさぬ仮面劇団。その劇中に死者が生じ、それぞれが劇を演じ続けながら、互いに疑心暗鬼に陥っていく——ミステリーという梓組の中に

あつては、なかなか魅力的な設定と謎であり、私自身もそういう枠組の中での作品として読んでいた——結末に辿り着くまでは。知らず自らに填めてしまう常識という枷、枠組という予断を木っ端微塵に粉碎する、この結末には一読、呆然と息を吐いた。

この結末を、稚拙なデウス・エクス・マキナでしかないと切り捨てるのは、すなわち己自身が枠組に——このジャンルの作品はこのようであらねばならぬという偏狭な固定観念に——囚われていることの証左に他ならない。本作はまさしく、枠組を利用しながら、その枠組を粉碎し、同時に読者の世界観すらも——自意識という枷すら砕かんとする、高度に挑戦的な作品である。既にして枠組に囚われた当たり障りのない作品が量産されつつある中、斯様な勇氣ある文学的挑戦に私は敬意を表し、本作に唯一の○をつけて選考会に望んだ。

が、残念なことに他の委員の理解は得られなかった。心理描写の拙劣さを糊塗するためのちやぶ台返しに過ぎないという他の委員の批判に対し、最終的に膝を屈してしまった自分の無力を悔やむ。「パチュリーさんの仰るような挑戦的な作品なのか、それとも稚拙などんでん返しなのか。本作のみでそれを量るのは難しいでしょう。次作を待ってみては」——私以外の委員は射命丸文委員のその意見に同意した。多数決という枠組に私自身が屈したのだ。これを無念と言わずして何と言おうか。望むらくは、マーガレット・アイリス氏の第二作が、本作の本質を貶めるものでないことを、今は祈りたい。

——紙幅が尽きたので、他の候補作については他の三氏の選評を参照願いたい。

あざやかな味わい 西行寺幽々子

候補作の中で一番気に入った作品が、受賞という形で評価されるのはとても嬉しいものね。今回の選考会も美味しい作品が多かったけれど、そういう意味でも前回以上に楽しい選考会だったわ。選考委員みんなの好みの違いも色々と見られたし。

というわけで、私が推したのは『レインボウ・シンフォニー』。色鮮やかで、見る目にも楽しいパーティ料理みたいな作品だったわ。味わいも格別。音のない紙の上に、文字という魔法を駆使して華やかな音楽隊の行進を描き出して、とても爽やか。前回候補になった『憂鬱ラブソデイ』は、様々に取りそろえているように味わいの似たお話が多くてちょっと単調だったけれど、今回はどこから箸をつけても違う味が楽しめて、しかもそれぞれが他の味わいを引き立てていたわ。七色の音楽、七色の味わい、まさに『レインボウ・シンフォニー』。こんな素敵な作品を楽しめて、作者さんにも受賞という形で喜んで貰える。素敵なことね。

もう一作の受賞作、『雪桜の街』は丁寧に作られたアイスクリーム。それだけだと甘いだけで飲み物が欲しくなるけれど、ほろ苦く悲しい後味の対比がよく甘さを引き立てていたわ。泣ける作品と言われるけれど、結末が悲しくて泣けるということには、そんなに意味はないの。これは悲しい結末でなければいけない作品なのか。そこがきちんとしているから、ありふれた筋立ての作品だけれど、味わいに芯が通っているのね。

『紅の血脈』はとっても分厚くて食べ応えのある三枚重ねのステーキだけれど、ちょっと焼

き加減の選択が残念だったわ。しっかり火の通ったウエルダン、ウエルダンと続いて、最後に急に血のしたたるようなレアを出されたみたい。ずっとウエルダンでも顎が疲れるし、もう少しバランスを考えても良かったんじゃないかしら。お肉はとっても良かったのだから、順番に味わせてほしかったわ。

『夜に鳥籠の鍵を』は、刺激的な辛味のあるスープ。だけど飲み終える頃にはなんだか温くなつて、辛味もどこかへいってしまっていたのが勿体なかったわ。前菜として食欲を増進させるのには、ちょうどいいんじゃないかね。

『マスカレード・スコープ』は不思議な作品だったわ。蓋を被せられた料理を出されて、何が出てくるのかわくわくしながら蓋を開けたら中にまた蓋があって、そうして蓋を開け続けたら結局中は空っぽだった——そんな感じ。他の委員が、空っぽであることに意味のある作品なんだ、って力説なさってたけれど、私は美味しいお料理が食べたかっただけなのに、肩透かしをくらってしまったみたいでちょっと残念ね。

ああ、選評を書いていたらお腹がすいてきたわ。夜食の支度をするように、妖夢に伝えておきましよう。

文を楽しむと書いて《文楽》 射命丸文

四回目の選考にして、本命と推した作品に受賞の榮譽を与えることができ、とても喜ばしく思います。同時に、これまで文学性の強い、格調の高い——言ってしまうえば、一般読者にとってはやや難しい、あるいは堅苦しい印象もあるだろう作品を受賞させてきた本賞にとっても、今回の二作品の受賞は、明快なエンターテイメントである作品を選んだという点で、非常に大きな一歩ではないでしょうか。

今回、私が本命として推したのは『レインボウ・シンフォニー』です。一度は音楽に挫折した音楽家たちが集まり、人々の心を動かす音楽隊となって世界に音楽を満たす。非常に爽やかで、誰が読んでも面白い作品です。バラエティに富んでいながら長すぎず、音楽を紡ぐ筆致も軽快でとても読みやすい。——作者の普段の性格を知っていると、いささか妹さんの影響が作品に強すぎるのではないかという気はしなくてもないですが、まあ人格と作品は別物というところで。本作のようなエンターテイメントの正道に行く作品を正しく評価することができ、稗田文芸賞そのものも器も大きくなったのではないのでしょうか。

もう一方の受賞作となった『雪桜の街』も、異種族同士の恋愛という珍しくもないモチーフを深く掘り下げつつ、感情を揺さぶるツボを心得た達者なエンターテイメントです。……が、この作品については、非常に個人的な趣味というか好みの段階で、なんというかその、恥ずかしくて読むのが大変辛くて……推すことはできなかったのですが、受賞に異議は特にない、と

いうことで、どうかひとつ。

個人的には『紅の血脈』も悪くない作品だとは思いましたが、選考会ではやはり長すぎるところがネックとなり落選となりました。骨太な力作であることは確かなのですが、それだけでもう少し枝葉を払って幹の力強さで勝負すべきだったのではないかと。終盤の失速も残念です。

『夜に鳥籠の鍵を』は前半はなかなか手に汗握るサスペンスですが、後半で物語が一気に整合性を失ってしまうのが非常に勿体ない。前半で書いたことを忘れてしまったんでしょうか？

『マスカレード・スコープ』は、ミステリーとしては良い題材だと思えますが、ラストのどんでん返しの是非については評価を保留したいと思います。受賞を強く主張したパチュリー委員を宥めるのは一苦勞でしたよ。幽々子さんも阿求さんも私に押しつけないで欲しいです。

ともあれ、『レインボウ・シンフォニー』という非常に楽しい受賞作を迎えることができ、今回はとても満足のいく選考会でありました。パチュリー委員や阿求委員のように文学性を問うのが悪いとは言いませんが、音楽が《音を楽しむ》と書くように、文学も《文楽》——《文を楽しむ》という文字にして、肩肘を張らず誰でも楽しめるものであれば良いのではないかと私は思いますね。

人の想い、妖の想い 稗田阿求

この幻想郷の全てを見、記録する者である阿礼乙女として、また稗田出版代表として、近年の文芸ブームの中で出版される多くの本に目を通して来た。様々の物語が自分の中を通り過ぎていく、それが日常となってしまうと、しばしば本を読みながら、以前ほど物語の中に没入できなくなっている自分に気付く。無意識のうちに過去に読んだ本を比較し、評価を定め、客観的に作品を眺めてしまう、そんな癖がいついてしまっている。

時間を忘れて物語の世界に没入し、気付けば夜を明かす——知らず忘れていたその感覚を、今回、久しぶりに思い出させてくれる作品に出会った。白岩怜氏の『雪桜の街』だ。

振り返ってみれば、筋立ては非常にシンプルな話である。人間と雪女という、決して結ばれざる異種族同士の恋。しかし作者は、ただ一点を深く深く掘り下げることにより、ありきたりなおとぎ話を、豊穣なる物語へと昇華してみせたのである。その一点とはすなわち、惹かれ合わざるを得なかったふたりの、互いを求め合う痛切なる想いだ。

なぜ人は恋をするのだろうか。それは弱い生き物だから、支え合う相手を求めずにはいられないのだ、と言う者がいる。だがそれならば、人よりも永い時を生き、人よりも遥かに強い妖怪が、何故人と同じように恋をし、伴侶を求めめるのか。あまつさえ、己よりずっと脆弱で、僅かな時間しか傍らに在ることのできない人間を、妖怪が愛してしまうという事例がこの人里にも数え切れないほど伝わっているのか。

本作が掘り下げるのは、人と妖がともに抱える強さと弱さだ。人は弱い。だが妖怪とて、人と同じく心を持つ以上、人と同じように弱さを抱えている。冬妖怪である作者が紡ぐ、永く生きるが故の妖怪の弱さは真に迫り、人間の胸を打つのである。初めから定められた悲しい結末も、それが安易な悲劇ではなく、掘り下げられたふたりの想いが導く必然であるからこそ、深い悲しみとなって読者を襲うのだ。

文学性、娯楽性ともに優れた音楽小説である『レインボウ・シンフォニー』の受賞は当然であるが、前回、人間代表として『星屑ミルキーウェイ』を受賞させられなかった反省から、今回は断固たる決意で本作を推した。結果、二作受賞という理想的な結果となり、選考委員としての使命を果たせた充実感に満たされている。なので、その他の作品について厳しい言葉で述べることはここでは避けた。他の委員の選評に任せることとしよう。

『雪桜の街』は、決してありふれた、小手先の技術で泣かせる小説ではない。人間と妖怪の生について深く追求した、高度に文学的な恋愛小説である。泣けるとの評判に尻込みをしているひねくれ者の読者諸兄もいるだろうが、是非偏見なく手にとってもらいたい作品である。

(※八雲紫氏は書面回答。『紅の血脈』を推した)

◆受賞作発表と選評を読んで、メッタ斬りコンビの感想

萃香 うーん、素直に『レインボウ・シンフォニー』に本命打っておくべきだったのか(苦笑)。

霊夢 だから言ったじゃない。アレはパチュリーが推しても無理だつて。

萃香 あのオチ、私はアリだと思うんだけどなあ。

霊夢 まあ、アレについてはもういいわよ。オチについての結論はアリス……アイリスの二作目が出るでしょうし。それより、ねえ。まさか『雪桜の街』が獲るとは。

萃香 ホントだよ。大穴はつけたけどさあ、いやはや聞いたときには腰が抜けたね。阿求が全力で推したとは小耳に挟んではいたけど、前回『星屑ミルキーウェイ』を落とした反省も選考会全体にあったのかな。

霊夢 阿求が「高度に文学的な恋愛小説である。」って言うてるけど、そこまで言うほどのもんかしら？ むしろストレートな泣かせるエンタメだと思っただけどねえ。

萃香 いや、私はアレは文と同じく恥ずかしくて読めないからパス(笑)。

霊夢 はいはい。『レインボウ・シンフォニー』は順当も順当だったわね。阿求の選評は『雪桜の街』を推しまくってるけど、さらっと『レインボウ』も「受賞は当然である」って高く買ってるし、結局パチュリーも反対しなかったみたいだし。

萃香 音楽描写が上手いのが気に入って貰えたのかな？ まあ、あれがちゃんと評価されたの

はめでたい、めでたい。良い作品が受賞すると酒も美味しい（笑）。

霊夢 そういえば今回獲ったのはどっちも二回目のノミネットなのよね。前に候補になったのと比べて良くなってるから、っていうのもあるのかしら。

萃香 作風的に選考委員の好きそうなところに寄せた、つてのもあるんじゃない？ ほのぼのだけ、サバイバル描写だけじゃ獲れないってことで。それでいくと美鈴が不憫だけど（苦笑）。

霊夢 『紅の血脈』は紫が推したみたいね。なんでかしら？ 紫の気に入るような作品？

萃香 紫のことだから、紅魔館組への嫌がらせとかじゃない？（笑） 紫の好みで言えば『マスカレード』推すかと思っただけどなあ。推してくれば良かったのに。

霊夢 だからアレは無理だってば。ま、『雪桜の街』の受賞には驚いたけど、おかげでまた売れてくれるから、こっちとしてはありがたいわね。

萃香 そういやレティが賞金の使い道に困ってたけど、賽銭として入れてもらえば？（笑）

霊夢 ……こないだぶん取りに行ったのよ。使い道ないならうちに寄こせて。

萃香 あ、先週風邪引いたのってひよっとして……。

霊夢 冬にあいつのところに行くもんじゃないわね。肝が冷えたわ、寒さで。

萃香 誰が上手いこと言えと……そんなに上手くもないか（苦笑）。

人気屋台の店主が失踪？

八目鰻の串焼きが人気の屋台「夜雀の八目鰻屋」の店主、ミステリア・ローレイさんが昨年末から行方不明になっていることが九日、関係者の証言で明らかになった。当初は年末年始の休業かと思われたが、普段営業を再開する一月七日になっても屋台が開く気配がなく、友人たちがミステリアさんの行方を捜している。

屋台の常連でミステリアさんと親しい藤原妹紅さんは、「二十七日だったか、去年の最後の、営業日に顔を出したときはいつも通りだったんだが……私が帰ったあともしばらく店を開けてみたいだったから、そのときに何かあったのかもしれない」と語る。

別の証言では、ミステリアさんが最後に目撃された二十七日の深夜、店の近くで光る蝶を目撃したとの情報もあり、ミステリアさんの失踪と何らかの関わりがある可能性もある。

人気屋台の店主はどこへ消えたのか。彼女の行方は現在も、杳として知れない。ミステリアさんの行方について、情報提供は鴉天狗報道部連盟まで。

《選考委員》

パチユリー・ノーレッジ (作家)

西行寺幽々子 (作家)

上白沢慧音 (作家・歴史教師)

八雲紫 (妖怪の賢者)

射命丸文 (文々・新聞記者)

稗田阿求 (稗田出版代表)

第五回稗田文芸賞

メツタ斬り! & 選評

《候補作》

霧雨魔理沙『星盗人と鏡の国の魔女』

八坂神奈子『天照戦記 蛙は口ゆえ蛇に吞まれる』

大橋もみじ『うちの上司が横暴なんですけど。』

河城にとり『キカイノコトバ』

秋静葉『落ち葉の季節に逢いましょう』



第五回稗田文芸賞候補発表

幻想郷文芸振興会は十八日、第五回稗田文芸賞の候補作を発表した。

今回は五作品が候補作としてノミネート。五人のうち四人が初ノミネートと、非常にフレッシュな顔ぶれとなった。また今回から、第三回受賞者である上白沢慧音氏（作家・歴史教師）が選考委員に加わることが発表された。これにより選考委員は六人制となる。

選考会は今月二十四日に稗田邸にて行われる。

候補作品は以下の通り。

- | | |
|--------------------------------|-----|
| 霧雨魔理沙『星盗人と鏡の国の魔女』（博麗神社） | 二回目 |
| 八坂神奈子『天照戦記 蛙は口ゆえ蛇に吞まるる』（守矢新社） | 初 |
| 大橋もみじ『うちの上司が横暴なんですけど。』（鴉天狗出版部） | 初 |
| 河城にとり『キカイノコトバ』（鴉天狗出版部） | 初 |
| 秋静葉『落ち葉の季節に逢いましょう』（稗田出版） | 初 |

（文々。新聞 師走十八日号 一面より）

博麗靈夢&伊吹萃香の稗田文芸賞メツタ斬り！ 第五回編

二度あることは三度ある！ 今年も稗田文芸賞の季節に、このコンビが帰ってきた！ 鬼が笑うか巫女が笑うか、天下御免の最強コンビが今年も候補五作品をメツタ斬り！ まさかの大穴が二作受賞で滑り込んだ昨年のような衝撃は今年は起こるのか、それとも大本命が順当に受賞するのか？ ふたりの予想と評価やいかに！

◆受賞レース予想&作品評価(◎:本命 ○:対抗 ▲:大穴 評価はA~Eの五段階)

霊夢 萃香

- | | | |
|-----|--------------------------------|-----|
| ○ B | 霧雨魔理沙『星盗人と鏡の国の魔女』(博麗神社) | 二回目 |
| ◎ A | 八坂神奈子『天照戦記蛙は口ゆえ蛇に吞まるる』(守矢新社) | 初 |
| ▲ C | 大橋もみじ『うちの上司が横暴なんですけど。』(鴉天狗出版部) | 初 |
| - C | - B 河城にとり『キカイノコトバ』(鴉天狗出版部) | 初 |
| - C | ▲ C 秋静葉『落ち葉の季節に逢いましょう』(稗田出版) | 初 |

◆霧雨魔理沙『星盗人と鏡の国の魔女』（博麗神社）二回目

予想：霊夢○ 萃香○ 評価：霊夢B 萃香B

霊夢（予想シートを見て）なんだ、今回はほとんど一緒じゃない。

萃香 この候補作で、これ以外に予想のしようなんて無いじゃん（苦笑）。そのぐらい今回はガチガチの鉄板レース。事実上二択だから予想が楽でいいわー（笑）。

霊夢 まあ、まず間違いなく神奈子か魔理沙よねえ。他の三つが小粒すぎるもの。

萃香 そんなこと言っていると、前回の『雪桜の街』みたいに足元すくわれるかもしれないけど。でも二回続けて二作受賞ってことも無いだろうしねえ。

霊夢 そう考えると、魔理沙は運が無いわねえ。前回だったら阿求に推してもらえたかもしれないけど、今回は分が悪いわね。

萃香 本人はわりと気合い入れて受賞狙ってきたっぼいんだけどねえ（苦笑）。というわけで魔理沙のからいこうか。『星盗人と鏡の国の魔女』は、星空の国から一番星を盗み出した主人公が、逃げ込んだ鏡の国で孤独な魔法使いと出会って——っていう、ちょっと幻想小説風味のファンタジー。

霊夢 これまでの受賞作をじっくり研究してきたみたいな作品よね。複数の世界を行き来する構成とか、後半ちよっと観念的な方向に向かうあたりとか。

萃香 本人としては『魔法図書館は動かない』とか『桜の下に沈む夢』っぽいのを目指したんだろうね。ただ、あれほど文学的かっていうと――。

霊夢 やっぱりエンターテイメントになってるあたりが、魔理沙らしいっていうか。パチュリーや幽々子みたいに、いくらでも深読みできる作風にしようとしてるみたいだけど、最後はわりとシンプルなところに行き着いちやうのよねえ。

萃香 泥棒のくせに馬鹿正直で騙されやすい主人公と、嘘しか言わない魔法使いのキャラなんかは相変わらずよく立ってるし、世界観もメルヘンにみえてところどころ妙にドライなのが面白いよね。でも今回は文学性に浮気してみようとしたのがマイナスになってる気はするなあ。悪くないけど、『星屑ミルキーウェイ』と比べてこっちが面白いかっていうと、うーん。

霊夢 私もそれは同意。作品としては『星屑ミルキーウェイ』の方が上でしょ。

萃香 それでも阿求は推すんじゃないかな？ただ、今回はたぶん文が『天照戦記』に行くだろうし、新しく入った慧音もそっちでしょ。

霊夢 幽々子は？今までの雰囲気からしてこういうの好きそうだけど。

萃香 そうなるとパチュリー次第かなあ。今回パチュリーがどこ推すのかがちょっと読めないんだよねえ。基本的にどれもシンプルな話だし。

霊夢 阿求は前回『雪桜の街』をこり押しした立場だから今回は大人しいんじゃない？ 対抗ではあるけど、受賞は難しいんじゃないかしらね。

◆八坂神奈子『天照戦記 蛙は口ゆえ蛇に吞まるる』(守矢新社)初

予想：靈夢◎ 萃香◎ 評価：靈夢A 萃香A

萃香 順当にいけば今回はここだよな。

靈夢 というか、何を間違ったらこれが落ちるのかっていう感じね。地方の肥沃な大地で信仰を集めていた土着神の元に、中央政府が派遣した軍勢が攻め込んできて、十万の軍勢を前に、僅か数千の兵を引き連れた土着神が戦いを挑む——っていう、神と人の相克を真っ向から描いた戦記小説。

萃香 まー、間違いが無いとも言えないけどさ(苦笑)。票を読んでもほぼ当確でしょ。文と慧音は確定で、阿求もこっち推すかもしれないし。特にパチュリーの好みじゃないかもしれないけど、他にめぼしいのが無いと思えば一番出来のいいこれに行く可能性はあるでしょ。三回では慧音推してるわけだし。

靈夢 むしろ慧音が、自分のフィールドに近い小説だから厳しくなるんじゃない？

萃香 そんなこと無いと思うけど。歴史的な背景の描写は最小限に抑えて、十万対数千の戦記描写に集中してるし。さすがに本人が神だけあって、神と人の関係もよく書けてる。

靈夢 土着神の目線が低いのが、人間としては印象が良いわね。人間側の葛藤とか、神への畏怖の感情とかも真に迫ってるし、敵側の人間についてもしっかり書き込んでるし。

萃香 書きようによっちゃ、ただ傲慢で荒唐無稽なだけの話になりそうなのを、絶妙なところでバランス取って、神と人間の争いを最後は人間と人間の物語に昇華して終わる。ラストの一文がまた抜群に決まってるんだ。ネタバレになるから引用は避けるけど。

霊夢 まあ、鉄板でしょ。エンターテイメントとしても上出来だし、書かれていないことに関して深読みもできるし、落ちる理由が見当たらないもの。

萃香 だねえ。当てても配当が低すぎるのがネックってぐらいのもんだわ(苦笑)。

◆大橋もみじ『うちの上司が横暴なんですけど。』(鴉天狗出版部)初

予想：霊夢▲ 萃香－ 評価：霊夢C 萃香C

萃香 いや、ノンフィクションでしょこれ(苦笑)。

霊夢 この上司って、どう考えても文のことよねえ。

萃香 報道会社に入った主人公が、破天荒な先輩記者に振り回されながら成長していくコミックノベル。このムチャクチャな報道姿勢とか、相手を煙に巻く弁舌とか、営業スマイルと素顔の落差とか、どっからどう見ても文なわけで……(苦笑)。

霊夢 さて、モデルにされた本人がどう出るか。

萃香 大笑いするか激怒するか、二択だろうね、予想は後者で（笑）。なんだかんだで実はいい人、っていうオチがつくかと思ったら、別にそんなこともなかったしねえ。

霊夢 というか、あんたは文からこれについて何か聞いてないの？

萃香 こないだ出たばかりだし、噂だと文に秘密で出版されたそーだよ。どうも候補になるまで文はこんな本が出てたことすら知らなかったみたい（苦笑）。

霊夢 なんだかねえ。大穴はつけてみたけど、さすがに軽すぎるかしら。

萃香 主人公の扱いは冷静に考えてみればかなり悲惨だし、上司の横暴が目にも余るって言われるかもしれないけど、読み口は軽いし最終的にはいい話になるから、幽々子的に言えばピリ辛のスナック菓子とかそんな感じかな（笑）。

霊夢 冷静に考えて、スナック菓子に受賞は無いわよねえ。

◆河城にとり『キカイノコトバ』（鴉天狗出版部）初

予想：霊夢－ 萃香－ 評価：霊夢C 萃香B

萃香 私は結構好きだけど、これを評価する選考委員が思いつかない（苦笑）。

霊夢 大橋もみじがノンフィクションならこっちは技術書？

萃香 幻想郷的には未知の技術を描いたSFかな。ハードSF。

霊夢 普段馴染みの無いジャンルだからよく分かんないのよねえ。

萃香 機械に意志を持たせることは可能か、をテーマに、工学知識を駆使して生物とコミュニケーションが可能か、をテーマにするメカニク小説。ぶっちゃけ選考委員にSF好きが居ないから無理でしょ。パチュリーは狭義のSFも当然読んではるはずだけど、別にSFファッンってわけじゃなさそうだし。

霊夢 小難しい用語と説明を読み飛ばせば、話はシンプルよね。ていうか、よく知らないジャンルすぎてマトモに評価できそうにないから私はパス。

萃香 SF的には技術開発のロジックとリアリティが読みどころなのに（苦笑）。いや、私もそこまで詳しいわけじゃないけどさあ。技術開発に向ける並々ならぬ熱意みたいなのは充分伝わってくるけど、それならノンフィクションでいいって言われておしまいかな。

◆秋静葉『落ち葉の季節に逢いましょう』（稗田出版）初

予想…：霊夢 — 萃香 ▲ 評価…：霊夢 C 萃香 C

霊夢 これは……地味ねえ。

萃香 地味だねえ。そんなに悪くない作品ではあるけど……。

霊夢 毎年、秋が巡ってくるのとどこからともなく届く手紙。その差出人が誰なのか、いつかその人に会えるのか……っていう、恋愛小説？

萃香 恋愛って感じじゃないね。どっちかっていうと手紙の差出人より、悪態つきながら主人公を見守ってる妹のキャラがいいから家族小説っぽい。

霊夢 差出人の正体も明らかになつてみれば「なーんだ」って感じだからミステリーってわけでもないし。文章はそれなりに秋の景色の描写はときどきすごく綺麗なんだけど、ストーリーは薄味で、雰囲気を読ませる小説ね。言っちゃえば読んだ後に何が残るわけでもないから、別に読まなくてもいい小説なんだけど。

萃香 そんな身も蓋もない(苦笑)。作品に漂う静謐な空気感はなかなか得難い資質だと思うよ。しんしんと雪のように落ち葉が降りつもっていく森の描写なんか綺麗でいいじゃん。ただ文学的かっていうと食い足りないし、かといってエンタメにしちゃ物語性に欠けるし、どっちつかずだなあって印象は拭えないかな。

霊夢 雰囲気の良いさを褒めてはもらえないかもしれないけど、それだけでしょね。

萃香 ま、万一があるとすればこれじゃないかとは思うけど、さすがに無いか。

◆ まとめ ◆

萃香 というか、今回は候補作を見直してほしいなあ。なんで候補に入らなかったのかよく解らないのがいくつかあるもん。

霊夢 永月夜姫の『時の密室』（竹林書房）とか？

萃香 富士原モコの『百万回目の死』（竹林書房）とか、マーガレット・アイリスの『マリオネットは悲しまない』（博麗神社）とか。個人的な趣味でいえば、小松町子の『無責任一代記』（是非曲直行出版部）。まあ候補になってもどうせ獲れないのは一緒だけどさ（笑）。

霊夢 門前美鈴は子供向けにシフトしたんだっけ。

萃香 『風雲少女・リンメイが行く！』（スカレット・パブリッシング）ね。割と面白かったけど対象外だと思われたかな？

霊夢 まあ、何が来たって『天照戦記』の受賞は堅いでしょ。

萃香 そりゃそうだけど（苦笑）、『百万回目の死』はワンチャンあったんじゃないかなあ。

霊夢 約一名冷静に評価できなさそうだから外したんじゃない？

萃香 自分が選ばれた第三回で選んだ側の阿求はちゃんと弁えてたつてのに……（苦笑）。

第五回稗田文芸賞に八坂神奈子さんの『天照戦記』

第五回稗田文芸賞は二十四日、人間の里の稗田邸にて選考会が開かれ、候補となった五作品から、八坂神奈子さんの『天照戦記』蛙は口ゆえ蛇に吞まるる』（守矢新社）が受賞作に決定した。授賞式は来月五日、守矢神社にて行われる。

今回から新たに選考委員に加わった上白沢慧音氏は、「選考会は最初から最後まで、満場一致で『天照戦記』の受賞という方向で進みました。他の作品についても検討の時間は持たれましたが、やはり頭ひとつ抜きで『天照戦記』を揺るがすだけの材料はなく、順当に受賞作の決定となりました」と生真面目な口調で選考の経緯を語った。

八坂神奈子さんは、守矢神社に祀られる風雨の神。『天照戦記』は、土着神の率いるゲリラ軍が中央政府の軍勢に立ち向かう姿を描いた戦記小説。

選評は来月十日に発売される『幻想演義』如月号に全文掲載される。

八坂神奈子さんの受賞のことば

「信仰萃めの一環として書いた作品だったが、こうして評価して貰えるとはありがたい話だねえ。感謝するよ。え、賞金かい？ まあ、色々と使い道はあるさ」

文々。新聞

季五十二
二十の
二走の
百文々
師新聞

第五回稗田文芸賞決定

八坂神奈子さんの『天照戦記』が受賞

第五回稗田文芸賞は二十四日、人間の稗田邸にて選考会が開かれ、候補となった五作品から、八坂神奈子さんの『天照戦記』蛙は口ゆえ蛇に呑まるる(守矢新社)が受賞作に決定した。授賞式は来月五日、守矢神社にて行われる。



今回から新たに選考委員に合わせた上白沢慧音氏は、「選考会は最初から最後まで、満場一致で『天照戦記』の受賞という方向で進みました。他の作品についても検討の時間は持たれませんが、やはり頭ひとつ抜きました『天照戦記』を揺るがすだけの材料はなく、順当に受賞作の決定となりました」と生真面目な口調で選考の経緯を語った。

八坂神奈子さんは、守矢神社に祀られる風雨の神。『天照戦記』は、土着神の率いるゲリラ軍が中央政府の軍勢に立ち向かう姿を描いた戦記小説。

選評は来月十日に発売される『幻想演義』如月号に全文掲載される。

八坂神奈子さんの受賞のことは「信仰草めの一環として書いた作品だったが、こうして評価して貰えるとはありがたい話だねえ。感謝するよ。え、賞金かい？ まあ、色々と使い道はあるさ」

謎の老人、幻想郷の空を舞う

鹿(?)が引くそりに乗った赤服の老人の正体は？

勝 5面
憂 記事

《選評》

文芸への宣戦布告　パチユリー・ノーレッジ

これまでの選評で幾度となく語ってきたが、私は梓組に収まることなく、そこから逸脱していく作品をこよなく愛している。多様な読みを受け入れる豊穣な物語と、固定観念に囚われぬ自由な発想、切り口。そういった作品を、私は偏愛する。ただ、だからといって一部で言われているように、梓組の中で正道を行く力作を不当に貶めるつもりは毛頭ない。この選考会においてはその類の作品を推す委員は他にいるというだけの話だ。

さて、今回の候補作にはそのような私の偏愛を捧げるに値する、逸脱の傑作は挙がってはこなかった。では、私が今回の選考を退屈だと感じたかといえば、決してそんなことはない。全体としてやや小粒な感はあったが、ただ一作の圧倒的な存在感はそれを補って余りあった。受賞作となった『天照戦記』である。

誤解を恐れず言ってしまうば、本作は決して私が愛する類の小説ではない。しかし、作品としての完成度は頭抜けている。力強く躍動感溢れる筆致、細部まで気の配られた構成、明快にして一貫してぶれることのない主題。真っ直ぐに伸ばした幹を、太く太く成長させ、一本の巨木となした、堂々たる力作だ。梓組を逸脱するのではなく、梓組の中から大きく大きく、突き抜けるほどに力強く伸ばされたその枝に咲き誇る物語の豊穣は、即ち物語そのものへ叩きつけ

られた挑戦状なのである。明快かつ単純なストーリーを、これほどの巨木に育て上げたのは、小手先の技術を突き抜けた圧倒的な物語る力だ。端的に言えば——これこそが「面白い」ということなのだ、という、力強い文芸への宣戦布告だ。受賞は当然の結果であった。

あまりにも『天照戦記』という存在が大きすぎたのが、他の候補四作にとつては不幸であった。これまで発表された幻想郷の全ての小説作品を見渡しても、これに比肩しうる作品は数えるほどである。ただそれを抜きにしても、いささか他の四作は小粒であった感はある。

—その中では『うちの上司が横暴なんですけど。』が目についた。不幸体質の主人公の弄られかたと、横暴な上司の行動の端々に見える小さな気配りのバランスが良く、一歩間違えばただ上司に苛立つだけの作品となるのを回避して、上質のコメディ小説に仕上げた佳品である。受賞、というハードルを越えるにはいささか力不足ではあったが、才筆であることは確かだ。その才に溺れることなく、さらに研鑽を積んだ作が翌年以降の候補に挙がるのを期待したい。

『星盗人と鏡の国の魔女』は魅惑的な世界を構築しようとした努力は伺えるが、最後に主要人物が至る境地が、かえって物語の底の浅さを露呈してしまった。『キカイノコトバ』と『落ち葉の季節に逢いましょう』はそれぞれ美点はあるが、いずれも物語の力に不足を感じた。

余談だが、初めて満場一致での決定となった選考会は、非常に和やかで平穩であった。白熱の論戦は、喘息の身には時として辛い。私としては、できればやはり毎回このように穏やかに受賞作決定といきたいものである。来年も他をねじ伏せる圧倒的な作品の登場を期待したい。

和やかな昼食会 西行寺幽々子

今回の選考会は、びっくりするぐらいすんなりと受賞作が決まってしまっていたわ。何しろ最初の投票で『天照戦記』が出席者全員の票を集めてしまったのだから、その後はもうただの確認作業。パチュリー委員と射命丸委員、阿求委員の三人が侃々諤々の大論戦を交わすのを、お茶でも飲みながら眺めるのが毎年の楽しみだったから、ちょっと拍子抜けというぐらい。私自身も『天照戦記』に票を投じたから、受賞には全く異議はないわ。旅行先の小さな宿で出される、どんな高級料理よりも美味しいご当地料理という感じの、泥臭いけれど非常に力強く、優しさに満ちた作品。作中ではたくさんの血が流れるけれど、それをただのスペクタクルで終わらせずに、喪われるものへの哀しみを感じさせる物語へ昇華したのは、人に寄り添う神の慈愛なのでしょうね。

『天照戦記』が圧倒的な評価を萃めてしまったせいかな、選考会では「残りの四作は明らかに見劣りする」という意見が大勢を占めたけれど、個人的には他の四作もそれぞれ捨てがたい作品だと思ったわ。今回みたいときは、正賞だけじゃなく特別賞でもあれば良かったのね。

『星盗人と鏡の国の魔女』はとっても可愛らしくデコレートされた、けれど食べてみると意外とビターなチョコレート。物語になんだか迷いが感じられたのがもったいなかったわ。『星屑ミルキーウェイ』には無い苦味を出そうとして、少し苦くしすぎてしまったのかしら。でも、童話チックな世界観と登場人物はとても魅力的で、前半はとても楽しく読めたわ。

『うちの上司が横暴なんですけど。』は、誰かがそう評するんじゃないかって事前に言っていたみたいだけど、その通りのスパイシーなお菓子。昼下がりに寝転がって楽しむにはうってつけの作品で、受賞には至らなかったけれど一読者としては充分に楽しめたわ。

『キカイノコトバ』は、私にとってはあまり馴染みのない地域の伝統料理という感じ。材料からして何を使っているのか理解しきれないのは、選考委員としては失格ね。私の勉強不足を作品のせいにしてしまうわけにはいかなから、この作品にはノーコメントということ。

『落ち葉の季節に逢いましょう』は、言ってしまうえばありふれた、目玉焼きのような素材な味わいの作品。それはそれで美味しいけれど、目玉焼きには付け合わせのサラダとか、ソーセージとかもやっぱり欲しいと思ってしまうのが人情ではないかしら。素材の味を引き立てるのと、ただ薄味なのとは違うと思うの。素材は決して、悪くなかったのだけだね。

それにしても本当に、和やかな昼食会という雰囲気を選考会で、平和なのは良かったのだけれど。前回や前々回のような積極的な議論があまり交わされなかったのは、私たち選考委員にとっても勿体なかった気がするの。せっかく年に一度、それぞれの文芸観について真っ向から意見を交わせる場なのね。私は、お茶とお菓子が美味しかったからいいんだけど。

近年稀に見る収穫 上白沢慧音

受賞作家のひとりとして、今回より選考委員の末席に加わることとなった。正直なところ、打診が来たときには一度は断ろうと考えた。他人の作品を選考し、受賞と落選とを決定するということは、他人の作品に優劣をつけるという行為に対して、自分が胸を張れる文学観を持っているか、選考委員自身が試されているということである。自分の本業は歴史教師であり、作業はその傍らで行う副業に過ぎない。その副業において、それほど責任重大な役割が務まるほど、自分は確固とした文学観を持ち合わせているか、何度も己自身に問いかけた。

結局は友人たちに背中を押されたこともあって、こうして選考会に出席することとなったわけだが、初めて参加した選考会は思いがけず和やかな雰囲気を満たされており、少々の驚きとともに、私も臆することなく己の意見を口にすることができた。

そのような和やかな選考会となったのは、ひとえに受賞作となった『天照戦記』の持つ、他を圧倒する力強さによるものであろう。候補作を読み終えた時点で、受賞作として選ばれるとすればこれしかあるまいとの確信を抱いて選考会に臨んだが、はたしてそれは現実であった。幻想郷の文芸全体においても近年稀に見る収穫であるとして、満場一致での受賞となった。

本作を傑作たらしめているのは、何よりもその確かな文章の力である。物語そのものは非常に映像的でありながら、小説とは言葉によって形作るものである、という断固たる意志を感じさせる文章が、作品に奥行きを与え、世界を立体的に浮かび上がらせるのだ。合戦の場面にお

ける誤魔化しのない描写は凄惨でありながら、文体の与える軽やかなリズムが読者を物語へ引きずり込み、そして刹那、突きつけられる一文が鮮烈に心に刻まれる。確かな言葉が確かな作品を形作る。寺子屋で文章の教本として用いたいぐらいである。

本作に不満があるとすれば、戦争に至る歴史的背景の書き込みが浅く、史実の中の虚構というよりは、虚構に史実を添えた感があることであろうか。しかしそれを差し引いても、この幻想郷における歴史小説の分野において永く語り継がれるべき名作であることに疑いはない。

その他の作品には簡単に触れたい。『落ち葉の季節に逢いましょう』は丁寧な描写に好感をおぼえる佳作だが、季節感の描写に優れるだけでは優れた小説には至らない。『星盗人と鏡の国の魔女』は作者の幼さを感じさせる不確かな世界観と描写が、作品としての未成熟に繋がっている。『キカイノコトバ』と『うちの上司が横暴なんですけど。』は読み物としては楽しくページを捲れるにせよ、この内容を世に出すために敢えて小説という媒体を用いる必然性があまり感じられない。どちらもノンフィクションやエッセイで充分であろう。

これまで読者として接してきた選評から見える選考会は、口角泡を飛ばし合う激論の場という印象であったので、今回のような和やかな選考会となったことは、新参の身には有り難いことであった。しかし、選考委員として他の委員と意見の対立をみるのが無かったのは、今回の選考会においてそうなった際にどのような態度を取るべきか、宿題がひとつ残ってしまったことになる。今回の選考会も緊張をもって臨むことになりそうだ。

史上最速の受賞作決定 射命丸文

第一回を除けば、五回目にして初の完全な満場一致での受賞となりました。実質的な選考の所要時間は、最初の投票を萃めて開票するまでの十分かそこらでありましょう。受賞作となった『天照戦記』は、作品としての完成度の高さもさることながら、何より抜群に面白いエンターテイメントでありまして、無事に受賞となったのは大変喜ばしいことです。本来ならこういうエンターテイメントの王道を行く作品を褒めるのは私の仕事ですが、今回は他の委員の皆さんも大いに『天照戦記』について語ってくださいるでしょうから、敢えて私はそれ以外の作品について語ることにしましょう。

受賞作の他に私が推したのは、『星盗人と鏡の国の魔女』です。確かに、第三回で惜しくも受賞を逃した『星屑ミルキーウェイ』と比べて、本作がさらに際立って優れているというわけではありません。しかし、やはり彼女のキャラクター造形、ストーリーテリングの巧みさには舌を巻くほかありません。また、作品全体が幼いと評され落選となった前作に対し、敢えて童話的な——子供向けの世界観を用い、そこに少しの残酷さをまぶした本作の世界観は、私たちの下した評価にに対する彼女なりの返答であり挑戦なのであります。今回も受賞は叶いませんでしたが、願わくは、次はその挑戦心、反骨心を『星屑ミルキーウェイ』のような真つづくな作品によって、私たち選考委員にぶつけてきてほしいと思います。

それ以外の三作品は、他の委員の皆さんも評されているかとは思いますが、いささか小粒な

感は否めませんでした。候補作がどういう意図で選ばれているのかは、私たち選考委員の関知するところではないのですが、他に候補にしてもいい作品があったのではないかという感否めません。

『落ち葉の季節に逢いましょう』は、柔らかな雰囲気と読み口でさらりと読み終えられますが、何も引つかかるものがないので読後に残るものがなく薄味でした。『キカイノコトバ』は空想の新技術がいかに凄いのか、を示すのに夢中になるあまり、物語性が蔑ろにされた感が強く、小説として高く評価するのは難しいところです。

『うちの上司が横暴なんですけど。』には、私はこの選考会で初めて×をつけました。横暴な上司に振り回される部下の姿を描いたコミックノベルですが、軽い読み口に隠された悪意に胸が悪くなりました。だいたい、この上司はここまで悪し様に書かれるほど横暴な人物ではないでしょう。主人公の世界観が狭量であるのが肯定される結末には承伏しがたいものがあります。特定の人物を悲惨な目に遭わせて笑いを取るコメディは、一步間違えば周囲の悪意か、主人公の自己憐憫に苛立つばかりの物語にしかならないという典型的な例でありましょう。

候補作の選定に若干の不満はありましたが、『天照戦記』という優れた娯楽作品を受賞作に迎え入れることができましたし、選考会は満場一致で和やかに進みましたので、私個人としてはまずまず楽しめる選考でありました。

人の視点と、人ならぬ者の視点 稗田阿求

この幻想郷においても、神と人は時として近しき友のような立場にある。しかし、どれほど親しくあろうとも神は神であり、人は人でしかない。神は人に信仰されるものであり、人にその信仰の見返りとして恵みを与えるものだ。故にこそ、神と人は決して対等ではあり得ない。人と妖怪が対等であるように見えて、やはり妖怪が強者であるように。

今回、満場一致で受賞作と決定した『天照戦記』は、派手な合戦場面の描写に目を奪われがちであるが、その本質は神と人の関係——対等であろうとしながら、決して対等ではあられぬ存在ゆえの不理解が生む哀切を描いた作品である。自らが君臨する土地の民を率い、自ら先陣を切って屍の山を築く土着神。民と支え合って生きていた彼女が、民のために戦えば戦うほどに、民は彼女を畏れ、その距離は遠ざかっていく。はじめは勝利をもたらす戦神として、やがては屍を積み上げる死神として、弱き人間たちは彼女を恐れていく。それでも彼女は愛する民のために戦い続けるしかない、その哀切なる心情が深く胸を打つ。

さらに本作の優れているところは、神を畏れてしまう人の弱さもまた、人の目線に立って細やかに書き込まれている点だ。この描写を疎かにすれば、強き神が弱き人を見下す傲慢さに満ちた物語で終わるところを、人の視線と神の視線を両立することにより、その相克をより明確に描き出したところこそ、本作を優れた人間の物語たらしめているのである。

それに対して、一昨年候補になった『星屑ミルキーウェイ』にあった人間の視点が失われて

しまった感が強かったのが『星盗人と鏡の国の魔女』である。童話的な世界観を用いた苦味のある物語は浮世離れして、人間の目線からはどうしても遠ざかって見える。作者が人間であることを鑑みれば、敢えて自分には無い視点を描きだすことに挑んだ意欲作と取るべきなのかもしれないが、この乾いた作品世界に、人間の目線でなければ描き得ない少しの潤いがあればと思つてやまない。

神が人を描いた作品では『落ち葉の季節に逢いましょう』も候補に入っていたが、人間の物語という体裁を取りながら、やはり物語が浮世離れしすぎている感が強く、人間側からは物語に実感を持つことはできなかった。『うちの上司が横暴なんですけど。』はそういう意味では人間くささに溢れた苦労話であり、人によつては共感を持つて読めるだろう。しかし、実感に満ちた筆致が、かえつて小説というよりもエッセイじみた感を抱かせてしまうのは否めない。『キカイノコトバ』は機械技術に対して語り手が注ぐ偏愛が、こちらへ実感をもつて迫つてこない。男性が女性を描くこと、大人が子供を描くこと以上に、人が神を描き、神が人を描くことは難しい。その難題を軽々と越え、作品として非常な高みに至つた『天照戦記』は紛れもない名作である。幻想郷の文芸が生んだ記念碑的作品として、長く語り継がれるであろう。

(※八雲紫氏は書面回答。『キカイノコトバ』を推した)

〔「幻想演義」如月号 特集「第五回稗田文芸賞受賞作決定」より抜粋〕

◆受賞作発表と選評を読んで、メッタ斬りコンビの感想

萃香 いや、順当な結果でほっとしたよ。

霊夢 賭けだったら一点買いででも大した配当にならない結果だから、つまんないって言えばつまらない結果だけど、まあ良い作品が獲る分にはいいんじゃないの。

萃香 誰かひとりぐらい厳しいこと言うかと思ったけど、選評もみんな褒めてるね。ここまでくるとさすがにちよつと褒められすぎじゃないかって気はしてくるけども（苦笑）。

霊夢 紫がどう評価したのかが気になるわねえ。というか紫が『キカイノコトバ』を推したっていうのが意外なんだけど。

萃香 そう？ 紫ってあれで結構理系思考なところあるから、『キカイノコトバ』みたいなハードSFが好きでもそんなに意外じゃないかな。『天照戦記』を推さなかった理由は、解らなくはないけど……まあ、私は黙っておこうかな（苦笑）。

霊夢 『うちの上司が横暴なんですけど。』は思ったより好評だったみたいねえ。幽々子はともかく、パチュリーが割と気に入ってたみたいなのは予想できなかったわ。

萃香 そして文は案の定ボロクソな評価（笑）。気持ちは解らなくもないけど、大人げないんじゃない？ って本人に言ったたら、「私は私の基準で作品を評価しているだけです」ってしれつと言ってたけど（笑）。

霊夢 これ見ると、永月夜姫とか候補にしなかったのは正解なのかしらねえ。

萃香 いや、慧音はもうちょいそのへん弁えてるんじゃないかとは思うけども（苦笑）。

霊夢 魔理沙は今回は結構敵しいこと言われてるわね。今回から加わった慧音も魔理沙の作風が好きタイプじゃなさそうだし、阿求が味方についてくれないと敵しそうねえ。

萃香 文の懸命のフォローがなんとも言えないねえ（苦笑）。あれで割と通じ合うところがあるのかもね、あのふたり。どっちも嘘つきだしさ（笑）。

霊夢 実際、永月夜姫とか富士原モコとか、アリス……マーガレット・アイリスとか候補になってたらどうなってたかしらね？

萃香 もう少し紛糾はしたんじゃない？ パチュリーはアイリスに行った可能性はあるし、慧音がモコを推すかはともかく（笑）、『時の密室』は阿求あたりも好きそうだし。でも、最終的には『天照戦記』で落ち着いたんじゃないかな。誰も反対してないってのは大きいよ。

霊夢 自分の意見を通すためなら、割と喧嘩上等なところがある連中だものねえ。

萃香 阿求なんか人間のくせによくこの選考会に毎年参加してるもんだわ。命がいくつあっても足りないでしょ（苦笑）。

霊夢 阿求ってあれで結構図太いわよ？

稗田文芸賞受賞作がプライバシー侵害？

昨年霜月に守矢新社から刊行され、同年の第五回稗田文芸賞を受賞した、八坂神奈子氏の小説『天照戦記 蛙は口ゆえ蛇に吞まるる』について、内容がプライバシーの侵害と名誉毀損にあたるとして、守矢新社と八坂神奈子氏を相手に同作の回収と内容の改訂、謝罪及び慰謝料請求を求めた訴訟が是非曲直庁に届け出られていたことが十九日、解った。

原告は妖怪の山に暮らす神の女性。原告側の主張によると、『天照戦記』に登場する土着神のモデルが原告の神の女性であることは明らかで、内容の一部が原告のプライバシーを侵害しており、また原告がモデルであることを言明していないことにより、著者自身が作中に登場する「土着神」であるとの誤解を読者に与え、信仰を糧としている原告は精神的苦痛を受けたと述べている。

被告側の守矢新社は「訴状が届いておらず、コメントできる立場にない」と語るに留めたが、関係者によると原告と被告は親しい間柄であり、身内の話し合いで済ませる予定だったことがこじれて今回の訴訟に至ったとのこと。

八坂神奈子氏は、妖怪の山の頂上付近にある神社「守矢神社」の祭神であり、『天照戦記』、は氏の小説デビュー作。現在は稗田出版の月刊文芸誌『幻想演義』にて、第二長編となる「神の器」を連載している。

《選考委員》

パチユリー・ノーレッジ (作家)

西行寺幽々子 (作家)

上白沢慧音 (作家・歴史教師)

八雲紫 (妖怪の賢者)

射命丸文 (文々。新聞記者)

稗田阿求 (稗田出版代表)

第2回稗田文芸賞

メツタ斬り! & 選評

《候補作》

門前美鈴 『華国英雄伝』

マーガレット・アイリス 『ヒスクドールの柩』

河城にとり 『川の流れの果てる光』

大橋もみじ 『白狼の咆吼』

因幡てる 『幸運エスケープ』

風見幽香 『優しい花を咲かせましょう』

水橋。バルスイ 『さようなら、恋』



第六回稗田文芸賞候補作発表

幻想郷文芸振興会は十四日、第六回稗田文芸賞の候補作を発表した。今回は史上最多の七作品がノミネート。三人が初ノミネートとなった。

選考会は二十六日、稗田邸にて開かれる。

候補作品は以下の通り。

- | | |
|-----------------------------|-----|
| 門前美鈴『華国英雄伝』(スカーレット・パブリッシング) | 四回目 |
| マーガレット・アイリス『ビスクドールの枢』(博麗神社) | 二回目 |
| 河城にとり『川の流れの果てる先』(鴉天狗出版部) | 二回目 |
| 大橋もみじ『白狼の咆吼』(鴉天狗出版部) | 二回目 |
| 因幡てゐ『幸運エスケープ』(竹林書房) | 初 |
| 風見幽香『優しい花を咲かせましょう』(稗田出版) | 初 |
| 水橋パルスィ『さようなら、恋』(旧地獄堂出版) | 初 |

(文々。新聞 師走十五日号 一面より)

博麗靈夢&伊吹萃香の稗田文芸賞メツタ斬り！ 第六回編

十四日、第六回稗田文芸賞の候補作が発表された。これを受けて毎度おなじみ博麗靈夢&伊吹萃香のメツタ斬りコンビが、今年も授賞レースの模様を徹底予想！ 本命不在の混戦レースを制する作品は果たして!?

◆受賞レース予想&作品評価(◎:本命 ○:対抗 ▲:大穴 評価はA~Eの五段階)

霊夢 萃香

- C - D 水橋パルスィ『さようなら、恋』(旧地獄堂出版) 初
- ◎ C - C 風見幽香『優しい花を咲かせましょう』(稗田出版) 初
- B - B 門前美鈴『華国英雄伝』(スカーレット・パブリッシング) 四回目
- ▲ B - B 河城にとり『川の流れの果てる先』(鴉天狗出版部) 二回目
- C ◎ B 大橋もみじ『白狼の咆吼』(鴉天狗出版部) 二回目
- C ▲ C マーガレット・アイリス『ビスクドールの柩』(博麗神社) 二回目
- C ○ A 因幡てゐ『幸運エスケープ』(竹林書房) 初

◆水橋パルスィ『さようなら、恋』（旧地獄堂出版）初

予想：霊夢 - 萃香 - 評価：霊夢C 萃香D

霊夢 今回は……本命不在ねえ。

萃香 だねえ。（予想を見比べて）うわ、見事にバラバラ（笑）。

霊夢 どれが獲ってもそんなにおかしくないんだけど。

萃香 どれも反対しそうな顔がわりとパツと浮かぶからねえ（苦笑）。今までの傾向からして、誰かが強硬に反対するとなかなか獲れないし。

霊夢 そう極端な作風が揃ったわけでもないんだけどねえ。どれからいく？

萃香 ふたりとも無印なのは……パルスィか。『さようなら、恋』は話をしたこともない、遠くから見ただけの相手に恋をした女が主人公の恋愛小説、なんだけどさあ、これさあ（苦笑）。

霊夢 半分ホラーよねえ、これ。

萃香 いや全く。ヒロインが完全にストーリーカードもん（笑）。こんなにべったり監視してたらそりゃ振られるよ。しかも『さようなら、恋』ってタイトルだから、てっきり失恋を吹っ切るまでの話だと思ったら……。

霊夢 無理心中オチでさようなら、ってねえ。相手もいい迷惑よね、これじゃ。

萃香 ヒロインがひたすら《なんで振り向いてくれないの、なんで気付いてくれないの》って

嫉妬にかられ続ける描写は鬼気迫ってるから、そういう小説として読めばまあ楽しめなくもない……のかなあ。私にちよっと解らん（苦笑）。

霊夢 え、これギャグでしょ。いやあんたが悪いんでしょ、ってツッコミ待ちじゃないの？

萃香 えー（苦笑）。これギャグで書いてるとしたら相当な才能だよ。これは素だと思うなあ。

霊夢 主観と客観がズレてるのって、外野から見れば面白いじゃない。

萃香 そうかもしれないけどさ（苦笑）。これは推しそうな顔も浮かばないし、まあ受賞は無いか。というかなんで候補に入ったんだろ？ 予選委員が霊夢みたいな読み方したのかな？

霊夢 結構売れてるらしいわよ、これ。

萃香 え、マジ？ こんな後味悪い話が？ わっかんないなー。

霊夢 そりゃ、あんたが鬼だからじゃないの？

◆風見幽香『優しい花を咲かせましょう』（稗田出版）初

予想…：霊夢◎ 萃香－ 評価…：霊夢C 萃香C

霊夢 受賞作が出るならこれじゃない？ 稗田出版だし。

萃香 そうは言うけど、今まで稗田出版で受賞したのって『魔法図書館は動かない』と『満月

を喰らう獣』だけだよ。『魔法図書館』は今はスカレット・パブリッシングに版權移ってるし。そりゃま、商売だから稗田出版の本に受賞させたいってのはあるだろうけど、そう有利ってわけでもないんじゃない？

霊夢 今回みたいな本命不在なら、出版社で決まりそうな気もするけどねえ。

萃香 内容がどうかなあ。稗田出版がそう思っても選考委員が乗ってくれるか。親に捨てられた子供の荒んだ心を、園芸で癒してあげるっていうほのぼののヒーリング小説なんだけど。

霊夢 まあ確かに、小説ってよりは園芸指南書っぽいわよね。

萃香 明らかにストーリーよりそっちに力入ってるじゃん（笑）。読むと園芸に詳しくなって、花でも育ててみるか、って気にはなるんだけど。話があまりに普通すぎると思うなあ。

霊夢 前回は壮大な戦記ものだったから、反動でなんてことない作品が来る気もするけど。文章は上手いから慧音とかも好きそうだし。

萃香 文とかパチュリーが反対するんじゃない？ 文はストーリー性の薄い小説は嫌いそうだし、パチュリーは「こんなどこにでもある作品に賞をあげることはない」とか言いそう。

霊夢 パチュリーは推すんじゃない？ 明日使える園芸知識。知識萃めるの好きでしょ。

萃香 図書館の中じゃ園芸知識の使い道は無いじゃん（笑）。

◆門前美鈴『華国英雄伝』（スカーレット・パブリッシング）四回目

予想：霊夢○ 萃香－ 評価：霊夢B 萃香B

萃香 門前美鈴は第一回から落とされ続けてとうとう四回目の候補入り。

霊夢 なんだっけ、あの子供向けのシリーズ。

萃香 『風雲少女・リンメイが行く!』ね。こないだ四巻が出たけど売れてるみたいだよ。

霊夢 あっちで人気も出たし、そろそろ獲るんじゃないの？

萃香 いや、これじゃ厳しいでしょ。絶対前回の受賞作の『天照戦記』と比べられるよ。

霊夢 でも、この方向性ってともどこちが書き続けてたものでしょ？

萃香 まあねえ。架空の国《華国》を舞台にした、英雄たちの群雄割拠する華々しい架空戦記小説。今じゃ世間的には『風雲少女』でジュヴナイル冒険小説作家のイメージが強いだろうけど、元々はこういう架空戦記小説とか、第二回で候補になった『龍拳伝』みたいな格闘小説が本業なんだよね。こっちはあんまり売れてないみたいなんだけど（笑）。

霊夢 個人的にはあんまり興味無いジャンルだけど、まあ面白かったしいんじゃない？

萃香 いや、『天照戦記』の方が出来は良かったと思うから……。中央vs土着の民のシンプルな構図だったあっちに対して、こっちは魅力的な英雄が何人も出てくるけど、かえって軸がぶれてるとか言われそう。一冊にまとめるには世界が大きすぎたかな。歴史物っぽく読める部分

は慧音が厳しそうだし。

霊夢 文が推すでしょ。なんだっけ、前に候補になったときもそれなりに評価してたし。

萃香 そりゃ前回も『天照戦記』推してるし、第四回でも『紅の血脉』を割と買ってたけどさ。うーん、やっぱり方向性が近すぎて難しいと思うなあ。

◆河城にとり『川の流れる果てる先』（鴉天狗出版部）二回目

予想：霊夢▲ 萃香－ 評価：霊夢B 萃香B

霊夢 獲れるかどうかはともかく、個人的にはこれが一番好きなんだけど。

萃香 え、そうなの？ それはけっこう意外。これSFだよ？

霊夢 SFなの？

萃香 つうかモデルは明らかに幻想郷だけどさ。川を辿って世界の果てを見つけた少女が、隔離世界の境界の向こう側を指そうとする話。箱庭世界の構築理論とか完全にSFだね。霊夢がこういうロジカルなの好きとは思えなかったけど。

霊夢 小難しい話のところは読み飛ばしたのよ。外の世界のことなんてあんまり意識してなかったけど、よく考えたらこの幻想郷の川とか天気とかは外の世界と繋がってるのよね。今さ

らそんなことに気付いたわ。

萃香 博麗の巫女がそんなんでいいのかなあ（苦笑）。

霊夢 あんまり獲れる気はしないけど、気に入ったから大穴つけてみたわ。

萃香 まあ受賞は難しいだろうねえ。こういう理系思考に理解のある選考委員が紫ぐらいしか思い当たらないし、紫はどうせ欠席だし。紫も冬眠してるんだから選考委員は藍にやらせればいいのにさ。

霊夢 パチュリーは？

萃香 パチュリーもまあついていけなくはないかな。でも他の四人は推さないでしょ。前回もメカニック小説でほとんど総スルーされて落ちたし、今回も選考会じゃ光学迷彩かかるんじゃないかな。

◆大橋もみじ『白狼の咆吼』（鴉天狗出版部）二回目

予想：霊夢 - 萃香◎ 評価：霊夢C 萃香B

萃香 私はこっちが本命。これは文がどう出るかに尽きるね。

霊夢 ガラッと作風変えてきたわよね。

萃香 前はマイペース上司に振り回される部下のコミカルな苦勞話『うちの上司が横暴なんですけど。』で候補になって、文にボロクソに言われて落ちた(苦笑)。幽々子とパチュリーは気に入ってみたいだったから惜しかったんだけどねえ。

靈夢 今回は『白狼剣』の達人である白髪の劍豪が、人里のか弱き民を苦しめる悪党どもを片っ端から叩っ斬る話。

萃香 劍豪にくつついて回る、将棋指しの女の子のキャラがいいよね。明るくてお調子者なのに人見知り。劍豪の背中に隠れて唸ってるのが可愛い可愛い。

靈夢 シンプルで読みやすいし、面白いとは思うけど、決定打は感じないのよね。

萃香 票を読むとこれじゃない？ 劍豪ネタは幽々子は好きそうだし、人を守る話だから慧音も推しそう。阿求も特に反対しないと思うし、パチュリーが前回から続けて味方につけば、文が反対しても押し切れるんじゃないかな。

靈夢 むしろ文が推すんじゃないの？ こういう単純明快な話好きでしょ。

萃香 いやほら、そこはかわいさ余って憎さ百倍というか(笑)。

靈夢 逆に幽々子が厳しくなると思うけど。身近に未熟者な劍士がいるわけだし。

萃香 そこが気になるんだよねえ。作風が全然違うから、前回推してくれた幽々子とパチュリーが味方についてくれるか。ついてくれないと後は文次第かあ。うーん。

靈夢 ところでこれ、二巻も出てなかったっけ？

萃香 先々月に出たね。候補になったのは一卷の方だけど。人里でかなり人気みたいだね。

霊夢 慧音が「仕事取るな」とか言うんじゃない？

萃香 さすがにそれは無いと思うけどなあ（苦笑）。

霊夢 ま、それは冗談としても、完結してないことはネットになるかもしれないわね。

萃香 あー、それはどう転ぶのかなあ。うーん。

◆マーガレット・アイリス『ビスクドールの柩』（博麗神社）二回目

予想：霊夢 - 萃香 ▲ 評価：霊夢 C 萃香 C

霊夢 アリス……じゃないアイリスは第四回以来の候補入りね。前に候補になったの、なんだったけ？ あの仮面劇団の話。

萃香 『マスカレード・スコープ』ね。実は全員人形だった、ってどんでん返しをパチュリーが評価したけど阿求と幽々子に反対されて落ちた奴。アイリスの本は自分とこで出してるんだから覚えておいてあげようよ（苦笑）。

霊夢 最近、読んだはしから忘れるのよねえ。

萃香 今回は怪しげな屋敷の地下室、柩に収められていた死体がいつの間にか人形とすり替

わっていた、っていうまたミステリ仕立ての話。

霊夢 ミステリとしては無理があると思うけど。動機とか。

萃香 そんな理由で殺さないだろうって？ そこらへんは魔法使いの論理。人間の論理じゃ計れないってことでいいんじゃないかなあ。私もよくわかんないけどさ（苦笑）。

霊夢 またパチュリーがひとり推して自爆するのかしら。

萃香 そうなりそうだねえ。あと創造主と創造物、ヒトとヒトガタ、心と魂の在処ってテーマに絞って書き続けてるけど、その割には登場人物が類型的だよな。『マスカレード』はあのオチだったからかと思っただけど、去年候補漏れした『マリオネット』は悲しまない』も割とそんな感じだったからなあ。パチュリーの評価はあれからどうなったんだろう。

霊夢 パチュリーと一緒に頭でっかちなのよ。

萃香 相変わらず辛辣だなあ（苦笑）。捻ったオチもついてるけど、ちょっと取って付けた感もあるしねえ。前回に続いてパチュリーが推せばあるいは、と思って大穴はつけてみたけど、まあ現実的には難しいかなあ。

霊夢 別にいいけどね。それなりに売れてるし。

萃香 受賞すればもっと売れるよ？

霊夢 私がここで推したって受賞させられるわけじゃないわよ。

萃香 そりゃそうだけどさ（苦笑）。

◆因幡てゐ『幸運エスケープ』（竹林書房）初

予想：霊夢一 萃香○ 評価：霊夢C 萃香A

萃香 最後は『幸運エスケープ』。これの候補入りはめちゃうちゃ意外だったなあ。

霊夢 なんで？ 対抗つけてるじゃない。

萃香 だって永月夜姫の『あの月の向こうがわ』が候補漏れして、こっちが入ってくるなんて普通思わないって（笑）。いや、よくできたコンゲーム小説で私は好きだけども。

霊夢 『あの月』が落ちたのは慧音に配慮したんじゃないの？ 去年と同じで。

萃香 なのかなあ（苦笑）。ま、ともかく。新米詐欺師が師匠の遺産をめぐって、百戦錬磨の詐欺師と虚々実々、丁々発止の騙し合いを繰り広げる話。いや、笑った笑った。

霊夢 あんたってときどき、ホントに鬼なのか疑いたくなるんだけど。嘘つかない鬼が嘘つきの話読んで大笑いしてるってどうなのよ？

萃香 それ言ったら小説なんて全部嘘じゃん（苦笑）。他人を幸せにする嘘は楽しまなきゃ損つてもんだよ。これはいい嘘つきさ。

霊夢 いい嘘つきねえ。私としちゃ、途中から嘘が壮大になりすぎて、いくらなんでもこんなバカバカしい仕掛けまでやらないでしょ、って気分なんだけど。

萃香 いやいや、そこが最高に可笑しいんじゃない。師匠の遺産の噂そのものが嘘だった、って

いう嘘のためだけにあらかじめ洞窟掘ってニセモノの遺産モドキを隠しておいて、本当の遺産は既に手に入れてる——ってのも実は嘘で、相手が隠し持ってるはずの遺産の存在を白状させようとするんだけど、相手もそれに騙されてるふりをしてるだけで、嘘の遺産の在処をうっかり漏らしたふりをして、その嘘の為に建てておいた屋敷へ移動（笑）。

霊夢 そのへんになるともう何が何だかなんだけど。結局、どっちが遺産手に入れたのよ？

萃香 もうそんなのどうでもいいんだって（笑）。

霊夢 でもこれ、慧音が怒るでしょ。変なところで真面目だから、「詐欺師の話なんてけしからん」とか言ってる。文は好きだろうけど、幽々子とパチュリーはどうかしら。

萃香 私としちゃこれが取ったら万々歳なんだけどね。ま、期待はしないさ（笑）。

◆ まとめ ◆

萃香 結局、誰がどれを推す形になるのかな？

霊夢 パチュリーは『ビスクドール』と『川の流れ』推しで『優しい花』に厳しいかしらね。

慧音は『優しい花』と『白狼』推しで『幸運』と『華国』にはたぶん反対。

萃香 文は『幸運』と『華国』推しで『優しい花』と『白狼』に反対かなあ。

霊夢 文と慧音が正反対ねえ。阿求はどうかしら。慧音と近い立場？

萃香 阿求は案外『幸運』とか好きかもしれないけど、『ビスクドール』には反対するんじゃないかな。『マスカレード』に反対して『ビスクドール』推すとも思えないし。

霊夢 幽々子がどう出るか読めないけど、こうしてまとめるとやっぱりどれも賛成票と反対票で割れそうねえ。

萃香 侃々諤々の激論になって、みんな疲れ果てて、誰も話題にしなかった『さようなら、恋』でいいよ、って話にさえならなきやいいや(笑)。

(文々。新聞 師走十九日号 三面文化欄より)

第六回稗田文芸賞は初の「受賞作無し」

第六回稗田文芸賞は二十四日、人間の里・稗田邸にて選考会が行われ、六回目にして初の「受賞作無し」という結果となった。

選考委員の稗田阿求氏はこの結果について、『川の流れの果てる先』『華国英雄伝』の二作を中心として選考委員の間で意見が極端に割れ、長い時間を掛けての討議が行われましたが、いずれの作品についても選考委員全員の合意が得られなかったため、やむなく受賞作無しとなりました」と説明した。

なお、賞金五十貫文は次回には持ち越されない。

《選評》

箱庭の文芸 パチュリー・ノーレッジ

無数の書物を収蔵する図書館で、日夜無数の物語に接していると、どのような作品であれ常に既視感にはつきまとわれることになる。物語の手法は既に出尽くしていると言われて久しいが、実際にも新鮮な物語というものにはどれほど出会っていないだろうか。

無論、類型的な物語が悪とは言わない。類型には類型の手法があり、巧拙がある。類型であること自体は罪ではない。しかし、そのような類型の手法の巧みであるのを評価するのが、私たち稗田文芸賞の選考委員の仕事であろうか。私にはそうは思われない。稗田文芸賞の受賞作という冠を与えるべきは、むしろそういう類型と最も遠いところにある作品であるべきではないか。なぜなら、類型の巧みであるのは、即ち誰にでも解るものであるからだ。誰にでも解るものを、専門家がわざわざ選ぶ必要はない。私たちがでなければ選べぬものを選出することが、選考委員としての役目であろうと私は思う。しかし、そのような私の文学観は、この選考会においても異質であるのかもしれない。今回は特にそれを強く感じた。

私が推したのは『川の流れの果てる先』である。SFという括りに収まる作品ではあるが、これはそれ以上に、幻想郷小説と呼ぶべきものだ。この幻想郷という小さな世界、普段私たちが意識することのないその《果て》、さらにその先へと空想を広げ、それによって箱庭世界そ

のものの歪さと愛おしさを紡ぎ出した秀作である。幻想郷に生まれ、幻想郷に育った者は、外の世界の存在を認識してはいても、この幻想郷という箱庭そのものに対して無自覚に過ぎる。そういった観点からも、受賞作はこれをおいて他に無い、という心構えで選考会に臨んだのであるが、他の選考委員の反応の鈍いのは本当に意外であった。特に、書面解答であった八雲紫委員すらこの作品にほとんど触れていないのは不可解としか言いようがない。

他の委員が推す作品は、それぞれに美点を持った作品であったが、それらはやはり類型に収まるものである。『ビスクドールの枢』には惹かれるものがあつたが、以前候補になった『マスカレード・スコープ』に比べると、その空想が枠組みの中に収められてしまった感は否めない。やはり『川の流れの果てる先』の他に、私が推すべき作品は無かつた。

他の委員からは「作者の世界の狭さを物語の狭さに仮託しているだけである」との批判もあつたが、その狭さは幻想郷そのものの内包する狭さであり、それを批判することは己の世界の狭さを露呈しているだけではあるまいか。無論のこと、そう言う私自身の世界が狭いだけであるとの批判も免れないのだろうが……。

結局、議論紛糾の未受賞作無しという結論に至つたが、『川の流れの果てる先』に理解が示されない以上はやむを得ない結論であつたと私は思う。無念ではあるが、それもまた幻想郷という箱庭のあるべき姿なのかもしれない。

やさしさの味 西行寺幽々子

どんなものであっても、物語には必要不可欠なものがあるの。文章力、構成力、人物描写の確かさ、そういった技術的な巧拙ではなく、それは作品に滲む《やさしさ》。やさしさの無い作品は、作品そのものが荒涼としてしまうのね。

もちろん、いい話であればいいという意味ではないわ。嫌な話、後味の悪い話、怖い話。それぞれに面白さはあるけれど、それらはみんな《やさしさ》の裏返し。失恋が辛いのは、甘い恋のやさしさがあるからだし、裏切られるのが悲しいのは、信頼というやさしさがあるから。

逆に、やさしさを描こうとするなら、やっぱりその裏側の厳しさ、いやらしさをきちんと踏まえていなければいけない。誰だって裏表があって、本音と建前があって、やさしさの後ろに残酷さを隠している。当たり前のことだけれど、物語ることにかまけてそれをおろそかにしてしまうと、作品の味が平べったくなってしまいわ。ソースでべとべとのカツみたいだね。もちろん、そういうのを食べたくなるときもあるけれど。

今回の候補作は、そういう意味では平べったい味わいの作品が多くて、私はちょっと残念。出てくるひとたちの行動や会話が、お話に縛られすぎている気がするの。頭の中に出来上がっていた面白いお話は、思うままに動かしたくなる気持ちはよくわかるけれど、お話は作者のものであると同時に、そこに登場するキャラクターたちのものでもある。彼らが何を考え、何を求めているのかに作者が介入してしまつては、作品の味わいはやさしさに欠けてしまいわ。西瓜は

塩をふるといっそう甘くなる、それだけの話なのにね。

これだけで終わるのもさすがに失礼だから、気になった作品をひとつ。『白狼の咆吼』は平べったい味ではあるけれど、ストイックな剣豪の生き方には少し懐かしい気持ちになったわ。でもやっぱり、彼の《やさしさ》と《厳しさ》との背反が書き足りていないと思うの。これはきつと、私自身への戒めでもあるんだけれどね。

物語るものと物語られるもの 上白沢慧音

選考委員の末席に加わって二度目の選考会となったが、満場一致で決まった前回とは異なり、紛糾に紛糾、議論百出して蒐集のつかぬ四時間となった。小説の価値とは一面的には決められるからこそその選考会であろうが、これほどの紛糾となったのは意想外なことである。

『天照戦記』という近年稀に見る収穫のあった前回に比するのは酷というものだが、今回の候補作は一読、いささかの物足りなさを覚えた。一定の水準には達しているものの、これを推すべきである、という己の内側の声は聞こえぬまま、もう一度全ての作品を読み返した。その結果、私は『華国英雄伝』に○をつけて選考会に臨んだ。

『華国英雄伝』は、架空国家の戦乱の歴史を、その中を駆け抜けた英雄たちの群像劇に仮託して紡ぎ上げる架空歴史絵巻である。軽妙にして堅実な筆致と、活き活きと描かれた英雄たち

の魅力は確かであるが、反面英雄たちというミクロな視点に作者が捧げた情熱に比して、それを取り囲む歴史というマクロな視点が表層的に過ぎる感があり、一読した時点では『天照戦記』に及ぶものではないと判断した。それが、再読により評価を改めるに至ったのは、ひとえに物語全体の語り部である《立待月》という人物の存在によってである。

性別すら定かでないこの語り部は、その名が物語の端々に噂のように立ちのぼるばかりで、普通に物語を追っていけば存在そのものにすら気付かない恐れすらある。しかし、その存在に気付いたとき、この作品は単なる架空戦記小説ではない、豊かなふくらみを持った物語としてにわかには存在感を増すのである。英雄たちの姿に仮託されているのは、華国という国家の歴史であると同時に、立待月という語り部の歴史でもあるのだ。ミクロの視点をマクロへと広げ、それを再びミクロへ収束させ、あたかも歴史絵巻のごとくに影のごときひとりの人物を語る。類い希なる巧みな技法である。

しかし選考会において、他の選考委員にこの点について同意を得られなかったのは想定の外であった。特に「それはいささか深読みのし過ぎ」との意見には失望を禁じ得ない。歴史をまとめ、歴史を創る者として、今回の受賞作は本作において他にないという決意をもって選考に臨んだだけに、他の作品の受賞は認められなかった。受賞作無しという結論に落ち着いたのも、『華国英雄伝』が受賞できぬとあらばやむを得ない決断であったと、その時点では考えた。

他の作品にも簡単に触れる。『白狼の咆吼』はキャラクター小説としては上出来の部類であ

るが、『華国英雄伝』の英雄たちの前ではいかにも不利であった。『優しい花を咲かせましょう』は誠実な文章に好感を抱いたが、物語が小粒に過ぎる感は否めない。『ビスクドールの枢』と『川の流れの果てる先』は、作者の世界の狭さがそのまま物語の狭さに仮託されており、狭量であるとの印象を免れ得なかった。『幸運エスケープ』は、小説の世界において現実的なモラルによる批判は見当違いであるにしても、私はここに登場する詐欺師たちに好感を抱くことはできない。『さようなら、恋』は作者の独りよがりな妄想の吐露であり、共感すべき箇所は見当たらなかったということに尽きる。

『華国』の作者の真意を読み取れぬ他の委員の読みは浅薄である、などと傲慢な批判をする意図はない。それは他の委員から——特に私が強く批判したある作品を、断固たる決意を持って推していた某委員などから——そっくり私に跳ね返ってくるだろう。かくも小説の価値というものは千差万別である。故にこそ、受賞作を定め、その価値の判断は読者に委ねるべきだったのであるまいか——という思いに、今となつては囚われているところである。

頑固者たちの狂想曲

射命丸文

——己の世界の狭さを作品に仮託して、逃避願望を充足しているだけではないか。

慧音委員は静かにそう言つて『川の流れの果てる先』に×をつけた。静かであるだけに、か

えってその意志の強固さを感じさせる声音であった。

——その狭さとは、あなた自身の世界の狭さなのではありませんか。

パチュリー委員が呟くようにそう言った刹那、選考会場はまさに一触即発という空気に包まれた。お茶菓子を囁る幽々子委員の周囲だけが、切り取られたように平穩を保っている。

——幻想郷は狭すぎる。そこで生まれる文芸もまた、型にはまりすぎている。稗田文芸賞までもが、既成の枠組みの中での内輪受けに陥って良いものですか。

——けれど、枠組みのないところに秩序は生まれません。

取りなすような口調は、阿求委員のものである。

——私たちの世界が狭いとしても、その狭い世界こそが私たちの生きる場所です。外の世界の文芸と、幻想郷の文芸を同じ土俵で比べても仕方がないでしょう。

——そもそも、外の世界が幻想郷よりも広い、ということ自体が幻想かもしれないわね。幽々子委員がのんびりとそう口にすると、緊迫していた空気が僅かに緩む。

——誰でも、自分が認識できる世界の範囲なんて思っているよりずっと狭いものよ。それをなんとなく、もつと広いと思ひこんでいるだけ。どれだけ見聞を広めたところで、ふたつの目でしか物事を見ることはできないのだからね。あ、三つ目の妖怪さんは別だけど。

慧音委員とパチュリー委員は、ため息を押し殺すように冷めかけたお茶を啜った。

……とまあ、選考会の一部をそれらしく描写してみたわけですが、今回は本当に疲れる選考でした。何しろパチュリー委員と慧音委員がそれぞれ別の作品を受賞作に定めて、それ以外は頑として譲らぬという態度に出たわけですし、残りの三人で取りなして見たもののけんもほろろ。結局受賞作無しという結論に至ってしまいました。残念無念。というか、今回は中立だった幽天子委員以外は全員別の作品を推したわけで、それだけでも紛糾するのは当たり前でした。満場一致だった前回は懐かしくもなるというものです。

私が推したのは『幸運エスケープ』。騙し騙されの痛快無比なコンゲーム小説であり、読み始めたら巻を置く能わずという秀逸な娯楽作品です。ホラが大きくなりすぎて現実的でない、いくらなんでも荒唐無稽すぎる、という批判はもっともですが、今までに読んだあらゆる候補作でもこれほど笑えた小説は希有です。どう考えても最終的に手に入る遺産の額以上の金を使っているとは思えない大がかりな騙しの数々、『騙す』ことに本末転倒なほどの情熱を注ぐこの馬鹿馬鹿しさこそ幻想郷らしいと思うのですが、どうにも皆真面目すぎる気がしますね。笑える作品というのはいもつと評価されるべきだと思うのですが。

パチュリー委員の強く推した『川の流れの果てる先』は、歪で愛おしい幻想郷の姿を活写した作品であるというパチュリー委員の意見には賛同しますが、それならわざわざこんな小難しいSFにしなくてもいいと思う次第です（紫委員がこの作品をスルーしたのは意識的なものを感じるのですが気のせいでしょうか？）。慧音委員の推す『華国英雄伝』は、やっぱり『天

『照戦記』と比べてしまうと見劣りするものが正直なところ。慧音委員の提唱した読みは深読み過ぎると思うのですがねえ。そうだとしても解りにくすぎで成功してるとは言い難いような。

『ビスクドールの柩』は仕掛けに気を取られて、本来のテーマであるべき創造主と人形の関係の描写が疎かになった気がします。『さようなら、恋』は大変後味の悪い恋愛小説として読めばまあ面白いのですが、ちょっとこのヒロインには共感し辛いですね。『白狼の咆吼』については、まあ、特に書くことはありませんね。

端正な佇まい 稗田阿求

他の委員も選評で述べているかと思われるが、今回の選考は過去に類を見ないほどに紛糾した。受賞作を出す、という選考委員の使命を果たせなかったことに忸怩たる思いはある。しかし選考会が弾幕ごっこに陥るよりは良い選択であろう、と割り切ることにする。私は普通の人間なのだ、妖怪の弾幕ごっこに巻き込まれてはたまらない。

さて、六者六様の態度となった今回の選考だが、私が推した『優しい花を咲かせましょう』に対する賛同が少なかつたのは意外であった。確かに物語自体は大したことではない。ありふれた話ではあるし、園芸蘊蓄の多さが興を殺ぐ感もあるが、それを差し引いてもこの文章の端正な佇まい、必要最小限の描写で馥郁たる花の香りを紡ぎ出した言葉の選択の巧みさは、それ

だけをもつてしても受賞に値すると私は信じている。普段であれば同意を得られたであろう慧音委員が『華国英雄伝』に心を決めてしまっていたのが不幸であった。小説の価値は物語性だけに縛られるものではあるまい。確かな文章というのはただ読んでいるだけでも十二分な愉悅を伝えてくるものである。

他の、特に『川の流れの果てる先』と『華国英雄伝』に対して百出した議論については他の委員の総括に任せるとして、その他の作品にも触れておきたい。『幸運エスケープ』と『白狼の咆吼』はどちらも典型的な娯楽小説であり、ひとときの楽しみにページをめくるにはうってつけであるが、そこから迫ってくるものに欠ける。やはりそこは描写の平板さや不確かさによるものであろう。『ビスクドールの枢』は心と魂を主題にしていながら、心というものへの踏み込みがいかに浅い。『さようなら、恋』は身につまされる部分もなくはないが、やはりヒロインが独りよがり過ぎる感は否めなかった。

物語にせよ主題にせよ、その価値は受け取る者によって形を変える。しかし端正なる文章の価値というものは、小説の要素としては普遍性を持つものであると信ずる。かくも襟を正した風見氏の文章に対する態度に、私はひとりの読者として敬意を払いたい。

(※八雲紫氏は書面解答。『ビスクドールの枢』を推した)

『幻想演義』如月号 特集「第六回稗田文芸賞結果発表」より抜粋

◆受賞作発表と選評を読んで、メツタ斬りコンビの感想

霊夢 一番つままない結果になったわねえ。まさか受賞作無しなんて。

萃香 なんでもいいから出せばいいのにな。これじゃ盛り上がらないよ。書店も売るネタを失って頭が痛いんじゃない？ なんだかんだで受賞作は売れるし。

霊夢 選評は各自好き勝手言ってる面白けれど。結局今回はパチュリーと慧音の痛み分けだったのかしら？ 何もここまで意地張らなくてもって感じだけど。

萃香 そんな感じだねえ。しかし慧音が『華国英雄伝』を推すとは思わなかった。ねえ霊夢、慧音のこの読み、どう思う？

霊夢 『華国』の？ 深読みでしようと考えても。

萃香 いや、私も読み返してみたけど確かに慧音の言う読み方もできるんだよね。でも美鈴ってこんな巧かったっけ？ っていう疑問がどうしても（苦笑）。

霊夢 ふうん、読み返してみようかしら。私には解らない気もするけど。しかしパチュリーも慧音も少しぐらい歩み寄ればいいのにな。

萃香 そりゃま、譲れないもんってのはあるわけだよ。パチュリーは前回『天照戦記』褒めてたけど、あのときは好みの作品が無くて不満だったんじゃないかな（笑）。だから今回は好みの作品が来て熱くなっちゃったと。

霊夢 慧音もそういえば去年の選評で、意見が食い違ったときどうするか、みたいなこと書いてたわね。一年考えた結果がこれってのはどうなのかしらねえ。

萃香 やっぱり永月夜姫は外して正解なんだろうかねえ（苦笑）。意外と慧音って自分をコントロールできないタイプなのかも。

霊夢 むしろそういうのは文っばい気はするんだけど。

萃香 そういや『白狼』は結局文は反対したのかな。選評ではノーコメントだけど。

霊夢 パチュリーと慧音で採めてそこまで議論が及ばなかった感じじゃない？

萃香 文にしてみれば助かったのかな、それ（笑）。

（文々。新聞 睦月十五日号三面 文化欄より）

第六回稗田文芸賞、候補作がすり替え？

先月選考会が行われ、受賞作無しに決まった第六回稗田文芸賞について、予選委員の選出した候補作と、実際に発表された候補作のラインナップに食い違いがあることが十六日、関係者の証言で判明した。

具体的なタイトルは明かされていないが、本来の候補作は六作品で、一作がいつの間にか追加されていた模様。予選委員会が候補作をまとめてから、幻想郷文芸振興会が正式に発表するまでの間に、何者かが候補作リストをすり替えた可能性があるという。

幻想郷文芸振興会はこれについて、「今はまだコメントできる段階にない」としながらも、選考が受賞作無しという結果に終わったこともあり、本来の候補六作での再選考などは行わない方針であることを表明した。

《選考委員》

パチユリー・ノーレッジ (作家)

西行寺幽々子 (作家)

上白沢慧音 (作家・歴史教師)

八雲紫 (妖怪の賢者)

射命丸文 (文々。新聞記者)

稗田阿求 (稗田出版代表)

第七回稗田文芸賞

メツタ斬り! & 選評

《候補作》

風見幽香 『輪廻の花』

マーガレット・アイリス 『人形の森』

小松町子 『そして、死神は笑う。』

米井恋 『インビジュアル・ハート』

船水三波 『幽霊客船はどこへ行く』

厄井和音 『不幸のシステム』



第七回稗田文芸賞候補作発表

幻想郷文芸振興会は十五日、第七回稗田文芸賞の候補作を発表した。今回は六作がノミネート。初ノミネートが四人と、フレッシュな顔ぶれとなった。

選考会は二十六日、稗田邸にて開かれる。

候補作品は以下の通り。

- | | |
|----------------------------|-----|
| 風見幽香『輪廻の花』(稗田出版) | 二回目 |
| マーガレット・アイリス『人形の森』(博麗神社) | 三回目 |
| 米井恋『インビジブル・ハート』(旧地獄堂出版) | 初 |
| 船水三波『幽霊客船はどこへ行く』(命蓮寺) | 初 |
| 小松町子『そして、死神は笑う。』(是非曲直庁出版部) | 初 |
| 厄井和音『不幸のシステム』(鴉天狗出版部) | 初 |

(文々。新聞 師走十六日号 一面より)

博麗靈夢&伊吹萃香の稗田文芸賞メツタ斬り! 第七回編

十五日、毎年恒例の第七回稗田文芸賞の候補作が発表された。これを受けて毎度おなじみ博麗靈夢&伊吹萃香のメツタ斬りコンビが、授賞レースの模様を徹底予想! 前回はまさかの受賞作なしに終わったが、今回は果たして!?

◆受賞レース予想&作品評価(◎:本命 ○:対抗 ▲:大穴 評価はA~Eの五段階)

霊夢 萃香

- B - C 厄井和音『不幸のシステム』(鴉天狗出版部) 初
 ○ B - B 小松町子『そして、死神は笑う。』(是非曲直庁出版部) 初
 - C - C マーガレット・アイリス『人形の森』(博麗神社) 三回目
 - C ○ B 船水三波『幽霊客船はどこへ行く』(命蓮寺) 初
 ▲ B ▲ B 米井恋『インビジブル・ハート』(旧地獄堂出版) 初
 ◎ B ◎ A 風見幽香『輪廻の花』(稗田出版) 二回目

◆厄井和音『不幸のシステム』（鴉天狗出版部）初

予想：霊夢－ 萃香－ 評価：霊夢B 萃香C

◆小松町子『そして、死神は笑う。』（是非曲直行出版部）初

予想：霊夢○ 萃香－ 評価：霊夢B 萃香B

霊夢 どう考えても幽香で決まり。以上おしまい。

萃香 それじゃ記事にならないじゃん。

霊夢 そんなこと言われたってねえ。他はアリス……じゃないアイリス以外全員初ノミネートで、幽香は後援の稗田出版から出てるわけだし、これで幽香にあげなかつたら血を見るわよ。

萃香 まあまあ。前回受賞作無しかったから、二作受賞って線もあるじゃん。『雪桜の街』が獲ったときみたいになさ。

霊夢 解ったわよ。で、どれから行く？

萃香 んじゃ『不幸のシステム』から行こうか。厄払いの神様が、人間たちの不幸を解体していく話。デビュー作で初ノミネート。

霊夢 まあ、悪くないわよね。それぞれの《不幸》を原因から解きほぐしていく場面はミス터리っぽくて結構面白いし。新人でノミネートされるだけの作品ではあるわよね。票が割れたら伏兵的に上がってくるかしら。

萃香 ただちよっと、《不幸》な人間の書き方が一本調子なんだよねえ。どれもいい話なんだけど、ひとつぐらい苦い話があってもいいんじゃないかとも言われそう。まあ、いい話だから賞は獲れなくても人気は出るんじゃない？

霊夢 というかね、何も『そして、死神は笑う。』と一緒に候補にすることは無いわよねえ。

萃香 だよねえ。どっちも短編連作、神が人間に手を貸すっていう構図も似てるし。『不幸』は割と重めで、『死神』は軽めだけど。こっちは死にゆく人間の未練に死神が手を貸す話。状況はこっちの方が重いのに、読み口はこっちの方が軽いなよね。明るいし。

霊夢 『死神』は幽々子が「死神サボりすぎ」って文句言いそう。

萃香 うわ、ありそう（笑）。五話中ちゃんと魂回収したの二話だけだもんねえ。

霊夢 まあでも、『死神』の線はあるんじゃない？ 文なんかこういうライトなの好きだし。幽々子もパチュリーも湿っぽいのはからつとしたのが好きそうじゃない。阿求と慧音の人間組は行くとするば『不幸』の方かしら？ ま、そうなくても多数決で『死神』でしょ。

萃香 慧音は人助け好きだからどっちも好きなんじゃない？ 私はどっちでもいいけど（笑）。

霊夢 阿求あたりが選評で、人間と妖怪の死生観についてくさり語りそうね。

萃香 ありそうすぎて困るわそれ（笑）。

◆マーガレット・アイリス『人形の森』（博麗神社）三回目

予想：霊夢 - 萃香 - 評価：霊夢C 萃香C

萃香 マーガレット・アイリスはこれで三回目。今回はストレートな恋愛小説で来たね。人形に囲まれて暮らす孤独な人形師と、魂を得た人形の悲恋話。二回続けてわりと捻った話で落とされたからかな。

霊夢 人形ネタなのは相変わらずよね。他にネタも無いんだろうけど。

萃香 そんな身も蓋もない（笑）。まあしかし、ベタな話だよねえ。

霊夢 短いしさらっと読めるけど、それで終わっちゃうのよね。舞台もほとんど家から動かないし。また「心が描けていない」「世界が狭すぎる」とか言われて落とされそう。

萃香 心理描写を流す作風から踏み込まないと受賞は難しいのかな。

霊夢 解つても踏み込まないと思うけどね。本気出さないのも作風なもの。

萃香 一度ぐらい本気出してみても罰は当たらないと思うけどねえ。恋愛ものは『輪廻の花』もあるから、今回も見送られるだろうね。ていうか自分ところで出してんだからもう少しプッシュしてやろうよ、霊夢。

霊夢 いいのよ、別に獲らなくたってもう売れてんだから。

◆船水三波『幽霊客船はどこへ行く』（命蓮寺）初

予想：霊夢一 萃香〇 評価：霊夢C 萃香B

霊夢 『幽霊客船はどこへ行く』はこれ、どういうジャンル？

萃香 海洋冒険小説でいいんじゃない？ 海底を彷徨う沈没船に潜水艦で宝探しに行く話。

霊夢 幻想郷には海が無いから、イメージし辛いのよねえ。

萃香 選考でもそこがネックになりそうだね。偶然が話を左右する部分が多いから、ご都合主

義ってのも言われそう。潜水艦の艦長が探索チームのリーダー救出に向かうシーンは燃えるし、その後の脱出シーンもスリリングだし。天狗のテレビで映像化したら面白そうかな。

霊夢 海が無いのにどうやって映像化するのよ。個人的には割とどうでもいいし、獲る気もあんまりしないんだけど。にとりが選考委員なら可能性はあったのかしら？

萃香 河童は川じゃん（笑）。波瀾万丈のスペクタクルは文が好きだから推すでしょ。意外とこういうの書く作家って幻想郷には居なかったから貴重だし、個人的にはこれに獲ってほしいかな。そういう意味で対抗。

霊夢 そんなに文章上手くないし、話も単純だし無理じゃない？

萃香 難しいだろうってのは解ってるってばさあ（苦笑）。

◆米井恋『インビジブル・ハート』（旧地獄堂出版）初

予想：霊夢▲ 萃香▲ 評価：霊夢B 萃香B

萃香 で、今回の問題作『インビジブル・ハート』。

霊夢 紫とパチュリーがものすごく好きそうね、これ。

萃香 全く（笑）。心を閉ざした少女の一人称で始まったかと思ったら、いきなりその少女が死んじゃって、肉をついばみにきたカラスと友達になったと思ったら火葬されて、でも意識だけは残ってカラスに乗り移って——っていうとホラーなんだけど。

霊夢 なんでそこからカラスと猫のラブストーリーになるのかしら。しかもそれが叙述トリックでラストにひっくり返されるし。

萃香 そして最後はタライが落ちてきて爆発オチ（笑）。いやあ呆気に取られたね。

霊夢 そのくせ、姉のストーリーへの絡め方なんかはすごく上手いのよね。わざとやってるのか、それとも天然なのかしら。

萃香 いやあ、天然じゃないかなあこれは。

霊夢 展開がカオスだから紫はすごく好きそうだし、こういう変な小説推すのはパチュリーの仕事だから推すでしょうけど、慧音なんかは怒りそうね。阿求や幽々子や文が味方につくとも思えないし、どうせ紫は欠席なんだから受賞は無いだろうけど。

萃香 いや、案外文あたりが好きかもよ？ ギャグとして読めばかなり笑えるし。

霊夢 ギャグなのこれ？

萃香 どう読むのもアリ、っていう意味じゃ一番面白いんじゃないかな。

◆風見幽香『輪廻の花』（稗田出版）二回目

予想：霊夢◎ 萃香◎ 評価：霊夢B 萃香A

霊夢 最後に風見幽香『輪廻の花』。

萃香 大本命だね。生まれ変わる人と生き続ける妖怪の愛を、繰り返し咲く花の姿に託して語る時を超えたラブストーリー。前回はガーデニング小説『優しい花を咲かせましょう』で落ちて、ほのぼののだけじゃ獲れないっていうんでこれを書いた。『レインボウ・シンフォニー』とか『雪桜の街』コースだね。

霊夢 でもこれもベタな話じゃない？ あんたこういうの苦手じゃなかったっけ。

萃香 こっちは平気。いや『雪桜の街』と何が違うかって言われると困るけど（苦笑）。ともかく、作品としちゃ上手いよ。主人公は五度の人生でそれぞれ同じ女性と巡り会ってるのに、どの人生でもヒロインの印象が違う。花を愛する可憐な少女かと思えば、主人公をいたぶって楽しむ

暴君だったり。だけど通して読むと、ヒロインの軸は一切ぶれてない。

霊夢 語り手の立場によって見え方が変わる、っていうのをきちんとヒロインの魅力に繋げるわけだから、まあ達者よね。

萃香 テーマにしてる花のセレクトのセンスもいいし、花言葉の使い方も巧み。何より。

霊夢 何より？

萃香 四話目で向日葵畑の真ん中で酒を酌み交わすシーンが最高。

霊夢 そりゃ、あんただけでしょ。

萃香 いや、文にも同意して貰えると思うなあ。

霊夢 個人的にはこれも割とどうでもいいんだけど、受賞作が出るならこれでしようね。

萃香 特に強く反対しそうな選考委員も居ないしね。阿求は特に身につまされるんじゃない？
何しろ転生ネタだしさ。割と声の大きい選考委員狙い打ちだね(笑)。

霊夢 稗田出版だし。

萃香 そこは商売だから仕方ないじゃん(苦笑)。

◆ まとめ ◆

萃香 結局『輪廻の花』が当確で、もし二作受賞なら『死神』かな？

霊夢 『死神』に幽々子かパチュリーあたりが文句言ったら、『不幸』が伏兵的に上がってくるかもね。『幽霊客船』は文次第かしら。あとは『インビジブル・ハート』がどうなるか。

萃香 前回に関しては慧音は反省してたみたいだけど、パチュリーはあんまり反省してないっぽいからなあ（苦笑）。また一点推して意地張らなきやいいけど。

霊夢 さすがにそこまでやったらレミリアと同レベルじゃない？

萃香 （苦笑）。しかし『不幸のシステム』と『人形の森』は被ってるわけだから、外して良かったんじゃないかなあ。代わりに永月夜姫の『満月はもう来ない』と富士原モコの『屍は二度よみがえる』でも入れればバランス取れたのにねえ。獲れるかどうかは別として。

霊夢 そのふたつ候補に入れたら冷静に評価出来なさそうな選考委員がいるじゃない。

萃香 やっぱりその配慮なのかなあ（苦笑）。

（文々。新聞 師走二十日号 三面文化欄より）

第七回稗田文芸賞に風見幽香さんの『輪廻の花』

第七回稗田文芸賞は二十六日、人間の里・稗田邸にて選考会が行われ、風見幽香さんの『輪廻の花』が受賞作に決まった。授賞式は来月五日、太陽の畑にて行われる。

選考委員の上白沢慧音氏は、『輪廻の花』『そして、死神は笑う。』『インビジブル・ハート』の三作品の間で意見が割れ、思いがけず長丁場の選考となりました。最終的には決戦投票で最も高得点を集めた『輪廻の花』が受賞作に決まりました」と選考の経緯を語った。

風見幽香さんは、太陽の畑に暮らす、花を操る妖怪。『輪廻の花』は、何度も生まれ変わる人間と、長い時間を生き続ける妖怪の出会いと別れを、花の姿に託して紡ぎ上げる連作長編形式の恋愛小説。

選評は睦月十日発売の『幻想演義』如月号に全文掲載される。

風見幽香さんの受賞のことば

「授賞は光栄。この本は、スターチスの花束とともに、ある人に捧げるわ」

《選評》

異才の出現 パチュリー・ノーレッジ

前回の選考会も採めに採めたが、今回も採めるだろうという予感があった。自分自身、その火種を撒くつもりで選考会に臨んだのである。火種とはすなわち、米井恋『インビジブル・ハート』のことだ。票が割れるだろうというのは覚悟していたが、案の定ふたりが強硬に反対する形になった。

私は推した。「そもそも小説として破綻している」という他の選考委員の指摘はもったもである。一般的な小説の作法からは著しく逸脱した作品だ。ストーリーに整合性は無いに等しく、結末は脱力という他無い。それでも私は推した。推さざるを得なかった。

受賞作となった風見幽香『輪廻の花』に不満は無い。受賞作として恥じるところのない秀作であり、世間にも受け入れられるであろう。しかし文芸の価値が多数決で決まるのであれば、それは書店のベストセラーランキングに任せておけば良い。稗田文芸賞の価値とは、幻想郷の文芸に新たな可能性を見いだす異才を発掘するところにあると私は信ずる。

それ故に私は『インビジブル・ハート』を推した。ここにあるのは、幼子のような原初的な言語の混沌であり、野蛮な空想の氾濫である。凝り固まった文芸の価値観に風穴を開けるに足るものである。だがいかんせん、もうひとりの推薦者である八雲紫委員の欠席もあり、態度を

保留したふたりの委員の賛同も得られなかった。彼女がいてくれれば、と思ったのは初めてのことである。今後もう無いだろうとは思うが。

その他の作品には簡単に触れる。『そして、死神は笑う。』は生死を題材としながらの軽さが焦点となったが、評者はそれ以前に死神の死神らしからぬ態度に疑問を覚えた。『不幸のシテム』と『人形の森』の二作は、登場人物の描き方に小説的なふくらみに欠けた感は否めない。『幽霊客船はどこへ行く』は大変面白い娯楽小説だが、ストーリーの展開が作者の都合に左右されている感が端々に見え隠れした。

繰り返すが『輪廻の花』に不満は無い。本作が賞を受けること自体は喜ばしいことである。しかし『インビジブル・ハート』をなぜ推し切れなかったのか、今は評者の力不足を嘆くばかりである。

美味しいことば 西行寺幽々子

執筆は料理に、読書は食事に似ているわ。たとえば目の前に白いご飯を用意したとしても、それをお茶漬けにするか、おにぎりにするか、チャーハンにするか、オムライスにするかは料理する者しだい。もちろん、店でお茶漬けを頼んでチャーハンを出されたのならば文句を言うて然るべきだけれど、チャーハンですよ、と言われて出されたものに対して、チャーハンであ

ることに文句を言っても仕方ないではないの。チャーハンとしての出来不出来を論じるべきであって、それがおにぎりでないことに文句を付けても何も始まらないわ。今回の選考会ではそのようなことを感じさせる議論が多かったように思うわ。文学観の違いと言ってしまえばそれまでではあるけれど……。

好感を持ったのは『そして、死神は笑う。』ね。五つの短編からなる連作だけど、内容はたいたことではないわ。漬物のようなお話。生と死を扱っているのに、たくあんをポリポリと囙るような読感を与える筆致は素朴で味わい深いわね。死神が仕事をきちんとなしなことに不満があるけれど、受賞作として推していると思えたので票を投じたわ。でも、生と死を扱いなから軽すぎるとする他の委員の反対があつて、最終投票で授賞を逃してしまい残念。とっても美味しいたくあんだっただけどね。

受賞作となった『輪廻の花』は、素材そのものはありふれているけれど、細部まで気の配られた職人の仕事。非常に美味しいラーメン、カレーという類のもので、やっぱりこういうものを食べると安心するのね。少しぐらい未熟なところがある方が、個人的にはかわいげがあつていいと思うけれど。

その他の作品は、まあ他の人に任せましょう。どれも愛情がこもっていて美味しかったけれど、愛情が一番の調味料、が通用するのは親しい同士の間だけ。皆に読ませる作品は、愛情以上の素材と技術が必要なのね。

文章の作法 上白沢慧音

背筋の伸びる文章、というものがある。読んでいる側に、これは読み流していいものではない、と居ずまいを正させる、そういう力のある文章だ。受賞作となった風見幽香氏の『輪廻の花』は、まさしくそのような文章で綴られる、姿勢の良い文芸作品である。

作者が読者の心を揺さぶろうと企図したとき、文章は過剰になり、表現は幾重もの衣を纏って重くなる。その重さはかえって心を萎えさせ、揺さぶられてなるものかと身構えさせてしまう。それが『輪廻の花』の抑制の利いた筆致はどうだろう。「薄紅の花弁は、ただ、風に流れていく。」——あるがままの花が、生を彩るように、あるがままの言葉が、物語を彩る。優雅にして可憐、されど端正。過不足の無い匠の筆である。何の迷いもなく推した。

その文章を読んでしまうと、他の作品はやはりいかにも見劣りする感は否めなかった。特に、強く推す委員のあった『インビジブル・ハート』は読むに耐えない。破綻した文章、破綻した構成、小説作品として成立し得ていないものを《既成の枠組に収まらぬ異才》などと持ち上げる風潮を私は良しとしない。言葉を書き、読み、教える立場にある者として、そのような作品が商品として流通していること自体に懸念をおぼえる。

『不幸のシステム』は題材に好感を持って読んだが、好感と評価は別である。人間の弱さを描きつつも、人間を庇護の対象としてしか見ない人間観察の浅さを感じた。作者はもともと人間に寄り添った視点を持つべきであろう。『そして、死神は笑う。』も、人間の生と死を扱いな

らいかにも軽いその内容は、やはり人間側から遠い者が人間を描こうとする限界であろうか。『人形の森』も同様である。

『幽霊客船はどこへ行く』は娯楽小説としては上出来だが、過剰にして不足の多い、『輪廻の花』とは対極の粗雑な文章が鼻についた。ストーリーを語るだけならば小説である必要はない。小説であることに意味のある文章を読ませてほしい。

執筆とは、最適な言葉を己の中から選び抜いていく作業である。その作業にどれほどのコストを支払っているか、どれほどの言葉を己の中に蓄積しているか、それが文章の価値を決める。そのようなことを強く感じさせる選考であった。子供たちに読ませたい文章、という点でやはり『輪廻の花』は頭ひとつ抜けている。文句のない受賞に賛辞を送りたい。

エンターテインメントであるということ 射命丸文

第一回から選考に参加していますが、毎年ワンシットティング、読み始めたらずまらない一級の娯楽作品に出会えるこの選考はひそかな楽しみでもあります。今回、そのような幸福な出会いとなった作品は、船水三波氏の『幽霊客船はどこへ行く』でした。海洋、深海という幻想郷では馴染みのない世界を舞台としながら、波瀾万丈、一気通読のエンターテインメントに仕上げた作者の腕前は並みのものではありません。丹念に描かれた探索チームと潜水艦スタッフの

絆、そしてハラハラドキドキの脱出劇。「ああ、面白かった！」と本を閉じる幸福に浸ることのできる、まさに娯楽小説の鑑というべき作品でありました。文章が粗雑である、展開が都合主義であるという批判の多さから残念ながら落選となりましたが、エンターテインメント性ではやはり本作が随一でしょう。本の価値とは、読者を楽しませる娯楽であることです。出鱈目であろうとも、眉唾であろうとも、楽しいものが正義です。娯楽としての価値は、今回の候補作で本作に勝るものは無かったと私は信じています。

しかし、前回ほどではないにせよ、今回の選考も紛糾しました。第一回の投票では、『輪廻の花』に二票、『インビジブル・ハート』に一票、『そして、死神は笑う。』に一票、『幽霊客船』に一票（これは私です）と票が割れることとなりました。特に『インビジブル・ハート』を巡ってのパチュリー委員と、阿求・慧音委員との一刻以上に及ぶ論戦はそれだけで一本書が書いてしまいそうですが、紙幅が足りないのが残念です。慧音委員とパチュリー委員が互いにスペルカードを取り出すところまで行った、とだけは書いておきましょう。

結局議論は平行線となり、反対票の最も少ない『輪廻の花』が受賞作に決まりましたが、私はこの作品には消極的に反対しました。確かによくまとまった達者な作品であり、反対すべき点は特に無いのですが、何かこう、他人宛のラブレターを読んできましたような、居心地の悪さと気恥ずかしさを覚えるのです。第四回の『雪桜の街』も推せなかった私は恋愛小説とは相性が悪いのかもしれないので、同じ恋愛小説の『人形の森』も合わせてこれ以上の論評は差

し控えることにします。

私は『幽霊客船』は推しても無理そうだと判断し、幽々子委員とともに『そして、死神は笑う。』支持に回ったのですが、こちらも他の三名の同意は得られませんでした。生死の扱いの軽さが焦点となりましたが、軽いから良くない、という批判はいささか表層的に過ぎる気はします。『不幸のシステム』は不幸を重く書きすぎた感がありましたし、生も死も酒の肴に笑い飛ばすぐらいが幻想郷らしいと思うのですけれどね。

生と死と、愛 稗田阿求

人の生は、あまりに短い。永い時を生きる妖怪たちが見守るこの幻想郷において、たかだか数十年の歳月など、刹那の光芒に等しいに違いないだろう。それでも、人は生きる。生まれ、育ち、誰かを愛し、子を為し、己の生の証を残す為に生きる。それを繰り返し、繰り返し、人はこの幻想郷でも生き続ける。

御阿礼の子である私の生は。その人の中にあっても歪である。短い人の生よりもさらに短く、その魂だけが輪廻を繰り返す。されど、その理由は変わらない。私に与えられた意義は、この幻想郷の全てを記録し綴ること。それはしかし、同時に私自身の生を、この幻想郷に刻みつけることでもある。

記録する為に、私は生きる。記憶する為に、私は生きている。その記憶は、記録は、私の為のものであり、——私に触れあう誰かの為のものでありたい。私を知る誰かが、いつか私の身体が朽ち果て土塊に還った後に、私の刻んだ記録、記憶に触れて——稗田阿求という存在を思い返してくれば、それに勝ることはない。

『輪廻の花』である。敢えて自惚れるならば、これは私のための物語であると確信した。推さねばならぬと声が出た。繰り返される人の生と、繰り返される花の生、それを見守る者、愛する者。刻みつけた記録、記憶の儂さと、その強さが、記された一文字一文字から、書を捲る指に伝わり、震えた。記される言葉は有限である。されど、目に見えぬ心に刻まれる言葉は無限である。この作品は、その無限の言葉を、有限の言葉で語り尽くした。選考委員という立場を忘れ、ただ涙した。愛おしいと思った。それが全てである。

私は恋愛至上主義者ではないつもりだ。愛、という言葉はあまりに包括的に過ぎ、焦点をぼかしてしまふ。されど——痛い程に純粹なそれは、何よりも強く刻まれる言葉なのだ。心に刻まれる言葉、目に見えぬ文字。記録する者、記憶する者として、何よりもそれを愛おしみ、慈しみたい。それ以外の言葉は無い。

私の歪な生と死の狭間にも、刻まれる言葉はあるだろうか？

（八雲紫氏は書面解答『インビジブル・ハート』を推した）

〔幻想演義〕如月号 特集「第七回稗田文芸賞受賞作決定」より抜粋

◆受賞作発表と選評を読んで、メッタ斬りコンビの感想

霊夢 予想通り過ぎてつまんないわねえ。選考自体は割れたみたいだけど。

萃香 阿求の選評が凄いよ。ほとんど自分のことしか語ってない(笑)。選評なのに、選評する気ゼロ。こままでくると潔いというか。

霊夢 文の選評がいかしてるわね。「他人宛のラブレター」って、要するに『輪廻の花』って幽香が阿求へ向けて書いたごく私的な作品なんじゃないかってことでしょ？ 実際わりとそんな感じのところあるし。まあ、阿求以外が読んでも良い作品になってるから他の面々も強く反対はしなかったんだろうけど。

萃香 慧音が完全に味方についたのが大きかったかな。相変わらずくそ真面目な選評だよねえ。でも「子供にたちに読ませたい文章」って、寺子屋の子供たちは『輪廻の花』読んでも解らないと思うけど(苦笑)。

霊夢 『インビジブル・ハート』は案の定だったわねえ。まあ、あれに慧音が怒るのは仕方ないと思うけど。パチュリーが「彼女がいてくれれば、と思ったのは初めてのことである。」なんて言ってるけど、もし紫が選考会に居たらどうなったのかしらね？

萃香 大勢は変わらなかつたんじゃない？ 紫の場合、推す推さないはあっても強硬に主張することも反対することもまあ無いだろうし。

霊夢 ま、確かにね。さっさと藍に譲ればいいのに。

萃香 文はやっぱり『幽霊客船』と『死神』支持だったね。でも「出鱈目であろうとも、眉唾であろうとも、楽しいものが正義です。」ってそりゃあんたの新聞作りのポリシーだろう（笑）。ま、小説に関しちゃ同意するところもあるけどさ。

霊夢 幽々子だけは相変わらず我が道を行ってるわねえ。いつものことだけど、選評読んでたからお腹空いてきたわ。

萃香 じゃあ呑む？

霊夢 空きっ腹を酒で満たすのは鬼だけよ。

（文々。新聞 睦月二十日号 三面文化欄より）

稗田阿求氏が結婚

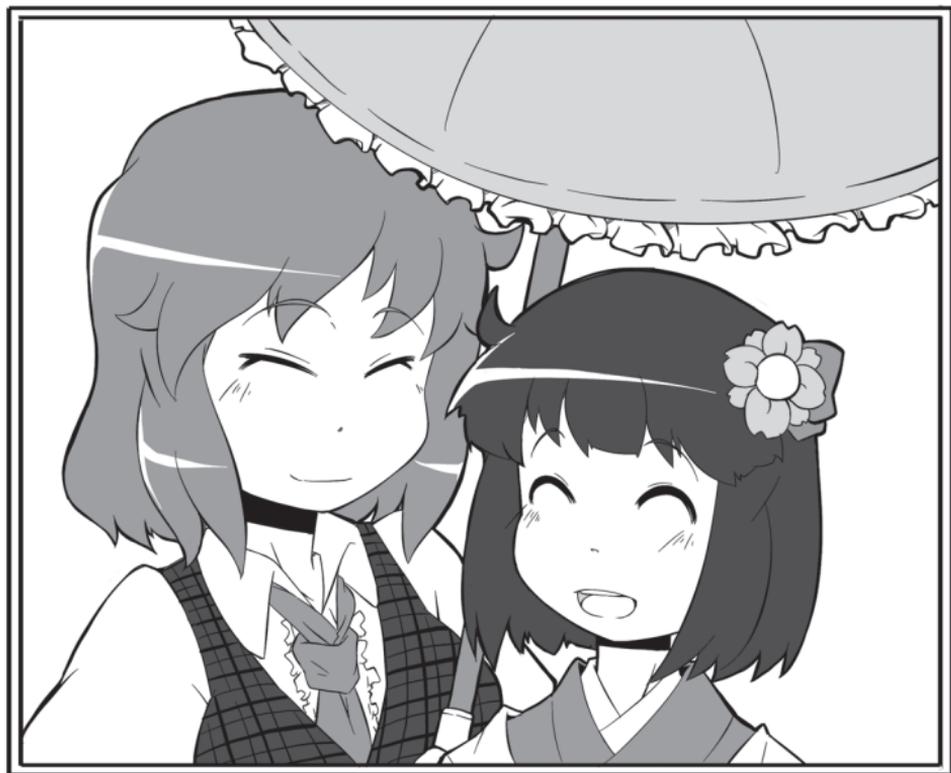
稗田家は二十八日、現稗田家当主、稗田阿求氏が結婚すると発表した。

お相手は風見幽香氏。風見氏は太陽の畑に住む妖怪で、作家として『輪廻の花』で第七回稗田文芸賞を受賞している。既に入籍は済ませ、式は内々で済ませる予定。稗田家当主が同性の妖怪と結婚するのは異例だが、稗田の一族は血縁により維持されるわけではないので、今後の阿礼乙女の誕生に関しては問題無いとのこと。

人里では成婚を祝し、三日より祝賀の宴会を博麗神社と人里の広場にて開催する予定。

阿求氏は本紙の取材に対し「贈られ続けていた花に、ようやく相応しい言葉を返すことができました」と笑顔でコメントした。

(文々。新聞 弥生一日号 一面より)



博麗靈夢と伊吹萃香の稗田文芸賞メツタ斬り！あとがき

萃香 あとがきだったてき。何喋ればいいのかな？

靈夢 知らないわよ。ていうか、なんで私たちがあとがき担当なの？

萃香 一応共著扱いになるらしいよ。私らは喋ってただけなんだけどねえ（笑）。

靈夢 ま、なんでもいいけど。しかし、今見るとどれもこれも懐かしいわねえ。

萃香 こんなことも話したつけねえ、って感じだね。私に加わったのは三回からだから、都合五年分か。もうそんなになるんだねえ。

靈夢 年寄りくさいこと言ってるんじゃないの。

萃香 しかし、こうして改めて並べてみると、幻想郷で小説が流行っていった経緯とか、稗田文芸賞の傾向とか選考委員の好みとか、割とはっきりして面白いね。

靈夢 稗田文芸賞についての史料としちゃ出来じゃない？ ただし、だからってこれを読めば幻想郷の文芸の全部が解るわけじゃないから、そこは誤解しないよーに。

萃香 受賞作家のその後の作品とか、候補漏れした作品とか、そもそもジャンル違いのジュヴナイルとか一部で流行ってる耽美系とか、そのへんはノータッチだからねえ。

靈夢 私らの評価や選考委員の評価だって一面に過ぎないんだから、ブックガイドにするのはいいけどあんまり鵜呑みにしないことね。

萃香 そういうことだね。自分で評価は自分で読んで定めなきゃ。ここでボロクソに言われた作品が、誰かにとっちゃかけがえのないマスターピースってこともある。小説ってのはそういうもんさね。だから面白い。というわけで、好きな作品の評価が芳しくなくても笑って許してちょうだいな。御免（笑）。

霊夢 ところで、なんで第七回なんて微妙なところで本にまとめるのかしらね。第十回とか区切りのいいところでやるなら解るけど。

萃香 そらアレだよ、この本自体が結婚報告代わりなんでしょ（笑）。

霊夢 あー。そういうこと。

萃香 気持ちは解るけどね（笑）。ところで霊夢、今年の第八回は誰が獲ると思う？

霊夢 こないだ新作出したし、そろそろ魔理沙あたりが来るんじゃないの？　ていうか、それはそのうちまた嫌ってほど語らされるんだから今度でいいでしょ。

萃香 へいへい。じゃ、とりあえず今日はこのへんにして、打ち上げ行こうか！

霊夢 あんたに付き合ってたら身体がいくつあっても保たないっての。

【作者別索引】

- 秋静葉 105
十六夜咲夜 11, 27, 78
因幡てゐ 135
宇津保鈴 46
永月夜姫 42, 107, 163
大橋もみじ 103, 131
風見幽香 127, 161
上白沢慧音 44, 54
河城にとり 104, 130
霧雨魔理沙 58, 100
小松町子 107, 157
米井恋 160
西行寺幽々子 28
白岩怜 29, 57, 82
虹川月音 56, 79
パチュリー・ノーレッジ 16
富士原モコ 107, 163
船水三波 159
星丸小虎 46
マーガレット・アイリス 80, 107, 133, 158
ミス・レッドラム 11, 25
ミスティア・ローレライ 76
水橋パルスィ 126
門前美鈴 11, 26, 46, 77, 129
厄井和音 156
八雲藍 60
八坂神奈子 102

※原則として

具体的に作品の内容への言及がある場合は「具体的な言及の初出ページ」を、タイトルのみ言及である場合は初出ページのみを記載した。

【タイトル別索引】

<ア行>

明日を思いだして 78
あの月の向こうがわ 42
天照戦記 蛙は口ゆえ蛇に吞まるる 102
インビジブル・ハート 160
うちの上司が横暴なんですけど。 103
落ち葉の季節に逢いましょう 105

<カ行>

華国英雄伝 129
川の流れの果てる先 130
キカイノコトバ 104
クリムゾン・ナイト 11
紅の血脈 77
クロック 27
幸運エスケープ 135
氷の王国 29

<サ行>

桜の下に沈む夢 28
殺人人形とタイムトラベラー 11
さようなら、恋 126
屍は二度よみがえる 163
神剣動乱 44
戦国春秋 11
そして、死神は笑う。 157

<タ行>

地の底のイカロス 46
時の密室 107

<ナ行>

ナイトメア症候群 25
人形の森 158
猫のための方程式 60

<ハ行>

白狼の咆吼 131
ビスクドールの枢 133
百万回目の死 107
風雲少女・リンメイが行く！ 46
不幸のシステム 156
冬色家族 57
星屑ミルキーウェイ 58
星盗人と鏡の国の魔女 100

<マ行>

マスカレード・スコープ 80
魔法図書館は動かない 16
マリオネットは悲しまない 107
満月はもう来ない 163
満月を喰らう獣 54
ミッシングハンター・ナッツ 46
無責任一代記 107

<ヤ行>

優しい花を咲かせましょう 127
憂鬱ラプソディ 56
幽霊客船はどこへ行く 159
雪桜の街 82
夜に鳥籠の鍵を 76

<ラ行>

龍拳伝 26
輪廻の花 161
レインボウ・シンフォニー 79

※原則として
具体的に内容への言及がある作品は
「具体的な言及の初出ページ」を、
タイトルだけの言及である作品は
初出ページのみを記載した。

○月×日

稗田阿求『幻想郷縁起第一二四季増補改訂版』が発売。売れ行き好調。上白沢慧音『幻想郷の歴史』シリーズと合わせて買っていく人が多いので、隣に並べる。

午後、鴉天狗出版部の営業が売り込みに来る。来月の新刊は河城にとり『ステルス・マジック光学迷彩に挑んだ技術者たち』と厄井和音『不幸のシステム』。前者は光学迷彩技術の開発秘話を綴るノンフィクション、後者は新人作家のデビュー作。少し控えめに発注。

○月×日

『猫のいる暮らし』師走号が並べた途端九尾のお客さんに買い占められた。追加発注。

新刊コーナーで『ミステリー・サスペンスフェア』開始。永月夜姫『満月はもう来ない』と富士原モコ『屍は二度よみがえる』の売上が伯仲。ミス・レッドラム『不夜城ブラッド』はもうひとつ。POPでも作るべきか。笠原たたら『風が吹いたら傘屋がもうかる』は相変わらず売れる気配がない。ホラーとしてはやはりタイトルがダメなのか？

○月×日

オーナーの指示で霧雨魔理沙『グリモワール・オブ・マリサ』を平台に。魔導書は正直あまり売れないから別の本を置きたいのだが……。『星屑ミルキーウェイ』『星盗人と鏡の国の魔女』の小説二冊はまだ売れるからいいのだけど。

午後、いつものメイドさんが来店。『不夜城ブラッド』を五冊ぐらい買って行った。

○月×日

宗教コーナーでは相変わらず命蓮寺関連書籍が人気。聖白蓮『博愛の法』、寅丸星『あなたの人生の宝物大切なものが集まる生き方』ともに好調。博麗神社関連書籍は埃を被っている。そろそろ棚差しにすべきかもしれない。

午後、ジュヴナイルコーナーで男の子が、門前美鈴の『風雲少女・リンメイが行く!』シリーズを熱心に立ち読みしているのを見つける。立ち読みは本が傷むのでいつもなら注意するところだが、あまり熱心に読んでいたのでしばらく様子見。子供が本に夢中になっている姿を見るのは悪くない。

○月×日

そろそろ年末ということで、来年用のスケジュール帳やカレンダーが好調。

鴉天狗出版部の営業から貰った『不幸のシステム』を読み終える。これは自力で売らねばと営業さんに電話、発注を増やす。発売日に備えてPOP作成。

○月×日

紅魔館付属図書館の司書さんが来店。『紅魔館付属図書館蔵書目録』を貰うついでに、本について色々と話をする。本の盗難被害について互いにため息。

三輪雲衣の新刊『ネズミの僕はトラに嘔みつく』が入荷。とりあえず自分の分を確保。仕事が終わってからゆっくり読もうと思う。

○月×日

昨日発売の『週刊ブンブン』の内容に関してクレームの電話が来る。うちではなく鴉天狗出版部の方に電話してくださいと伝える。本の内容に関するクレームを書店に向けるのは止めてほしいと思う。

ジュヴナイルコーナーに星丸小虎の新刊『ミッシングハンター・ナッツ』が入荷。売れ行きはまずまず。宇津保鈴『地の底のイカロス』は良い作品だけにもう少し売れてほしいところ。寺子屋の先生に推薦図書にしてもらえないか訊いてみよう。

○月×日

西行寺幽々子の『食いだおれ幻想郷5 焼鳥放浪記』、魂魄妖夢『辻斬り双剣伝半霊の章』が発売。波及して伊吹萃香『孤独の呑んべえ』が売れて品切れに。慌てて発注。マーガレット・アイリス『人形の森』が女性客の間で好調。恋愛小説フェアを開くか検討。

○月×日

水橋パルスイ『世界なんて滅べばいいのに』が発売。人気エッセイと言うので多めに発注したのだが、初日の売れ行きは今ひとつ。とりあえず様子見。大橋もみじ『白狼の咆吼』シリーズがチャンネル109でドラマ化との情報。ちょうど在庫が少なくなっていたので、既刊をまとめて追加発注。

○月×日

先日熱心に『風雲少女・リンメイが行く!』シリーズを立ち読みしていた子が、シリーズの最新刊を万引きしようとしていたのを捕まえる。お小遣いが無くて立ち読みしていたのだけれど、どうしても欲しくなってしまうらしい。寺子屋の先生を呼んで叱ってもらう。

こういうとき、この子に本を自分が買い与えてあげるべきなのかで悩む。

○月×日

めっきり冷え込んできた。秋静葉『幻想郷紅葉ガイド第一二四季版』と秋穰子『実りの季節 豊穰神の農作指南』を返本。季節が過ぎてしまった以上売れ行きが見込めないため。

この季節になると売れる白岩怜『雪桜の街』を平積みにして、『人形の森』や風見幽香『輪廻の花』、西行寺幽々子『桜の下に沈む夢』などと並べて『冬の恋愛小説フェア』のPOPをつける。しかしその隣に並んでいるのは『白狼の咆吼』シリーズと、魂魄妖夢『辻斬り双剣伝』シリーズの剣豪小説。配置を考え直す必要があるか。

○月×日

『ステルス・マジック』と『不幸のシステム』が発売。POP効果かどちらも売れ行きはまらず。『白狼の咆吼』シリーズと合わせて鴉天狗出版部の本がここのとこ好調。

POPもつけてみたものの売れ行きが伸びる気配がない『世界なんて滅べばいいのに』を棚差しにしたら、いつの間にか平台に戻されていた。棚に戻すとまた誰かが平台に置いていく。気味が悪いので平台に置いたままにしておく。

○月×日

『幻想演義』睦月号が発売。恋愛小説特集ということで冬の恋愛小説フェアのところに並べる。

白岩恰の新作短編が載っているかどうかについての問い合わせが数件。小松町子『そして、死神は笑う。』を小さい女の子が買っていた。レジで何故かその女の子に、陳列方法をもう少し白黒はつきりすべきと説教される。あの子は何者だろうか。

○月×日

『ステルス・マジック』の波及効果か、八坂神奈子『エネルギー革命』、八雲紫『コンピュータの彼岸』もこのところ好調。ノンフィクションフェアとして面陳に。年の瀬ということでの今年のベストセラーランキングを出すための集計作業。

○月×日

オーナーが変装して『グリモワール・オブ・マリサ』を一冊買っていった。これで何度目ですかオーナー。

今年の稗田文芸賞の候補作が発表。平台に六冊並べる。『不幸のシステム』の候補作入りが嬉しい。受賞作の傾向からすれば今年は風見幽香『輪廻の花』が最有力か。お客さんに受賞作予想をしてもらうのも面白いかもしれない。

○月×日

飲み会シーズンのせいか、永江衣玖『空気の読める人・読めない人』に関する問い合わせが多い。『食いだおれ幻想郷』『孤独の呑んべえ』も引き続き好調。

午後、霖之助さんが来店。発売延期になっている『香霖堂日誌』はいつ出るのかと訊ねて見たが、曖昧に濁される。

○月×日

年間ベストセラーの集計完了。店頭に掲示。その効果か上位の本がまた少し捌けた。

今年の傾向としては信仰と技術に関連する本がよく売れた気がする。『博愛の法』は相変わらずコンスタントに捌けている。それ以外では森谷カエルのコミック『幻想戦隊セイレンジャー』も夏頃から非常によく売れた。

最近は年末年始をゆっくり読んで過ごそうというのか、長いシリーズや分厚い本を買っている人が目立つ。在庫の置き場所も馬鹿にならないのでありがたい。

○月×日

新年まであと一週間という今頃になって『世界なんて滅べばいいのに』が急に売れ始める。在庫が減って一安心だが、どうしてまた急に？

夜にはプリズムリバー騒霊楽団のコンサートがあるためか、行きがけに虹川月音『レインボウ・シンフォニー』を買っていくお客さんが多かった。サインでもしてもらおうのだろう。

○月×日

稗田文芸賞、受賞作は順当に『輪廻の花』。受賞の報が入るとともに、買い求めに来るお客さんが多数。さすがに影響力は高い。せっかくなので過去の受賞作も一緒に並べて稗田文芸賞フェア開始。受賞を逃した『不幸のシステム』『そして、死神は笑う。』あたりもコンスタントに売れており、個人的には満足。

○月×日

年の瀬、最後の営業日。店を閉めようとしたところでふたりお客さんが来る。

ひとりはあるときの子。握りしめたお小遣いで『風雲少女』の最新刊を買っていった。思わず顔がほころぶ。

もうひとりはヒラヒラの服を着てくると回っている変な少女。『ステルス・マジック』と『白狼の咆吼』の最新刊を買い、「ありがとう、厄いわね」と言い残して去っていった。意味はよく解らないが、少しいい気分です。

年明けの営業は四日から。それでは、良いお年を。

あとがき

きっかけは今年の一月、第一四二回芥川賞・直木賞の本家メッタ斬り！が無かったことでした。ラジオでやってたらしいんですがテキスト化してくださいよー。

そんなわけで前から構想だけあって暇潰しにチマチマ書いてた第七回を書き上げて創想話プチ（当時）に投稿。さすがにこれは誰得、と思っていたら思いがけずウケてしまって、なんか創想話における自分の代表作みたいな扱いになってしまいました。どういふことなの……。

というわけで、毎度どうも、浅木原です。

様々な試みの作品が日々生み出されている東方同人の中でも、たぶん唯一無二（未確認）の「架空書籍の書評」という形式の東方同人小説、『稗田文芸賞メッタ斬り！』をお届けします。未だにやっぱり誰得なんじゃないかと思ってますがまあ本になったものは仕方ない（笑）。

元ネタの大森望&豊崎由美『文学賞メッタ斬り！』シリーズは読み物としても面白くブックガイドとしてもけっこう有用な本なので、最初の本なんか内容が七年前なのでさすがに古いんですが、本作で興味を持たれましたら読んでみてください。ま、作中で萃香が言ってる通り、あまり鶴呑みにしすぎない程度に。

しかしメッタ斬り、最近ラジオに移っちゃって、本も出なくて、文章媒体で読みたい身としては寂しい限り。いろいろ大変なんでしょうけど一冊目からだいぶ経ってるし、また文学賞全般について新たに語り倒したバージョンでも出してもらえませんかねえ。

謝辞。いつもはカバー下やカバーデザインを手伝ってくれている相方・すけひろゆう氏と今回は初めてふたりで本を作りました。同人活動始めて三年半ちよい、最初期から手伝ってもらったのに今更初めてかよ！という感じですが、凛々しい表紙と愉快な挿絵、ありがとうございます。ましたー。今後ともよろしく願います。

それから、創想話に投稿した分を読んでくださった方と、本書を手にとられた貴方に。本当にありがとうございます。変な本ですが、お楽しみいただければ幸いです。

一緒に出ている『うみよんげ!』もよろしく願います。中身は実は繋がってますので。はい、次は二月の京都の秘封オンリー。少女秘封録の六巻が出る予定です。

その次は例大祭で、うみよんげの二巻の予定。その後は未定。ではまた、次の本でお会いできることを祈って。

2010/12/09 浅木原忍

BGM…『とある日本の職業野球』

稗田文芸賞メッタ斬り！

2010年12月30日 初版発行

2012年04月22日 2版発行

2018年10月08日 電子版発行

編 著 稗田阿求

共 著 パチュリー・ノーレッジ

博麗霊夢、伊吹萃香

著 作 浅木原忍

装 画 すけひろゆう

電子版編集 古翠

発 行 幻想郷文芸振興会

Rhythm Five

連絡先 <http://r-f21.jugem.jp/>

原 作 上海アリス幻楽団

本書の無断複製・転載を禁じます。

稗田文芸賞
メツタ斬り！

幻郷
文想
興芸
振會